

ラジオスタジオの相互行為分析

—平成9年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書（第二版）—

目次

まえがき	梶田美雄	1
第I部 本文を読む前に		
トランスクリプト記号一覧・配置図	空間班・人間班	5
Qシート	人間班	9
第II部 本文		
研究概要	梶田美雄	13
第1章 ラジオスタジオ空間におけるカテゴリー化	空間班	15
第2章 ラジオスタジオ内における相互行為分析 —チーフアナウンサーの二重性を中心として—	人間班	31
第3章 ラジオ番組内のコーナー終了部分における相互行為分析	インタビュー班	45
第4章 オープン・スタジオにおける番組参加者の志向性 —参加フレーム・マイク・リスナー—	FMやまのは班	57
第III部 付録		
第1章 トランスクリプト例	学生全員	71
第2章 インタビュー報告	インタビュー班	97
第3章 放送人においてレリバントなこと —放送関係者養成専門学校を訪ねて—	梶田美雄・森川弘章	161

まえがき

榎田美雄 (hcb00537@nifty.ne.jp)

この報告書は、ラジオスタジオにおける秩序の相互行為的分析をテーマとして行った1997年度徳島大学総合科学部開講科目「社会調査実習」（国際社会文化研究コースの選択必修科目であるが、コース内の組織である現代国際社会分野に所属している学生に関しては履修することを原則として義務づけている）の報告書である。

調査に協力していただいたABC放送（情報源秘匿のため仮名）、FMやまのは（同左）、関西放送文化連盟、放送芸術学院、ビジュアルアーツ専門学校・大阪の関係諸氏に感謝を申し上げたい。また、2度にわたって不足していた研究機材（ビデオカメラ等）を快く貸与して下さった高橋晋一先生（徳島大学）のご厚意がなければ、本実習調査は成立しなかった。御礼申し上げます。また、東京や筑波での私的研究会においてビデオデータに関する様々な分析上の指針を提示してくれた岡田光弘（筑波大学）、森田聡之（明治学院大学）、周藤真也（筑波大学）の各氏にもお礼の言葉を申し上げたい。折々に受けた助言をほとんどそのまま踏襲する形でなんとか年度内に研究の原稿化をすることができた。本書がいささかなりとも、この分野（相互行為分析、あるいは、エスノメソドロジック的ワークスペース研究）の研究の進歩に貢献するものとなっているならば、そのかなりの部分は上記3氏の高水準のコメントのおかげである。

なお、使用した機材（ビデオダビングマシン、ビデオプリンター等）の多くは徳島大学の備品だが、年度末になってさらに、「総合的教育・研究活動助成費」10万円が徳島大学総合科学部から与えられ、研究の進展と取りまとめに大いに役立った。学部当局のご配慮にも謝意を表したい。

さて、残りの紙幅で、私の調査実習の方針の簡単な解説と結びつけながら、班名の由来などの、本冊所収の諸論文の読解に役立つと思われる若干の情報提供をしておきたい。

まず、調査実習の目的と、方法としてビデオ分析を採用したことについて。

わたしは、大学の学部における社会科学学習の中心的課題は、「社会」というものをどのようにして実感するか、ということにあると思っている。もちろん、「社会」を実感させるために古典を読ませる、というような方針が取られることもある。けれども、残念ながら、書物からその書物に書かれた「社会」の手触りを感じ取らせる作業には、かなりの分量の、当人自身の読書経験と教員による解説が必要である。幸いにして、本学現代国際社会分野（社会学の教員3名と教育学の教員1名が所属）では、「社会調査実習」を開講しており、この授業を経由して「社会」を実感させることが可能、かつ、有効なように思われた。そして上記の目的をより効率的に達成するために、ビデオ分析の手法を採用した。社会科学における「ビデオカメラ」の登場は、生物学における「顕微鏡」の登場と同列に評価されることがある。音声付きで、明るく、そして充分繊細な画像が、たった300円弱のビデオテープで2時間以上も録画できてしまうのである。われわれは、撮影後、繰り返しビデオを見、静止画像にし、トランスクリプトを起こし、そして、これまで気付かれず、報告されてこなかったラジオスタジオにおける番組秩序を支える「相互行為秩序」の

詳細を、かなりの程度発見できたように思う。これは、わたしにとっても充分ワクワクする「社会の発見」であった。実習に参加した学生諸君も同じ興奮を味わってくれていたのではないか、と思っている。

つぎに、調査対象の選定に関して。

社会調査実習の調査対象の選定には、チェックポイントが2つある。一つは、学生全員が積極的に調査しようと思える対象であること（学生の問題関心との一致確認）、もう一つは、プライバシー問題が比較的生じにくい対象であること（相手側から拒否されないテーマの探索）である。

私は今回の実習の構想時、すなわち、シラバスでは、調査対象として「歯科医院もしくは、消防本部の通信指令室」を候補に挙げていた。しかし、4月になって、「歯科医院研究では、学生の関心を集めがたいだろう」と考え、さらに「通信指令室では、通報者のプライバシー保護の観点から学生の研究関与を認めてくれないだろう」とも考えて、窮余の策としてそのときレギュラーコメンテーターをしていたラジオ番組をふくめた「ラジオスタジオ研究」に調査対象を切り替えたのである。ちょうど、昨年（1997年）の春から、「FMやまのは」の放送が始まったこともこの決断を私に促した。「FMやまのは」は戸外のオープンスタジオを用いて放送を行っており、ABC（仮名）放送のような整ったスタジオでの相互行為よりも素朴で分析しやすいデータが得られるのではないかと期待できたからである（「FMやまのは」のオープンスタジオでの相互行為の実際については、4章を参照）。一年を振り返ってみて、この切り替えは、うまくいったのではないかと、思っている。

調査組織の組み立てについて。班分けのことなど。

調査を複数人で行うときには、一般的にいて、いかに最後の報告時に研究内容が重ならないよう棲み分けをするか、ということが重要である。これに失敗すると調査組織の参与者相互の人間関係が険悪になる。調査実習においては、この棲み分けをある程度は、教員がリードして行わなければならないだろう。私は、当初この目的から、4つの班を設置した。①「空間（研究）班」、②「人間（研究）班」、③「文献（研究）班」、④「インタビュー班」の4つである。各班には以下のようなテーマを与えた。

- ①「空間（研究）班」については、ア）ラジオスタジオの設備と人間との相互行為、イ）ラジオスタジオ内の調整室のディレクターとアナウンサーとのガラスを隔てた相互行為、の分析。
- ②「人間（研究）班」については、ア）アナウンサー同士の相互行為、イ）アナウンサーとスタジオ内のコメンテーターやゲストとの相互行為、の分析。
- ③「文献（研究）班」については、ア）番組スタッフが、番組づくりに用いている諸資料（「Qシート」や番組全体の「進行表」＝機械の人用＝を含む）、イ）番組スタッフが前提としている知識を示す資料（機材のマニュアル、新任者研修用の業務紹介マニュアル、放送関連専門学校での教科書等を含む）、ウ）上記資料の観点からみた行為者の相互行為、の分析。
- ④「インタビュー班」については、エスノメソドロジー的研究になじめない学生もいることを予想して、ア）アナウンサーへのインタビュー、イ）ディレクターへのインタビュー、ウ）コメンテーターへのインタビュー、の分析。

学生が当初は12名いたので、この4つの班に各3人ずつを割り振り、研究を開始した。しかし、研究を進めていくうちに、③「文献班」の研究が困難であることが判明した。ABC放送(仮名)には、新任研修マニュアルがなく、機械の操作にしろ、ディレクターとアナウンサーとのコミュニケーション方法にしろ、ありとあらゆることが、「ON THE JOB TRAINING」によって修得されていることが次第次第に分かってきたのである。そこで、それまでは、どの班もが自由にアクセスして良いデータとしていた「FMやまのは」のビデオデータを、「FMやまのはのデータ(データY)を主題にできるのは③班のみである」と定め、③班の名前も「FMやまのは班」に改名した。

その後、論文執筆過程の中で、この当初の枠組みはさらに組み替えられていく事となった。すなわち、結果としては、班の名前とその研究内容が一致しなくなったといえよう。たとえば、「空間班」と「人間班」はどちらも調整室とスタジオとのガラスを挟んだコミュニケーションを扱っているし、また、「インタビュー班」のメンバーも相互行為分析に意欲的であったので、ビデオデータを用いた分析を行っている。

これは、ビデオのデータというものが膨大で容易には分析し切れない、ということに由来する事態であるといえよう。とにかく、当初の「テーマの取り合い」という心配は杞憂に終わってほっとしている。

まだまだ書きたいことは多いが、報告書の本体は苦労話であるべきではなく、研究内容の報告であるべきである。私の調査に関する枠組的記述はここまでとするのがよいだろう。さいごに、このたった2単位の調査に、当該期間の大学生活の何割もの労力をつぎ込んでくれた学生諸君の努力を「ほとんど奇跡のようだ」と評価していることを記して、前書きを終わりたい。

第1部 本文を読む前に

トランスクリプト記号一覧・配置図

記号の説明 以下に示すものは、この報告書のトランスクリプトで用いられている記号である。これ以外の記号が用いられている場合は、その都度当該トランスクリプトにおいて、必要に応じてその意味が記されている。

- ／／ 複数行の同じ列におかれた二重スラッシュ：参加者たちの言葉の重なりが始まる個所を示す。
- = 言葉と言葉の間、もしくは行末と行頭におかれた等号：途切れなく言葉がつながっていることを示す。
- () 丸括弧：何か言葉が発せられているが、聞き取り不可能であることを示す。また聞き取りが確定できない場合は、当該文字列が丸括弧で括られる。
- (数字) 丸括弧で括られた数字：その数字の秒数だけ沈黙のあることを示す。また、0.2秒以下の短い間合いは「(.)」という記号で示される。
- : : コロンの列：直前の音が延ばされていることを示す。
- ハイフン：直前の言葉が不完全なまま途切れていることを示す。
- [] すみつき括弧：参加者の発話以外の諸行動の一部を示す。
- h h h hの列：呼気音を示す。
- | | | 各発話の上におかれた同一文字の列：その文字(I)で示された特定の事物もしくは、人物に視線もしくは顔が向けられていることを示す。
- . . . ピリオドの列：動作が始まりかけていることを示す。
- , , , カンマの列：動作が終わりかけていることを示す。
- n o d : うなずきを示す

以下に示すアルファベットは、その場面への参加者及び事物を表す。

データX：ABC（仮）で1997年7月6日に撮影

- [I]・・・アナウンサー（副部長）
- [S]・・・アナウンサー
- [G]・・・アナウンサー
- [D]・・・ディレクター
- [K]・・・コメンテーター
- [Y]・・・「阿波の歴史シリーズ」のゲスト
- [B]・・・「徳島エコノファイル」のゲスト（レギュラーゲスト）
- [W]・・・日本気象協会の人
- [J]・・・電話ゲスト
- [O]・・・電話ゲスト
- [A]・・・釣り師
- [F]・・・香道家
- [P]・・・Qシート、原稿
- [M]・・・モニター
- [?]・・・どこを見ているのか不明
- [腕]・・・腕時計
- [GP]・・・Gアナの原稿
- [学]・・・学生
- [中]・・・中空
- [下]・・・下
- [左前]・・・左前をみた
- [右]・・・右をみた
- [左]・・・左を見た
- [左下]・・・左下を見た

データY：FMやまのは（仮）で1997年7月6日に撮影

- [M]・・・FMやまのはのメンバー
- [S]・・・FMやまのはのメンバー
- [Y]・・・FMやまのはのメンバー
- [H]・・・FMやまのはのメンバー
- [C]・・・FMやまのはのメンバー
- [中]・・・中空
- [B]・・・FMやまのはのスタジオの前を通過する二人の女性
- [J]・・・FMやまのはのスタジオの隣接する川を通過するジェット・スキー
- [ア]・・・参加者が持つアイス
- [?]・・・不明
- [下]・・・下

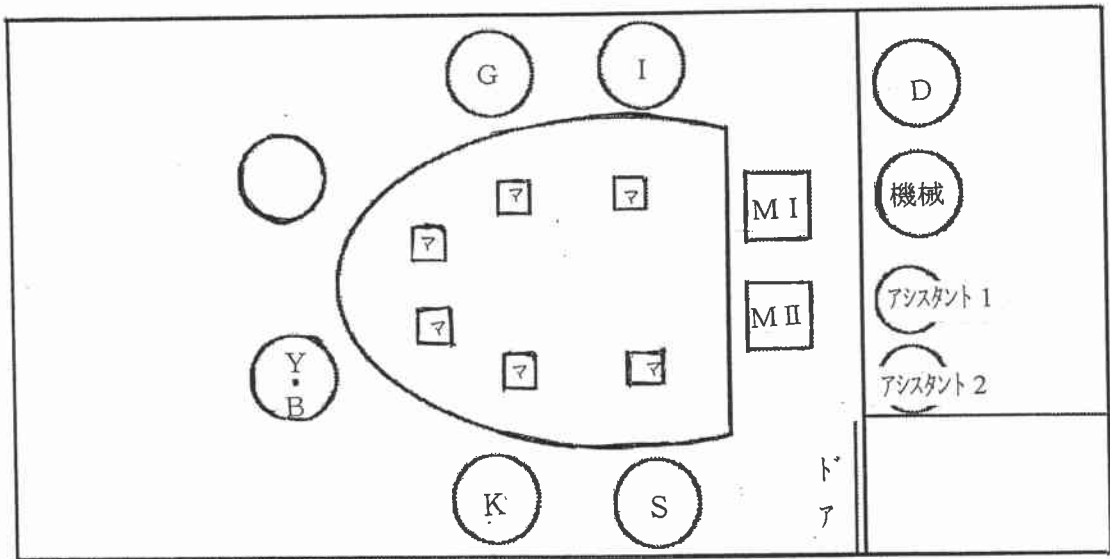
- [マ] . . . 参加者の前に置いてあるマイク
- [K] . . . 参加者が持つ缶ジュースと紙コップ
- [I] . . . 調整卓などの放送機器

データZ：ABC（仮）で1998年1月11日に撮影

- [I] . . . アナウンサー（副部長）
- [G] . . . アナウンサー
- [D] . . . ディレクター
- [K] . . . コメンテーター
- [B] . . . 「徳島エコノファイル」のゲスト（レギュラーゲスト）
- [W] . . . 日本気象協会の人
- [P] . . . Qシート、原稿
- [M] . . . モニター
- [?] . . . どこを見ているのか不明
- [中] . . . 中空
- [下] . . . 下
- [N] . . . アナウンサー
- [T] . . . 「徳島ウェーブレポート」のゲスト
- [E] . . . 「徳島ウェーブレポート」のゲスト
- [C] . . . 「おとなのためのこだわり講座」のゲスト

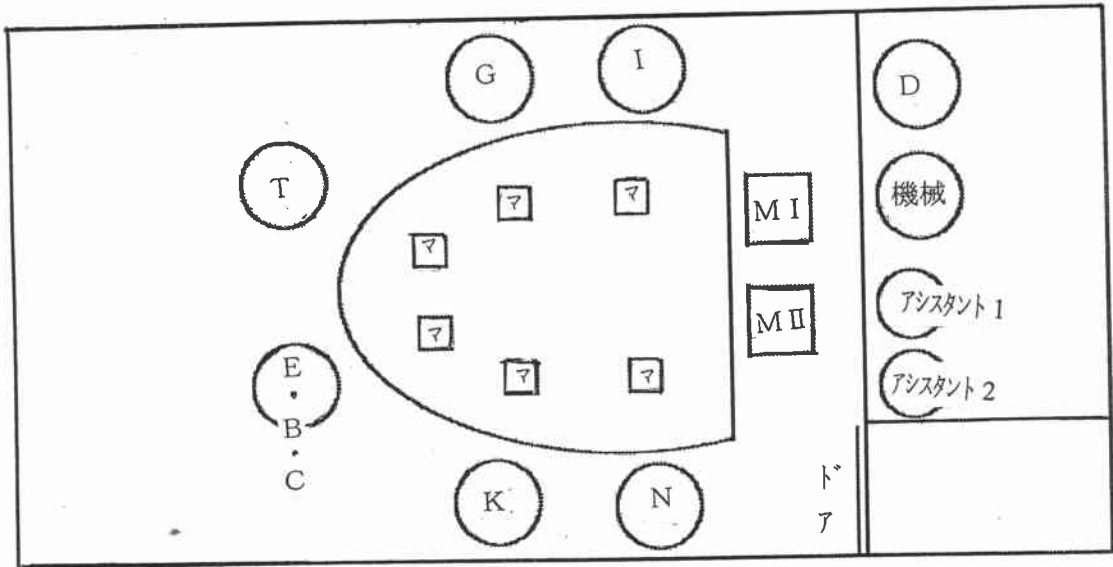
*登場人物の固有名、番組名はすべて仮名である。

スタジオ内の配置図（ABC） データX



D : ディレクター 機械 : 操作卓を動かす人 I、G、S : アナウンサー
 Y : 「阿波の歴史シリーズ」ゲスト B : 「徳島エコノファイル」ゲスト
 MI : ディレクターからの指示を映し出すモニター
 MII : 番組プログラムが映し出されるモニター
 マ : マイク

データZ



I、G、D、B、K、機械はデータXと同じ
 N : アナウンサー T、E : 「徳島ウェーブレポート」ゲスト
 C : 「おとなのためのこだわり講座」ゲスト

Qシート

サンデーウェーブ

7月 6日 NO. 314

9:00	TM & BG 前TM	DF▼ DF▼	3' 00"	<p>★THIS MORNINGS NEWS HEADLINE★ あいさつ G アナ、中国から帰国！スタジオ見学者もたくさんいます！ 今日のラインナップ コメンテーター紹介：徳島大学総合科学部 K さん</p>
	TM & BG 後CM BG 後CM BG	DF▼ TEL AF DF▼ AF DF▼	3' 00" ' 40" ' 15"	<p>★WEATHER INFORMATION★ 日本気象協会（Wさん）</p> <p>大海上気象情報（提供：四国マリーナ） （後ワケあけ）今週のニュースを振り返りましょう・・・</p>
9:18	JINGLE	DF▼	08"	<p>★ WAVE NETWORK ★ 各地のお天気</p> <p>☆ J さん（牟岐）こども文庫 もうすぐ海開き。</p> <p>☆ O さん（剣山）剣山ヒュッテ 梅雨の中休みで、剣山は小鳥や花で一杯。 来なかった夏 / ダイアナ・ロス</p>
	♪曲 ◇PTO 前TM	CD④ AF DF▼	3' 53" 1' 03"	<p>★ 徳島ウェーブ・リポート ★ （別紙参照）</p> <p>30分でわかる阿波の歴史シリーズ ～古代から中世にかけての阿波 今日、③回目です。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p>元県立文書館館長 Y さん</p> </div>
9:40	◇PTO	AF	1' 03"	<p>それではここでお知らせです。</p>
9:55	♪曲	CD④	4' 09"	<p>IF WE HOLD ON TOGETHER / ダイアナ・ロス</p>

10:00

SB
前TM

AF
DF▼

30"

★川と生きる〜吉野川紀行★ (別資料)

TR

3' 13"

釣り師 Aさん

10:05

◆PT③
前TM

AF
DF▼

1' 28"

★Sのワンダフル・ピープル★ (テープ素材: 別資料参照)

同録

香道家 Fさん

♪一曲

CD①

5' 38"

10:25

後BG
◆PT④

DF▼
AF

38"

前TM

DF▼

★徳島エコノファイル★ Bさん

本四連絡橋、通行料金案固まる

10:35

◆PT⑤

AF

1' 08"

前TM

DF▼

★ティーブレイク★ 今週は...

b曲

別の
CD②

3' 12"

マホガニーのテーマ / ダイアナ・ロス

J&BG

DF▼

7' 00"

★WEATHER INFORMATION★

日本気象協会 (Wさん)

★駐車場情報★

★ウィークリー: インフォメーション★

後TM

DF▼

1' 31"

★ニュース★

来週以降のラインナップ

★ENDING★

アナ尺: 58' 21"

SB: 58' 23"

TM&BM (テーマとバックグラウンドミュージック)

テーマ曲をだんだん小さくしていきBGMにすること

後CM コーナーの終わりにコマーシャルを流すこと

BG (バックグラウンドミュージック)

BGMのこと

DF▼ (データファイル・ディスクファイル)

MOディスク (光磁気ファイル) に、TMなど曲や音が入っているのを流すところ。▼は、ディレクターが見やすいようにつけてある

AF (オーディオファイル)

CMが全部入っている機械を使ってCMを流す。生CM以外はすべてAFである。

前TM コーナーの前のテーマを流すところ

JINGLE (ジングル)

流れを変える時に使う番組における区切り

PT (パーティシペイティング・コマーシャル)

番組内で提供表示なしで挿入されるCM

同録 (同時録音)

ゲストが自分が出演したところを録音したものが欲しいということがあるので同時録音している

SB (ステーションブレイク)

番組と番組の間のこと。CMタイム

TR (テープレコーダー)

録音したものの放送

アナ尻 (アナウンサー尻)

この時間までにアナウンサーは話を終えなければならないこと

第II部 本文

研究概要

檜田美雄（徳島大学総合科学部）

奥田さやか、ほか徳島大学総合科学部国際社会文化研究コース所属の9名は、1997年4月から1998年10月に掛けての間、総合テーマ『ラジオスタジオの相互行為分析』の下で、4つの班に別れて研究を行った。

研究は、地域のABC放送（情報源秘匿のため仮名）とFMやまのは（仮名）のラジオ放送をしている現場に繰り返し取材に出向き準備をしたのち、そこで総計6時間にわたるビデオカメラ撮影を行い、さらにその動画の分析を行いつつ論文執筆をする、という形でなされた（国際社会文化研究コースの『社会調査実習（檜田の開講科目）』の枠を利用）。また、放送局の各種スタッフ（アナウンサー、ディレクター、コメンテーター等）に対するインタビュー調査、関西の放送関係者養成の専門学校への取材も補行的に行った。以下、主な知見を各班の論文ごとにあげて研究概要とする〔「インタビュー」（荒木・藤井・李）と「専門学校取材」（檜田・森川）については、内容紹介を第3部の当該の章に譲る〕。

（1）空間班（奥田・杉野・高木）「ラジオスタジオ空間におけるカテゴリー化」

ラジオ番組は、リスナーにむけて放送されている。この当たり前に思える事態はしかし、実際にはどのような仕方でも確認できるのだろうか。この研究では、上記の問いを、ゲストとアナウンサーの相互行為分析でもって答えることを試みた。結果として、以下の2点の知見が得られた。①アナウンサーは、リスナーの代理として構造的に聞き役になっている（打ち合わせ時に前もって質問し、答えを知っていることを本番で再度質問している）。②ゲストは、構造的に話し手である（アマチュアのダンサーであっても、正当な知識の所有者としての話し手であることを表示すべき場所では、「プロの人」として指名され語っている）。

（2）人間班（津村・寺尾・出口）「ラジオスタジオ内における相互行為分析—チーフアナウンサーの二重性を中心として—」

ラジオ番組は時間的編成を持っている。すなわち、時間に関わるプログラムが存在し、録音されたコーナーと生放送のコーナーが交互にある。定時に放送することが義務づけられたコマーシャルも存在する。このような状況の中で、チーフアナウンサーは、一方ではコーナーの登場人物でありながら、もう一方では、生放送を時間どおり進行させる現場監督の役割も担っている。ではそれはどのように担われているのだろうか。知見はここでも2つ。①非音声的振る舞い（手振り）を用いてまわりを急がせている。②サブアナウンサーは折に触れチーフを見て、チーフの進行速度への統制を、助けている。

（3）インタビュー班（荒木・藤井・李）「ラジオ番組内のコーナー終了部分における相互行為分析」

インタビュー班は各メンバーへのインタビューをまとめる一方で、他班同様のビデオ

分析も行った。注目したのは、ラジオ番組中のコーナーの終了部分である。ここでは、なんとゲストへの別れの挨拶が2度行われていたのである。これはなぜだろうか。この点に関して、以下のような発見がなされた。①最終の挨拶の内一回はオン・エア中のコーナーの終了としての挨拶であり、もう一回はリスナーが聞いていないことを承知したうえでの挨拶であった。②ラジオスタジオは、時間的編成と空間的編成によって何重にも組織化されており、挨拶はその境界線で繰り返し行われていた。

(4) FMやまのは班(森川)「オープンスタジオにおける番組参加者の志向性」

FMやまのは班は、川沿いの公園で週末だけ電波をとばしているFMやまのはのオープンスタジオを観察した。機材が十分ないなかで、番組作成者たちがどのように共同で業務処理を行っているか研究した。結果として以下の2点が発見された。①マイクと体の位置との関係を変えることで、参加者は発話の意志を表示していた。②コーナーごとに違ったゲストの体の配置があった。

第1章 ラジオスタジオ空間におけるカテゴリー化

空間班

0. はじめに

ラジオスタジオにおいては様々な人が存在し、それぞれに様々な役割が与えられている。例えばその空間にはアナウンサーやコメンテーター、ゲストやディレクターやアシスタントの人などが存在している。そして、それぞれの役割としては、アナウンサーは職業としてラジオ番組に出演し、かつラジオ番組において、その番組をスムーズに進行させるというような課題が与えられている。ただ、エスノメソドロロジー研究者である西阪は「異文化性の社会的構成」という論文〔西阪仰, 1993: 224〕において次のように述べている。

これらの研究は⁽¹⁾、異文化間コミュニケーションの研究として、非常にすぐれたものであることは確かとしても、しかし、「異文化間」ということは、あくまでも議論の前提となっている。以下では、このまさに「文化が異なっている」という事実を、単に説明のための根拠として用いるのではなく、むしろそれ自体を、探求すべき一つの社会現象とみていこうと思う。

つまり、西阪は何か異なっているという事実を議論の前提とするのではなくて、むしろ異なっていること自体を、探求すべき社会現象と見ているのである。このことをラジオスタジオ研究に当てはめるならば、スタジオ内参加者の役割の違いを研究の前提とするのではなく、それ自身を探求の対象とすることができるということになる。すなわち、アナウンサーがアナウンサーとして自明な存在であるということから議論を始めないということである。エスノメソドロロジーの立場から言うと、ラジオ番組におけるアナウンサーがアナウンサーとして自明な存在であるとは限らない。ラジオスタジオ空間における参加者は、一人の男/女や、サラリーマンや、社会人や、一市民やプロ/しろうと、といったさまざまなカテゴリーを当てはめることができる可能性を持っている。しかし、それにもかかわらず、どのようにしたらラジオスタジオという場面において、その人にアナウンサーというカテゴリーを当てはめることが有意義でありえることとなるだろうか。そういったことを私たちは研究したいのである。

これについては、エスノメソドロロジー的な立場に立ったカテゴリー論が、私たちの分析を導いてくれる。カテゴリー論について、サックスは「会話データの利用法」〔Sacks, 1972=1988〕の論文 — これは自殺志願者あるいはその代理人と、緊急精神治療室の職員との間で行われていた電話でのやりとりを、書き取ったものにもとづいた分析であるが — の〔1・0〕と〔1・0・1〕のところにおいて次のように述べている。

さて、今まで集めてきたデータに対して記述を施すためには、様々な基本的な道具立てが在る。成員カテゴリーの集合もそのような道具立ての一つである。本稿の目標は、一つの記述を構成していくことであるが、その記述は、以下のような結論 — すなわ

ち、「私には頼れる人が誰もいない」というような結論——が自殺志願者たちにより繰り返し（さまざまな場面においても色々な人々によっても）到達可能であるということ、けっして損なうことがあってはならない。…（後略）〔1・0〕

（前略）…つまり、本論文は、成員自身がどのような方法に従って成員をカテゴリー化しているか、あるいはそのようなカテゴリー化活動がどのようなことと関連するものであるか、ということについての研究でもなければならないのである。

〔1・0・1〕

わたしたちもサックスにならって、ラジオスタジオの分析から集められてきたデータに対する記述を行うためにカテゴリー化という概念を導入する。すなわち、ラジオスタジオの参加者にカテゴリーをあてはめるだけで終わっていたのではない。ラジオスタジオ空間における参加者のカテゴリー化のようすを研究することによって、ラジオスタジオという空間の記述にまで分析をまとめあげることができるはずである。

日本におけるカテゴリー論に関する先行研究としては、身体障害者の購買場面を記述した、山崎敬一・佐竹保宏・保坂幸正の論文（1993）や、山崎らの論文のデータと同じものを用いながら、山崎らとは別な視点を提案している岡田光弘の論文（1995）⁽²⁾、そして異文化性についての西阪仰の論文（1993）などがある。これらの論文を参考にして、ラジオスタジオにおける参加者のカテゴリー化のようすについて論じてみようと思う。まずはじめに、この調査のいきさつを述べ（第1節）、次にラジオスタジオにおいて有意味だと思われるカテゴリー対について検討する（第2節）。そこからアナウンサーがどのような存在として場面の中で振る舞っているかを明らかにする（第3節）。最後に、リスナーとアナウンサーとの関係に言及しながら、ラジオスタジオ空間がどのように編成しているかをまとめる（第4節）。

1. 調査経緯

この研究は、エスノメソドロジーにおけるビデオ分析の手法を用いて、アナウンサーがラジオスタジオ内で番組を行う相互行為を分析したものである。

調査は徳島県で毎週日曜日の午前中に放送されているワイド番組を1997年と1998年の2回にわたって、その番組が収録されているスタジオをビデオカメラで撮影することによって行われた。この番組は、3人のアナウンサーと1人のコメンテーター、および何人かのゲストによって構成されているワイド番組である。1997年7月6日は、2台のビデオカメラを用いて、1998年1月11日は、4台のビデオカメラを用いて撮影した。1997年7月6日と1998年1月11日との違いは、1997年7月6日におけるアナウンサーのうちの一人が、1998年1月11日においては別のアナウンサーと代わっている点である。

撮影に関しては、事前に放送局のその番組の責任者に調査依頼状を出し、その許可を得た。上記のようにして撮影したデータから分析可能な場面を選び出し、音声トランスクリプトと、必要に応じて視線やうなずきを含めた画像トランスクリプトを作成した。この論

文の分析は、こうして作成したトランスクリプトにもとづいている。

私たち社会調査実習のメンバー11人（教員の檜田も含む）は空間班、人間班、インタビュー班、FMやまのは（仮名）班の4つに分かれて分析を行い、各班それぞれで1つの論文を書いた。

2. ラジオ・スタジオ空間におけるカテゴリー化

ラジオ・スタジオ空間においては、どのようにして、そしてどのようなカテゴリーが有意義になっているのだろうか。次のトランスクリプトを見ていただきたい。

〈断片1〉 データZ（10：29' 55" ～ 10：30' 20"）⁽³⁾

↓①

I：あの文部省が：：生涯学習の一環として：：取り入れているんですね。//

T： // そう

↓③

I： ま、老人の//健康対策っていうかたち：です

T：ですね。（0.4） あの（4.0） //はい

↑②

↓④

I：か。＝

T：＝そうですね、あの（.）ダンスの組織である、日本ボールルームダンス連盟と

↓⑤

I：＝はい

T：いう組織が文部省に認可されまして＝ 老人（.）の（0.4）余暇としての（.）

↓⑥

I：＝ん：：：

↓⑦

＝はい

T：ダンス＝ あるいは学校教育としてのダンスですね＝

この場面は、文部省が社交ダンス⁽⁴⁾を奨励していることに関する話題について、IとゲストのTとの間で交わされたやりとりである。まず〈断片1〉の↓⑤⑥⑦を見ていただきたい。他の場面においてもだが、ここで示しているようにIはTが話している最中にたびたびあいづちを打っている。「あいづちを打つ」という行為は相手から情報を引き出す上で、有意義な行為として見ることができる。なぜならば、相手の話に対して、あいづちを打つことは、相手の話を理解しているという表示だからである。ニュースインタビューにおいては、「情報提供者」と（情報の）「受け手」という役割が制度的に確立されていると山田富秋は言っている〔山田，1996：128〕。このことは〈断片1〉のようなワイ

ド番組における会話にも当てはまるように思われる。つまり、Tは「情報提供者」であり、Iは（情報の）「受け手」であるということが言えるだろう。

ここで、2組4つの概念を導入する。それは、「話し手」／「聞き手」および「情報提供者」／（情報の）「受け手」の4つである。この概念の原則とは、「話し手」が「情報提供者」であり、「聞き手」が（情報の）「受け手」であることだ。上記においては原則どおり「情報提供者」／（情報の）「受け手」、「話し手」／「聞き手」の組み合わせの形、すなわち、「情報提供者」が「話し手」でもあるような形が採用されている。しかし、〈断片1〉の冒頭部分において、4つの概念の原則に反する場面を見ることができる。この場面では、Iは（情報の）「受け手」でありつつも「話し手」であるように見える。なぜなら、Iは自ら話した話題についての真偽の確認を、Tに求めているからである。このことはIの発話の語尾によって明らかであり、「～ですよね」（〈断片1〉の↓①）がその部分にあたる。なぜこのようなことが起きたのだろうか。この問いに関して、以下で答えていこう。

既に述べた4つの概念の原則に反する場面の中では、あるカテゴリーの組み合わせの逆転が起きているように思われる。すなわち、「話し手」と「聞き手」の組み合わせる相手が、通常と逆になっているようなのである。このように、「話し手」と「聞き手」の逆転が可能になるのは、発話の語尾に「～ですよね」という疑問文の形にして文全体の意味を変えるような言語構造を、私たちが持っているからである。それゆえ、私たちは必要に応じて「話し手」であり、なおかつ（情報の）「受け手」であるような、提供者に対するコミュニケーションの手法を採用できるわけである。

しかし、なぜ〈断片1〉の冒頭部分でこの手法が採用されているのだろうか。ここで注目すべきことは、〈断片1〉の↓③で示したIの割り込みである。ここの割り込みの直前において4秒の無音区間が見て取れる（〈断片1〉の↑②）。これはTが言いよどんでしまったためにできたものである。ところで、割り込みに関して、江原たちは「性差別のエスノメソドロロジー」という論文において、支持する「割り込み」⁽⁵⁾の存在に言及している〔江原・好井・山崎，1984→1993：204〕すなわち、相手の発言を承認・援助するような「あいでの」ともいえるような「割り込み」が存在しうるのである。このことから、〈断片1〉のIの「割り込み」（↓③）が、Tに対する支持の「割り込み」であるということが言える。また、Iの割り込みの直後にあるTの「はい」は、Iの割り込みがTに対する支持の「割り込み」であったという証拠であると思なせよう。ゲストに対してアナウンサーが支持の意味の「割り込み」をおこなうことは、番組中に意味不明の長時間の無音状態という放送事故が起こることを防ぎ、放送局に対する信頼を維持するためになされることだと思われる。このことから、番組運営者としてのIの存在様態が確認できるだろう。

さらに以下のことを確認することが重要であるとおもわれる。〈断片1〉の↓①でIはTに対して「～ですよね」と真偽の確認を求めていると述べた。このことは、自分は「聞き手」であり、かつ（情報の）「受け手」であることをIが表示しているように思われる。しかし、Tが言いよどんでしまったため（〈断片1〉の↑②）に、Iはある葛藤状態に陥ったと思われる。というのは、Iは「聞き手」性の表示の維持をするためには、たとえTが言いよどんでしまったとしても、むやみに割り込むべきではない。が、しかし、上記で説明したように、番組中の意味不明の長時間の無音状態が長く続くことは、Iや放送局にと

ってあまり好ましくない。そういった葛藤の中で、Iは、上記で述べた支持する「割り込み」を行ったと思われる。このIの支持する「割り込み」は、TがIの質問にうまく答えられるためのヒントになっている。というのも、このままIは「話し手」になりつづけることが可能だったと思われる。しかし、Iは「話し手」になりつづけることをしなかった。語尾を〈断片1〉の↓④で「～ですか」というふうに質問形をとることにより、IはTが「情報提供者」であることを表示し、あくまでも自分が（情報の）「受け手」であることを再びここで表示しているのである。

上記のことから、以下のことが言えるのではないだろうか。Iは、自分の知識を評価する立場としてTを位置づける言い方をすることで、Tこそが話し手で、Iはあくまでも聞き手ということを維持しようとしている。その後、Tはやっと「話し手」としての発言を開始した。Tが「情報提供者」で、Iが（情報の）「受け手」であるという立場が、この〈断片1〉において、TとIの間では維持されたままであるように思われる。その証拠に、ビデオを分析したところ、Iの体の向きはTが話しているときには常にTの方を向いており、その視線もTの方に配られているように見られる。「情報提供者」の方に自分の視線や体を向けることは、「情報提供者」に自分は（情報の）「受け手」であることを表示しているのだといえる。このことも、自分の「聞き手」性をIが表示している証拠となりえるだろう。

この3つの注目点から言えることは、Iが番組運営者であり、（情報の）「受け手」であることを表示していることから、ラジオのワイドショーにおいて一般にあてはめることが可能と考えられるカテゴリー集合である【アナウンサー／ゲスト】というカテゴリー集合において、Iに「アナウンサー」というカテゴリーが与えられ、Tが「情報提供者」であるといったことから、Tには「ゲスト」というカテゴリーが与えられているのではないだろうか、ということである。さらに、Iはラジオ番組の場面ごとの必要に応じて、「話し手」／「聞き手」、「情報提供者」／（情報の）「受け手」という2組4つの概念のうち、（情報の）「受け手」であり「聞き手」（この形態が原則的）、（情報の）「受け手」であり「話し手」という可能な2つの概念の組み合わせの交換を行っているのである。

3. アナウンサーはただの「受け手」か

本当にIはTが提供するボールルームダンスに関する情報を持っていないただの（情報の）「受け手」だろうか。Iはたとえ自らが率先してある語りをする場合であっても、その語尾を疑問形にすることによって、最終的な情報の真偽をTに委ねている。すなわち、Tこそを正当な「情報提供者」として扱っているのである。私たちは次のことに注目したい。それはQシートの存在である。ラジオ番組においては、Qシート（番組進行表）というものが存在する。資料Iを見ていただきたい。

資料 I

0:25	前 T M	C D	<p>(後列し) ★ 徳島ウェブ・リポート ★ (別紙参照)</p> <p>徳島の「Shall We ダンス？」</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 阿南市富岡町出身の [T さん] [E さん] ご夫妻 </div> <p>昨年、ドイツでのモダン選手権大会で決勝にまで進出!</p> <p>お二人はダンスが家で知り合いました 知り合ったきっかけは? お二人がダンスを始めたきっかけは?</p> <p>「ボールルームダンスに魅せられて」 社交ダンスと日本で呼ばれている 「体力の限界まで」・・・かなりハードな練習を毎日続けて</p> <p>映画「Shall We ダンス？」がヒットしたが、ダンス人口は 増えているの?</p> <p>これからのダンスの世界はどうか? これからの予定</p>
◆ P T ①		A F	1' 13"

この資料 I はデータ Z に対応する 1 月 11 日における「サンデーウェブ」の Q シートである。この番組に関する Q シートはディレクターの D によって作成されている。まず、この表において T に関しての簡単な情報が書かれている。それ以外にもさらに詳しい情報が書かれている番組資料が番組参加者に配布されている。番組参加者は、番組開始前及び番組中において、Q シートと配付資料に目を通してというのが通例である。「ある特定の専門項目について、その答えを知っているか否か」⁽⁶⁾ ということについて、考えてみる。そうすると、アナウンサー/ゲストのそれぞれに関して、知っている/知らないの 4 つの類型がある。それを図示すると次のようになる。

図 1 アナウンサーとゲストの知識状態図 = 4 類型 =

	ゲスト [「情報提供者」]	アナウンサー [(情報の)「受け手」]
類型 (1)	知らない	知らない
類型 (2)	知らない	知っている
類型 (3)	知っている	知らない
類型 (4)	知っている	知っている

さて、番組放送時にアナウンサーとゲストの両者の知識状態は、この 4 類型でいって、どの類型になっている場合が多いだろうか。

まず類型 (1) と類型 (2) について考えてみよう。ゲストが知識を所有していることはラジオ番組において前提条件となっている。さらにゲストは「情報提供者」として、そ

の場に存在しているので、自分がラジオ番組において話すことを期待されている情報を、ゲストが知らないということでは番組が成り立たない。よって、類型（１）と類型（２）は気をつけて避けられるはずだ。

一方、類型（３）と類型（４）は、自分がラジオ番組において話すことを期待されている情報をゲストが知っているの、類型（１）と類型（２）に比べれば成立する可能性が高い。しかし、アナウンサーは番組開始前に、Ｑシートや番組資料を持っているということをもふまえると、ゲストがその番組において話す情報をアナウンサーが知らないということはないので、類型（３）が成り立つ可能性は少なくなる。もし仮に、類型（３）の状態での本番があり得たとしても、アナウンサーはゲストが知っていることをゲストに質問したときに、アナウンサーが質問した内容をゲストが知っているかどうかをアナウンサーは確信できないので、アナウンサーはゲストの答えを適切に誘導したり、評価したりできない。また、アナウンサーが質問した内容をゲストが知っているかどうかをアナウンサーは確信できないために、アナウンサーは、類型（１）と類型（３）とを見分けることができない。そうなると次のようなことが起こってしまうかもしれない。というのも、類型（３）の状態において、アナウンサーが「ゲストはおそらくこのことについて知っているだろう」と思って、ゲストにかかわる何らかの質問をしたときに、ゲストはそのことについて知らなかったという可能性が起こり得る。そうなるとアナウンサーが質問した、ある特定の質問項目についてアナウンサーとゲストの両者とも答えることができない、最悪の事態が起こってしまうのである。これは、番組として、大変危険なことであり、一か八かの賭になってしまうのである。このようなことは、アナウンサーが恐れている放送事故になるかもしれない。だから、アナウンサーとしてやはり類型（３）は避けるべき選択肢となるだろう。そう考えると、一番安全で望まれるのは、類型（４）になるのである。

類型（４）の成立が多く予想される背景には、Ｑシートや番組資料が配布されているということが持つ不思議な効能が働いているように思われる。すなわち、Ｑシートや番組資料が番組関係者に配布されていると、アナウンサーは、番組の構成や話す内容が番組の前にすでにわかっていることになるので、一見、番組がリスナーにとって、新鮮で、魅力的でかつ興味深いものにならないかもしれないと思われる。しかし、実は逆に、Ｑシートや番組資料によって事前に話す内容を知っているからこそ、ゲストの話に山や谷をつけることができ、番組をより魅力的なものとするのが可能なのである。ラジオ番組中に、アナウンサーが「知っているのに知らないふり」⁽⁷⁾を行うことで、適切な場所で驚いたり、リスナーの関心を必要な部分に集中させることができるのである。そうすることによって、リスナーにとって、ゲストの話がより興味深いものとなり得るのである。

では、知識状態の類型（４）の状態で番組作りが行われているとして、具体的にはどのようなテクニックが使われているのだろうか。相互行為分析を試みよう。類型（４）の場合における、「知っているのに知らないふり」をするテクニックについては、実は３つの水準がある⁽⁸⁾⁽⁹⁾。この水準は、番組のライブ感に貢献する程度の水準であり、言い換えれば、アナウンサーのテクニックの高度さに関する水準である。

水準１テクニック。（以下水準１と略記）知っているのに質問すること。

水準２テクニック。（以下水準２と略記）知っていたはずのことなのに、初めて聞

いたような驚きのマーカの付いた理解表示をすること（例えば「あっそうなんですか」の「あっ」とか「へー」などの発言である）。

水準3テクニック。(以下水準3と略記) その直前のゲストの発言に触発されて、その場であたかも思いついたかのような質問をすること、(例えば「そうすると」とか「としますと」という発言である)である。

次に、水準1、水準2、水準3がどのようにラジオ番組中において使用されているかについて、その事例を以下に挙げていきたい。

まず、水準1の事例。データZの10:25'09"において、IはTに対して、「ダンスと出会ったのはいつなんでしょう」という発言をしている。しかし、事前配布の番組資料に「(ゲストのTは) 大学時代舞踏研究部に所属し、競技ダンスを始めました」という記述があり、またQシートには質問文が記述されていることから、あらかじめその答えについてIアナは知っているはずである。番組をおもしろくするために、Iアナは「知っているのに知らないふり」をしながら、ゲストから答えを引き出していることがわかる。

そして、水準2の事例。データZの10:27'23"において、Tの「世界では、ボールルームダンスと呼んでます」という発言の後に、Iは「あーそうなんですか」と発言している。しかし、番組資料には「ボールルームダンスが正式名称です」という記述があり、QシートにもここでのTの発言は予告されている。このIの発言の冒頭の「あー」は驚きのマーカで、ここでIは自分の知っていたことを、いかにも初めて聞いたかのように装うことで、リスナーに対して新鮮さを表示しているのである。

次の水準3の場合を考えよう。データZの10:34'27"ごろの場面において、IはEに対して(EはTの奥さん。この場面においてはゲストは2人いることになる)「奥様の方は実はあの一お仕事を引っ張っていらっしやいまして、もともとは、看護学校の先生をなさっていたのが、今は看護婦ですよ」と発言している。それにたいして、Eは「そうなんです」とIに対して答えている。それを受けて、IはEに対して「看護婦さんというと、夜勤とか時間的に不規則だっというイメージがあるんですが、それとその競技の練習ってというのは相当並行してやっていくの厳しいんじゃないですか」と発言している。IとEの会話は[IQ1(Iの質問1)→EA1(EのIに対する答え1), IQ2→EA2 …]という流れに沿って成り立っている。ここで注目することは、Iの「看護婦さんというと～」という発言である。このIQ2の発話はあたかもEA1の発話を受けて考えられた質問と見なす事ができる。しかし、番組資料には「(Tの) パートナーのEは高等看護学校から、病棟勤務に転勤、月8回の夜勤、週4回の練習を今でも続けており」とある。そのことから、番組の流れの全体はじつはQシートや番組資料に書かれてあったのだ。IはEに質問する以前に、すでにその返答の内容を知っている。にもかかわらず、Iの質問(IQ2)が、その直前のEの返答(EA1)によって、その場で触発されて生まれた質問であるかのようにみえるのは、その質問が、「そうなんです」というEの発した、直前の回答に言及しているからである。

結局ここまでの議論から以下のことが言えるのではないだろうか。つまり、それは、Q

シートや番組資料が存在し、アナウンサーとゲストの知識状態についての、4つの類型のうちの第(4)類型(ある特定の質問項目に対するその答えについて、アナウンサーもゲストも、ともに知っている)の状態にアナウンサーがおかれていたとしても、アナウンサーは、その場その場で質問を考えたかのような、ライブ感の表示が可能なテクニック(例:「看護婦さんという…」)をラジオ番組中に使用することができることである。上記のテクニックが利用可能であるためには、先の知識状態の類型についての理解が、その場の参加者のかなりの部分に共有されている必要がある。その共有の様子を以下しばらくトランスクリプトを用いて確かめていくことにしよう。

Qシートがアナウンサーやディレクターにとっての共通の情報のリソースとなっていることを証明するために、次の資料IIと〈断片2〉を見ていただきたい。

資料II

10:10			(後クシ) スタジオから、長野オリンピック日本人期待の選手紹介
11:12	◆PT② 前TM	DF▼ 1' 13"	★おどろきのためのこだわり講座★ 紅茶をおいしく飲む紅茶 ③回目 12/7以来 「000000」社長でフード・コーディネーターの [C さん] 今回は、こだわりの水とバラエティー紅茶 水にこだわる・・・硬水と軟水の違い <u>くみ直きの水がベスト</u> 魔法瓶の湯、ミネラルウォーターはダメなの? 水に空気が含まれていないとダメ 「おいしいバラエティー紅茶」 アイスティー・・・濃く出る茶葉が向いている。 ミルクダウン(ミルクを混ぜた様な白い色が出て 味も淡くなる現象)に要注意 ロイヤル・ミルク・ティー・・・正しい作り方は? シャリマ・ティー・・・オレンジを浮かべるおしゃれな紅茶 ウィンナー・ティー・・・濃い紅茶の上にホイップクリームを乗せる 紅茶物語・・・今回は、EARL GREY イングリッシュマン・イン・ニューヨーク / STING まとめ そろそろ聖火が蔵本公園に到着するようです。 (前クシ)
	後TM	TR② 1' 06" CD④ 4' 25" DF▼ F.1	

<断片2> データZ (11:18' 40" ~ 11:19' 04")

PPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPP,,... CCCCCCCCCCCCCCCCC
I : 我々の：：こうhh感覚で言うと：：hhあの：：くみおきの水って言うのは：：
PP
G :
II
C :

C,,... P,,... CCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCC
I : hhよくないんじゃないかと：：思うんですが：：//実は：：：° 逆なんです
PP
G :
II
C : //はい

CCCCCCCCCCCCCCCCC,,... PPPPPPPPPPP,,... DDDDD,,...
I : ね° : :
PP,,... CCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCC,,... P P P P P
G :
II
C : いや (.) あ (.) やっぱり (.) くみおきはだめなんです あの酸素の：：

PPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPP,,... CCCCCCCCCCCCCCCCC
I : =は：：h (2. 0) あ：：//酸素のたくさん入っている
↓①【笑いながらDを指さしながら非難している】
,... DDDDDDDDDDDDDDDDDDDDDDDDDDDDD,,... PPPPPPPPPPP
G :
II
C : 多い方がいいんで：：= // (あの)

CCCC,,... D,,... PPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPP
I : //お水がいい
PP,,... CCC
G :
IIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIII,,... P,,... IIIIIIIIIIIIIIIIIII
C : //そうなんです だからあの：：あの： く、くみおきするとどうしても酸素が
トランスクリプト記号補足

*○○○ (アンダーライン) : 当該箇所の音が大きいことを示す。
*° △△△° : これで囲まれた箇所の音が小さいことを示す

資料IIは、同じく1月11日の番組内での「おとなのためのこだわり講座」というコーナー部分のQシートである。このコーナーのゲストは、この日で3回目の出演である。そして、この〈断片2〉のトランスクリプトは、Qシートと対応させると、資料IIの下線部に関する話題の部分を話しているところのトランスクリプトを抜き出したものである。Qシートには「くみおきの水がベスト」と書いてあり、Iは、Qシートに書いてあるとおりに「くみおきの水がベスト」ということに関する情報をゲストで紅茶の専門家のCから引き出すために、Cに話を持っていった。ところが、Cによれば、くみおきの水ではなくて、空気をたくさん含んだくみたての水の方が、おいしく紅茶をいれることができるということで、CはQシートとは正反対のことを述べてしまった。そういったことから、GとIは、「間違っているぞ」というようなことをQシートの作成者であるDに示そうとして、GがIに若干遅れながらも協調して、Dの方を見ていることがトランスクリプトでも確認できると思う。さらにGに関してはそのあとDに指を指しながら、Dをからかいながらも非難しているかのようなのである(↓①)。このDの非難の理由は何だろうか。おそらくは以下のような説明ができるであろう。Cの回答を番組としてより魅力的かつ新鮮に見せようとして、Iは声の大小やテンポを変化させながら、Cに問いかけをした(トランスクリプト下線部参照)。しかし、この前項での水準1のテクニックの使用が肩すかしをされてしまった原因の由来であるDに対し、Iと同じ事前情報を持っていたアナウンサーのGはIと一体になって「非難」をしているのである。このGの振る舞いからも、IとGが、Qシートを情報のリソースとして共有していたことがわかるだろう。逆に言えば、ラジオスタジオ空間にいる参加者たちにQシートが共有されていたからこそ、Qシートの間違いが水準1テクニックの使用を通じてよりはっきりと目立ってしまったとも言うこともできるが、いずれにせよ、番組の構成には相互行為的に大変複雑な構造が関与しているのである。

4. 志向対象としての「リスナー」

だがここで、ある疑問に突き当たる。Iは「情報提供者」が番組中に話す情報を、すでにQシートや前もって渡されている番組資料から知っているにもかかわらず、なぜラジオ番組のなかでは、(情報の)「受け手」ということを表示し続けているのか。結論を先取りして言うならば、それは番組の間中、リスナーがラジオ番組において、終始志向の対象となっているからである。そのありようを具体的な相互行為の中で見てみよう。このことを分析するために、私たちは次のトランスクリプトを作成した。この場面も〈断片1〉と同じようにIとTとのやりとりである。そして、ここの場面での会話の話題は、ボールルームダンスが最近注目されていること。そして映画やテレビ番組において、それがとりあげられていることが、ボールルームダンスが流行しているきっかけとなっていることについてである。

〈断片3〉 データZ (10:29'07"~10:29'22")

I: ま、話題づくりにはね// (.) になってます (分析不能) あの: ウッチャンナンチャ

G:

T: //はい

↓①

I: ンなんかの//ね

hhえ:::でも我々素人が

G: =あhはhはhはhはh

T: //そうですね=

↓②

I: 見てるとよく頑張ってるように見えるんですが::=hhプロの目から見ると:::

G:

T: =はい

I: やっぱりちょっとまだ技術的に(1.0) =っていう=

G:

T: ま、ちょっと= =そうではい

この〈断片3〉において注目すべきことは、Iが「我々素人が見てると～」と発言していることである(↓①)。「我々」という言葉が複数形を指す言葉であり、さらに、Iが「我々素人が～」と発言していることから、この言葉はI以外の他者も指示していることになる。はたしてこの「我々」とはどの範囲の人間のことを指しているのだろうか。

まず最初に確実なことから考えることにしよう。〈断片3〉においてIが「プロの目から見ると～」といっている(〈断片3〉の↓②)。しかし、ゲストの夫婦は「プロ」ではなく「アマチュア」であるので、この場面を構成している成員の中に「プロ」は存在していないはずである⁽¹⁰⁾。にもかかわらず、その場面において、IがゲストのTを「プロ」として扱うことは有意味に思われる。というのは、〈断片3〉で使われている「素人」=「アマチュア」というカテゴリーは、習熟している人の一般人口比が他のスポーツと比べてかなり小さいボールルームダンスというスポーツのいわゆる「プロ」と対比された、ボールルームダンスの「アマチュア」であって、すなわちボールルームダンスについてほとんど情報を持っていないという意味での「アマチュア」だからだ。このような解釈ならば、Tを先に「アマチュア」と呼んでおきながら(図2参照)、ここで「プロ」と呼ぶことが可能になる。なぜこのようなことが起きているのだろうか。以下簡単ななぞ解きを行ってこよう。

先に「T」の属性とされた「アマチュア」という言葉は〈断片3〉では「T」の属性とすることは不適となっている。というのも、もし、IとTとの関係において、Tに「アマチュア」というカテゴリーを与えてしまうと、Iに与えるカテゴリーがなくなってしまう(ここでいう「アマチュア」は図2のプロ①に相当する)。そうすると、2節で述べた「情報提供者」と(情報の)「受け手」というカテゴリー対の構図を維持しがたくなっている。

その危険を避けるために、ここでは「アマチュア」という言葉を使うのをIは避けたのではないだろうか。そう考えると、この場面において、たとえTがダンスを専門にしていないう意味で「アマチュア」だったにもかかわらず、Tに「プロ」というカテゴリーがIによって与えられている理由が分かる。つまり、「(ボウルルームダンスについての情報を持っているという意味での) プロ」と「(情報を持っていないという意味での) 素人」というカテゴリー対がこの場面において有意味になっているのだ(このカテゴリー対は〈プロ/アマチュア〉規準IIの構図のことを指している。また、この規準におけるアマチュア②は「素人」と置き換え可能であるように思われる)。この〈プロ/アマチュア〉規準IIにおける「プロ②/アマチュア②」というカテゴリー対は「情報提供者」と(情報の)「受け手」というカテゴリー対とほぼ同じ構図であろう。

図2 「プロ」と「アマチュア」に関する2種類のカテゴリー対

〈プロ/アマチュア〉規準I～そのことに関して専門か否か

- ・プロ① …そのことを仕事していて、そのことに関して専門である人
- ・アマチュア①…そのことに関して専門でなく、別な仕事をもっているが、そのことを(趣味などの範囲において)ある程度のことは行っている人

〈プロ/アマチュア〉規準II～そのことに関して習熟しているかどうか

- ・プロ② …そのことに関して詳しい知識を持っている人
- ・アマチュア②…そのことに関して知識を持っていない人

ところで、そうなるとこの会話における「我々」とはT以外の誰かに割り振られていることになる。その場面において、「我々」という言葉に割り振られているものが何であるかについての可能性として、次のことが考えられる。ラジオスタジオにおいて会話に参加しているのはIとGとKとTとEである⁽¹¹⁾。よって、先程も述べたように、TとEに「プロ」というカテゴリーが与えられたことから、「我々」というカテゴリーが与えられているのがIとGとKではないかという可能性が含まれていることは間違いない。

たしかに、「我々」を構成しているのはIとKとGといった(情報の)「受け手」であるかもしれない。しかしそれだけではないように思われる。つまり、次の可能性は、「我々」という言葉の対象がリスナーを含んでいるという可能性である。「我々」という言葉の指し示す内容にリスナーが含まれている理由を次に示してみよう。

上記において、「我々」の指し示す内容が、IとKとGであることは、「プロ」と「素人」のカテゴリー対において、「プロ」というカテゴリーがTに割り振られていることから理解できたと思われる。しかし、IとGとKは、単なる「聞き手」ではなく、先に見たように(情報の)「受け手」でもあるのだ。アナウンサーはなぜ「情報提供者」と(情報の)「受け手」というカテゴリー対を維持しようとしているか。それは、番組を盛り上げるために、アナウンサーが3節で述べたような3つのテクニックを用いたり、アナウンサーやゲストに関する知識類型図において類型(4)を選択していること自体が背後にリスナーというものをかかえているのである。このことに関して、山田富秋はニュースインタビューについての「会話分析の方法」という論文においてこのように述べている。[山田, 1995:128]

つまり、〔インタビュアーは〕インタビューをするのは自分の私的な目的のためではなく、「聴衆」に向けられた「公的な」行動として行っているのだということを示す必要がある。〔 〕は筆者挿入

これは、ニュースインタビューだけでなく、放送一般にも当てはまることではないだろうか。つまり、ラジオスタジオ空間においても、その場には存在していないが、つねに「リスナー」というものが意識されているはずである。なぜならば、「情報提供者」と（情報の）「受け手」というカテゴリー対の構図自体が「リスナー」を志向しているために起こっているからである。アナウンサーは「リスナー」の代表者として「情報提供者」から情報を引き出しているのであり、また、「リスナー」と「情報提供者」とを媒介する存在である。ただ、その二者を媒介するにあたって、「情報提供者」に関する情報を知らなければ番組をスムーズに進行させることに失敗する可能性がある（このことについては第3節において言及した）。アナウンサーは「情報提供者」が知っている範囲での情報を Q シートや番組資料から得ており、その情報について、ラジオ番組のなかでゲストと会話を行っているのである。

5. まとめ

どのようにしたら、アナウンサーがラジオスタジオの場面においてアナウンサーとなっているのかを、カテゴリー対という概念を使って考えてきた。アナウンサーはゲストとの関係において、基本的には「情報提供者」と（情報の）「受け手」というカテゴリー対関係を維持しているということ、場面場面において、そして様々なテクニックを使用しながら表示している。そこでは、見ることができる相手としての「ゲスト」と見えない相手である「リスナー」との媒介者としてのアナウンサーが存在している。

だが、この番組がワイド番組であるということも多少関係しているように思われる。というのもワイド番組というものが、ラジオ番組、ニュースインタビューという枠組みにおいて、日常会話が行っているものと見なすことができるからだ。

注

- (1) これらの研究とは、人種や言語が違うことを独立変数的に、つまり自明なものとして扱ってしまい、何らかの発見に対してそのことを説明の根拠として、みなしている研究である。
- (2) 山崎らの論文では、カテゴリー化がいささか恣意的であると思われ、身体障害者ということが前提とされていたきらいがある。山崎らの分析と岡田の分析の両方が、山崎らが集めたデータを用いて分析しているにもかかわらず、異なる結果が生じていることが私たちの注目している点である。このことで、私たちはこの分析において厳密な議論をしなければならないと感じた。
- (3) このデータで使用されている記号に関する詳細は、第 I 部の記号一覧表、配置図を参照せよ。

- (4) このトランスクリプトにおける「ボールルームダンス」とは、日本における社交ダンスのことである。
- (5) 「性差別のエスノメソドロロジー」の論文においては、支持する「割り込み」のことを「支持作業」という表現で使っている。
- (6) ここではエスノメソドロロジー研究の通例に反して、神の目から見て初めてわかるような客観的状态として、知識状態を記述している。本来ならば、両者の相手側への期待の視点からより複雑な図を書かねばならないのだが、ここでは議論の簡便化のためこのような簡略図を採用した。
- (7) 放送がしばしば“やらせ”批判を受けてしまうのは、放送にこのような構造要件があるからである。
- (8) この水準1、2、3に関する議論においては、樫田の助言が有効であった。とりわけ水準3の事例は樫田の示唆によるものである。
- (9) これはラジオ放送の分析だけでなく、放送一般において言えることである。テレビで分析してみると、容易に見つけることができる。
- (10) Iは、番組内でゲストTとEの成績を紹介するにあたり、「全国にアマチュア競技選手がおよそ3000組いらっしゃるんだそうですが、今年度のランキングが7位」と言っている。(データZ 10:26'29")このことから、ゲストTとEがアマチュアであることが明らかだと言えよう。
- (11) トランスクリプトから省略されているが、他の場面において、GとKが会話に参加していることが確認されている。

参考文献

- 江原由美子・好井裕明・山崎敬一, 1984, 「性差別のエスノメソドロロジー——対面的コミュニケーション状況における権力装置」, 『現代社会学』18, アカデミア出版会:143-175
→, 1993, れいのるず・秋葉かつえ 編, 『おんなと日本語』, 有信堂:190-228.
- 小林康雄・船曳建夫, 1994, 『知の技法』, 東京大学出版会.
- 森田聡之, 1997, 「気にすること・無視することの分析可能性」, 山崎敬一・西阪仰 編, 『語る身体・見る身体』, ハーベスト社:99-122.
- 西阪 仰, 1992, 「参与フレームの身体的組織化」, 『社会学評論』, 第43巻, 第1号:58-73.
——, 1993, 「異文化性の社会的構成 ——たとえば日本人はどうやって日本人となっていくのか——」, 『社会学・社会福祉研究』, 第514号:223-249
——, 「会話分析に何ができるか ——「社会秩序の問題」をめぐる——」, 奥村 隆 編, 『社会学に何ができるか』, 八千代出版:115-154.
——, 1997, 「語る身体・見る身体」, 山崎敬一・西阪仰 編, 『語る身体・見る身体』, ハーベスト社:3-29.
- 岡田光弘, 1995, 「相互行為場面における身体とカテゴリー ——身体社会学としての購買場面のエスノメソドロジ的相互行為分析——」, 『Sociology Today』, 第6号:27-38.
——, 1996, 「『制度』を研究するということ ——インタビューと119番通話の終了部の会話分析——」, 『現代社会学理論研究』, 第6号:165-180.

- Sack,Harveys, 1972, "An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology", David Sudnow (ed.), *Studies in Social Interaction*, The Free Press:31-73, note:430-431.=1995 北澤裕・西阪仰 訳「会話データの利用法——会話分析事始め」, 『日常性の解剖学——知と会話』, マルジュ社:93-137.
- Schegloff,E,A.and H.Sacks, 1972, "Opening up closing" *Semiotica* 7: 289-327 = 1995 北澤裕・西阪仰訳「会話はどのように終了されるか」『日常性の解剖学』マルジュ社 :174-241.
- 山田富秋, 1995, 「会話分析の方法」, 『他者・関係・コミュニケーション』, 岩波書店:121-136.
- 山崎敬一・佐竹保宏・保坂幸正, 1993, 「相互行為場面におけるコミュニケーションと権力——〈車いす使用者〉のエスノメソドロジ的研究——」, 『社会学評論』, 第44巻, 第1号:30-45.

第2章

ラジオスタジオ内における相互行為分析

—チーフアナウンサーの二重性を中心として—

人間班

0. はじめに

私たちはビデオを分析していて、チーフアナウンサー I⁽¹⁾ が他の参加者と比べて何か特別な人ではないかという疑問を持った。スタジオ内には I を含め三人のアナウンサーがいるが、I だけが他の二人と立場上、違って見えたのである。具体的に言うと、後に出てくる無音区間での G に対する I のうなずき (第2節) や、ゲストの話に受け手として参加しつつ、視線を様々なところに移動させていること (第3節) である。その様子は、スタジオ内のアナウンサーの一人としてのみ存在しているようには見えない。もしかすると、I はもう一つ別の、もしくは複数の参加の仕方をしているのではないだろうか。つまり、I は立場上二重性を帯びていると言えるかもしれない。この論文では、この I の二重性を解き明かしていこうと思う。

「参加者の相互行為において、視線がある役割を果たしていることは常識的に知られている」[皆川, 1993:56] と皆川も言うように、このことは、私たちのビデオ分析についても同様のことが言え、参加者の視線を見ていく作業が重要となった。参加者たちは、発話や、言葉を用いない振る舞いをその場に合わせて「デザイン」しながら、相互行為を達成している [cf. 西阪, 1997:22]。私たちは撮影したデータから分析のためにいくつかの場面を抜き出し、視線やうなずきを含めた会話記録 (トランスクリプト) を作成した。この論文の分析は、トランスクリプトに基づいている⁽²⁾。

また、ラジオ放送は、大きく分けて三つの編成から成り立っている。それは、録音素材を用いた部分と、会話的相互作用が複数人でなされている部分と、一人でなされている部分である。ラジオ放送は、実は録音素材を大量に組み込んで番組づくりを行っている。それ自身、重要な研究テーマとなるが、当面、録音素材には触れないことにする。

私たちは上記で述べた、複数人による言語的相互作用がなされている場合を「会話的編成」、一人でなされている場合を「非会話的編成」と名付けることにする。私たちはこの枠組みの中で、スタジオ内の相互行為分析を、I の二重性がどのように表れているかを中心に次節から見えていくことにする。

1. I と D の関係

I と D (ディレクター) の関係について、D はインタビューで「スタジオの進行はおおむね I がやっており、時間調整も I が冷静に見ている」[荒木・藤井・李, 1998:] と答えている。D が I に依存していることを以下に示す。

1997年7月6日の放送では、D がスタジオ内に指示を出すのに用いるモニター⁽³⁾

が故障して使えなくなったので、その代わりにスケッチブックでガラス越しに指示を出すことになった。CM中にDがスタジオ内に入ってきて、そのことをIに伝えた。



図1 スケッチブックの使用をIに伝えるD (9:23'13")

図1を見ると、DはIに向かって指示を出している。これは、スタジオ内でIがある特別な役割を担っていると、Dが考えているからであろう。しかもそれは、時間と深く関係するものではないだろうか。

Dは、Qシート⁽⁴⁾を作成することにより番組の流れを管理し、モニターを使って曲をとばす、コーナーをまとめる、などの指示を出すことによって大まかな時間管理をしている。だが、Dは調整室(スタジオ外部)にいるため、指示はできるが、実際に会話を始めさせる、コーナーを終わらせるという行為自体は行うことができない。そもそも会話とは単独に終了させることはできない。会話の終了は相互行為の中で達成されているのである。しかし、会話の終了のきっかけは、誰かによって作られなければならない。スタジオ内部にいないDには会話終了のきっかけを作ることすらできない。そのため、スタジオ内にいる者のうちの誰かが、コーナーを始めさせたり、終わらせたりすることが必要となる。そのきっかけ作りを担っているのが、Iと言える。最終的には、Iが会話の終了を先導している。(第Ⅲ部付録第1章トランスクリプト例のコーナーの終了部分を参照)

Iは、番組の中で一つ一つの細かい時間管理(話を終わらせる、曲紹介にもっていくなど)を行う。Dは、番組全体の大まかな時間管理を行っている。すなわち、IとDが相互的に時間管理を行うことで、番組進行が成し遂げられていると言えよう。

また、Dの時間管理の仕方に注目すると、モニターを使っての指示、Qシートの作成などである。前にも述べたように放送中のスタジオ内には、会話的編成と非会話的編成があるが、Dはそのどちらに対しても違いはなく、単一的な時間管理の仕方をしている。一方Iは、会話的編成と非会話的編成の場合では、他の参与者との関わりに違いが見られた。次節からその点についてみていこう。

2. IとGの関係

この場面は、Gが「ウィークリーインフォメーション」というコーナーの原稿を読み終



図2 IとGの無言の確認 (カメラII) (10:54'58")



図3 IとGの無言の確認 (カメラI) (10:54'58")

Y : らhん) っていうことで、つみ残しになったと であの : 古代社会の : この前の時

PPPPPPPPPP,.. YYYYYYYY,.. PPPPPPPPPPPPPPPPPPP

I : はい

YYYYYYYYYYYYYYYYYYYY,.. PPPPPPPP,.. 調,.. YYYYY

S :

Y : もお話ししましたように : : 公地公民ていう = ま : いや今の言葉で言えばこくゆ

PPP,.. MMMMM,.. PPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPP

I : =ええ

YYYYY,.. I I I I I I,.. YYYYYYYYYYYYY,.. PPPPPPPP

S :

Y : う : : になったわけですね //ええそうですね であの : まこの : : 平安

PPPPPPPPPPPPPPPPPPPP,.. YYYYY,.. PPPPPPPPPPPPPPP

I : 土地が//国有になった ええ

PP

S :

Y : 時代にかけて古代社会が非常にその貴族社会としてあの : 花開く時期でま : 貴族たち
nod nod

PP

I :

PP

S

Y : が大変にこうぜいたくになってきたわけですね。

nodnod

PPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPP

I :

PPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPP

S :

PPPPPPPPPPPP,, SSSSSSSSS,, PPPPPPP,, IIII
Y:あの残酷な// まあそれがきっかけであの:

.. PPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPP,, MM,, PPPP
I: //ひhひhひhひh

YYYY,,... PPPPPPPPPPPPPPPPPPPPP,,... YYYYYYYYYYYYYY
S: //いやでしょう//ね

IIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIII
Y:出家しましてね// その祇王は//

PPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPP
I: //ええ //ええ

YYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYY
S:

<断片3>は、(9:57'20"~9:57'43")の断片である。10時ちよ
うどの「そごう」の時報までに、コーナーを終えて、曲紹介をし、曲を流さなくてはなら
ない⁽¹⁴⁾。曲紹介と曲を流すのには約1分40秒必要である。したがって、9:58'20
"ごろにはコーナーを終えなければならない。しかし、この時Yは、平家物語に出てくる
女性には、強いタイプと弱いタイプの二つのタイプがあって、それぞれに当てはまるのが
巴御前と、清盛にもてあそばされた祇王や仏である、という話をしている。これは、歴史的
事実を述べているにすぎない。物語を語ろうとするとき、その終わりには「おち」がある
ことが前提であることを考慮するなら、Yの話が終了に向かっているのは明らかである。

ここでのIは<断片2>と比べて、受け手性の表示の一つである相づち、うなずきなど
の回数が減っている。その上、時々なされる相づちは、Sアナウンサーの声に反応するも
ので、遅れてなされている。このように考えると、Iの受け手性の表示は片手間のように
見え、この場面にIが十全に参加していないことの表れであると言えよう。これは、おそ
らくはIの二重性のためであり、ここでは二重性のもう一方の時間管理の方に重点が置か
れているのである。

また、このコーナーのような「会話的編成」の場面は、第2節で挙げた「非会話的編成」
の場面と違い、言葉を用いて自らが終了のきっかけを与えることが可能である。第2節、
第3節から、Iの時間管理はDと異なり、単一ではなく、それぞれの場面の編成に対応す
るように工夫されていることがわかる。

3-2. SとY、IとS

一方、SとY、IとSの関係はどうであろうか(SとY、IとSの位置関係については、
第I部配置図を見よ)。再び<断片3>のトランスクリプトを分析すると、SはYに視線
を向けていることが多い。Sが原稿を見るのは、Yが下を向いて原稿を見るときと、自分

この場面は、Sが担当のコーナーであるため、Iが何か指示を与えるにしても、それを音声で行うことはできない。そのためIは、音声以外のやり方、つまり指で「巻き」の合図を出すことによってSに指示を与えたのである。これは、IとSの仕事の内容の違いから生じた、と考えられる。その違いとは、Iがラジオ番組を進めていく上でスタジオ内のアナウンサーの一人としてだけではなく、時間を管理するという役割も担っているということである。すなわち、Iが立場上、二重性をもっていることの表れであると言えよう。

4. まとめ

本章では、ラジオ番組を進行させる上での相互行為場面を示してきた。ラジオスタジオでは、リスナーには知られない様々なやり方を用いて番組を進めている。リスナーはラジオ番組という、いわば「作品」を聞かされている。ラジオスタジオに携わっている参加者は、リスナーに対し、常に最高の「作品」を提供するために、手間と隙をかけている。だが、それらをリスナーに知らせることなく習熟したやり方を用いて放送を行っている。例えば、IがSに「巻き」の合図を出すこと（第3節）。また、IとGの無音区間における無言の確認（第2節）がそれである。

特に、後者においては、たった3秒という短い無音区間の中で高速にコミュニケーションされており、しかも不自然な沈黙には見えず、リスナーが特に注意を寄せる部分にはなっていない。

Iはウィークリーインフォメーションが終わる前から、様々な所に視線を移している。特に、Gの原稿とモニターを見る時間が増え、残りの時間とGの残りの原稿量を気にしていることが明らかに分かる。GもIを直接見てはいないが、Iの視線の移動は、Gの体の向きから見て、理解されていたはずだ。だからこそ、Iに確認を求め、IもGの意図していることを理解していたので、うなずいて、予定どおりニュースを読んでも良い、という旨を伝えたのである。

しかし、Iの参与の仕方が次のような場合も考えられる。西阪はゴッフマンの議論を次のようにまとめている。

「たとえば、語られている内容に責任をもつ者であることと、その内容を音声として発する者であることは、必ずしも一致しない、という。パーティに招待するため友人に電話して『Xさんも来れるかしら？』と聞いたとき、その友人がたまたまわきにいたXのほうを向いて『〇月×日のパーティに来れる？』と言うばあい、その友人は発話者であるとしても、必ずしもその質問（もしくは招待）自体に責任をもちうる者ではない。つまり、ゴッフマンのばあい、一つの発話にたいしてさまざまな参与のあり方のあること、これが問題だった。」[西阪, 1997:18-19]

言うなれば、人の手紙を届けはするが、その内容には責任を持たない、郵便配達人のように、IがDの指示を代弁するだけの者として存在している可能性は十分あり得る。しかし、IはDの指示にアレンジを加えることもあり、Iの判断で最終的な指示が進められたと考えられる場面がいくつかある。例えば、第2節で述べたGの確認<断片1>の場合に

ついて、Dはインタビューにおいて「Iにニュースを飛ばすよう指示は与えていない」[荒木・藤井・李, 1998:]と述べている。

紙面に余裕がないのでここで詳細を述べることはできないが、同じ日の他のコーナーにおいても、Dの指示がIによってアレンジされたことがある。Dは、そのコーナーが予定の時間を過ぎていたので、早めに終わらせるために、Dはスタジオ内にメモ書きでの指示を与えた。それに対しIは、ただ曲を飛ばしただけでなく、コーナーの残り時間の編成を自分で行って、もう一人にインタビューするという自分なりの判断を付け足した。

また、データZにおいて、この日は番組中に聖火リレーの中継が入ることになっていた。Dはいつものように、外部とのやりとりが重要な仕事になっていた。この日もIとDは番組進行のための作業を共同的に行っていた。ビデオを見てみると、Dは番組のCM中に「後クレ（コーナー後の提供）行って、生CMに行きましょう。」とスタジオ内に伝え、Iはその後、「はい。」と答え、自分とGの両方に対する確認として、「先に生CM行って、時間見て、時間あったら曲に行こうか。」と発言した。そして、Dにトークバックで「時間あったら、曲にしようか。」と提案し、それにDがうなずいて、「『風のララバイ』（曲名）に行きます。」とDは答えた。このように、IはDの指示をただ単に受け取って、他の参加者に伝えるだけでなく、I自身の判断でその場を作り上げていることもある。

ところで、IとGが互いに相手の意図していることを認識するためには、二人の志向の重なりの中に、お互いが志向していることを確認しなければならない。西阪はケンドンの議論を端的に要約して、以下のように述べている。

「ケンドンは、まず『志向空間』とでも呼んだらよいようなものを定義する。つまり、ある人が何かをしようとするとき、そのために使用するべき空間が、その人の前に拡がっている。この空間の拡がりの中心角の角度・半径の長さは、そこで何がなされるかに依存せざるをえない。ものを書くときと遠方に見かけた知人に声をかけるときでは、おのずと志向空間の大きさは異なる。複数の身体が出会うとき、それらの志向空間が重なりあうときがある。」[西阪, 1992 43:63]

つまり、IとGの例で言うならば、GはIの方を振り向きIを志向できる位置にいる。そして、Iの視線はGを直接見るものではないが、Gの様子を「モニター」できる位置におり、Iの志向空間は、Gを観察できる範囲にある。それは、IとGが互いに志向できる枠組みに存在していると言えよう。

しかも、単位事項と単位事項の移行期間は、場面が緩んでいる状態なので、他への志向を表示しやすい時期である [cf.森田, 1997:119]。この場面も、コーナーとコーナーの移行部で、場面が緩んでいるため、他の行為を挿入しやすい。他の行為とは、Gが読み終わった原稿を右に移動させて、Iの方を向き、確認を求め、ニュースを読み始めようとするところを指す。このGの行為は、自然なものとして捉えることが可能であり、Iの振る舞いととも、番組進行に必要な合意を達成している。

このように、Iが自分自身をスタジオ内での番組の進行者であると感じているのに加え、スタジオ内の共演者（S、G、D）も、Iの指示を期待しているからこそ、上記のような様々な方策が可能になっているのである。換言すれば、ラジオ番組は、ラジオスタジ

オ内での相互行為連鎖を通して達成されていると言えよう。

注

- (1) この論文に登場している主なメンバーは、I (チーフアナウンサー)、S (女性アナウンサー)、G (男性アナウンサー)、W (日本気象協会の人)、Y (ゲスト)、K (コメンテーター)、D (ディレクター) である。データXの配置図を参照。
- (2) トランスクリプト記号については第I部記号一覧を参照
- (3) スタジオ内には、モニターと呼ばれる小型画面のテレビが二台設置されており、一台は、ディレクターがスタジオ内に指示を出すための道具 (モニターI)、そしてもう一台は、番組のプログラムが映し出されている (モニターII)。この番組においては、調整室にいるディレクターが、指示を紙に書き、それをCCDカメラで撮って、スタジオ内の小型画面に映し出し、スタジオ内にいるアナウンサーに指示を伝えるという方法を用いている。データXにおいては、モニターIは故障していた。
- (4) ラジオ放送においては、Qシートという番組進行表にのっとなって、番組を進めていく。この番組においては、Dが作成している。何分からそのコーナーが始まるか、CMを何秒流すか、等が記号を用いて示されている。前提として、この情報は番組関係者 (アナウンサー、ディレクター、機械を操作する人、コメンテーター、ゲスト、アシスタント) に共有されている。次に、Qシートの一例をしめす。

9:00	T M & B G 前 T M	DF▼ DF▼	3' 00"	★THIS MORNINGS NEWS HEADLINE ★ あいさつ G アナ、中国から帰国！スタジオ見学者もたくさんいます！ 今日のラインナップ コメンテーター紹介：徳島大学総合科学部 K さん
	T M & B G 後 C M B G	DF▼ TEL AF	3' 00" ' 40"	★WEATHER INFORMATION ★ 日本気象協会 (W さん)
	後 C M B G	DF▼ AF DF▼	' 15"	★海上気象情報 (提供：四国マリーナ) (後ワクあけ) 今週のニュースを振り返りましょう・・・

- (5) 第I部のQシート参照
- (6) 配置図+記号一覧は第I部にのっているので参照
- (7) 以下にニュースの原稿の一例を示す。ニュースの原稿はこのように読みやすいように作成されている。

共A3東013一般02R③完①
◎プノンペン内戦状態に
邦人巻き込まれ重体

共同通信によりますと、
カンボジアできのう、
ラナリット第1首相派と、
フン・セン第2首相派の兵士らの間で

銃撃戦となり

首都ブノンベンは内戦状態に

なっています。

この銃撃戦で兵士や市民ら30人が死亡、
35人がけがをしました。

また、日本の企業の

「オリエンタルコンサルタンツ」の

(続) (H) (11) 970706 0039 131字

共A3東014一般02R③完②

ブノンベン事務所にロケット弾が

撃ち込まれ、

事務所長の岡島隆正

(おかじま・たかまさ)さん38歳が

病院に運ばれましたが、

意識不明の重体になっています。

交戦はブノンベンと近郊の4カ所であり、

ブノンベン西部にあるラナリット派の

政府軍副参謀総長や

軍高官などの自宅が攻撃されました。

このためブノンベン市当局は夕方、

昨夜10時からきょう午前6時間での

外出禁止令を出しました。

(続) (H) (13) 970706 0039 178字

共A3東015一般02R③完③

また、銃撃戦の影響で

ポチェントン国際空港が事実上

閉鎖されました。

ブノンベン市内は、

装甲車も出動するなど

緊迫した状況が続いています。

(了) (H) (06) 970706 0039 65字

※なお、本来の原稿は縦書きである。

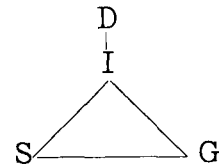
(8) 第I部配置図参照

(9) 調整室とスタジオの音声による交流装置。ディレクターは調整室のボタンを押すことによって、オンエア中であっても、リスナーに聞かれずに自らの指示をアナ

ウンサーに伝えることができる。逆にアナウンサーも音声をディレクターに伝えることができるが、これはスタジオ内の音声がオンエアされていないときに限る。録音素材（曲、録音したインタビュー、など）やCM中はスピーカー、それ以外ではアナウンサーがつけているイヤホンにディレクターの声が流れる。

(10) マイクの音量を調節するレバー。カフを上げると音量が大きくなり、カフを下げると音量は小さくなる。

(11) 右図のように、IとDの合意済みの情報がSとGに流れてくる仕組みになっているので、Iに従うことが最終決定に従っていることになる。



(12) カメラアングルの影響で、Yの視線を捉えることはできなかった。

(13) 注(3)を見よ。

(14) Gアナ、Kディレクターはインタビューで、曲をとばすこともあると述べているが、曲はとばさないのが基本である。

(15) 人差し指を立てて、それを回し、話を早く終わらせることを促す行為のこと。ここでは、IがSに対して行ったことを指す。

参考文献

- 荒木・藤井・李, 1998, 「Kディレクターへのインタビュー」『ラジオスタジオの相互行為分析 平成9年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書』付録第2章。
- 荒木・藤井・李, 1998, 「Gアナへのインタビュー」『ラジオスタジオの相互行為分析 平成9年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書』付録第2章。
- 岡田光弘・山崎敬一・行岡哲男, 1997, 「救急医療現場の社会的な組織化」『語る身体・見る身体』ハーベスト社: 168-185。
- 小林康夫・船曳建夫 編, 1994, 『知の技法』東京大学出版会。
- 皆川満寿美, 1993, 「『無関与』の協同的達成」『現代社会理論研究』3: 47-67。
- 森田聡之, 1997, 「気にすること・無視することの分析可能性」『語る身体・見る身体』ハーベスト社: 99-122。
- 西阪仰, 1992, 「参与フレームの身体的組織化」『社会学評論』169: 58-73。
- 西阪仰, 1995, 「〈会話をフィールドにした男〉サックスのアイデア」『言語』24(7 ~ 12)
- 西阪仰, 1997a, 「会話分析に何が出来るかー社会秩序の問題をめぐるー」『社会学になにができるか』八千代出版: 115-154。
- 西阪仰, 1997b, 「語る身体・見る身体」『語る身体・見る身体』ハーベスト社: 3-29。
- 日本民間放送連盟編, 1997, 『放送ハンドブック(新版)』東洋経済新報社。
- Schegloff, E. A. and H. Sacks, 1972, "Opening up closing" *Semiotica* 7: 289-327 = 1995 北澤裕・西阪仰訳「会話はどのように終了されるか」『日常性の解剖学』マルジュ社: 174-241。
- 山崎敬一・佐竹保宏・保坂幸正, 1993, 「相互行為場面におけるコミュニケーションと権力」『社会学評論』173: 30-45。

第3章 ラジオ番組内のコーナー終了部分における相互行為分析

インタビュー班

0. はじめに

「番組の構造は、どのようにスタジオ内の相互行為の構造と結びついているのか。」これがまず私たちの問いかけである。それを分析するために私たちは、ラジオ放送におけるあらゆる相互行為の中で、番組内のコーナー⁽¹⁾の終了部分に注目した。この部分を分析することで、コーナーの終了の仕方がどのようにスタジオ内の相互行為のありようと結びついているかを明らかにできるのではないかと考えたのである。そこではあらゆることが分析可能である。ラジオ放送において、コーナーを終わらせるためには、会話を終了させることが不可欠である。しかし私たちがここで提示するトランスクリプトには、コーナーが終了した後もう1度（いや2度）会話の終了を表すと思われる語、言い換えれば終了を表す語の組み合わせが発言されているのだ。つまり“終了が2度（いや3度）ある”ように見えるのだ。これは私たちにはとても奇妙なことのように思えた。まずこの場面をトランスクリプト⁽²⁾を使って分析してみよう。

1. 第1番目の終了部分

〈断片1〉 データX 9 : 58' 08" ~ 9 : 58' 54"

〔I面〕

↓①

I P P P P P

Y : その :

P M M M M M M P P P P P P P P P P P P

I : じゃその女性像も (.) これから (.) 鎌倉時代入ってどう変わっていくかっ

P P

S :

P P

G :

P P

K :

〔Ⅱ面〕

PPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPIPPPPPPPPPPPPPPPP
 Y : 　　　　　　　　　はい　　　　　　　　　あどうもありがとう

PPPPPYYPppppppppppppppppppppppppppppppppp
 I : てのまた次回楽しみです　　どうもありがとうございました//

PP
 S : 　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　//ありが

PPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPIIIIIIII
 G : 　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　//あり//がとう

PPPPPPPPPPPPPPPIIIIGIIIIIIIIIIIIIIIIIIII
 K :

〔Ⅲ面〕

【会釈】 ↓②

PPPPPPPPPIIIIIPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPP
 Y : ございました

PP
 I : 　　　　　　　え今日は元県立文書館館長大和武生さんにお話を伺いました(.)

MMPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPP
 S : とうございました

G : ございました

K :

〔VI面〕

↓③

【会釈】

↓④

中中腕腕腕腕腕PPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPP

Y :

【イヤホンはずす】

PPYYYYYYYYYYYYPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPP

I : hhどうもありがとう//ございました

PPYYYPP

S : //ありがと//うございました

G : //お世話になりました :

K :

〔VII面〕

↓⑤

【立ち上がる】

PPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPP中中中中中中中中中中中中中中中中中中PPPPPP

Y : 昼から阿南市で講演が// それでは

PPPPPPYYYYYYYYPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPP右左下

I : //ふう //あっそうなんです//か

PP

S : //ふう //忙しいですね

G : //ふう

K :

この場面は「阿波の歴史シリーズ」⁽³⁾というコーナーの終了部分である。

私たちは前に終了部分が2度いや3度存在すると書いた。まず第1番目の終了部門であるが、これはOnAir中、つまりコーナーの最後の部分である。トランスクリプトでいうと、アナウンサーであるIの「じゃその女性像もこれから...。」〈断片1. I面の①〉に始まり、Sアナウンサーの「ありがとうございました。」〈断片1. III面の②〉までの部分であろう。ここを第1番目の終了部門と私たちは考えた。ここの終了部門について少し詳しく見てみよう。

ここに見られるIの「じゃその女性像もこれから...。」という発言は終了部門の導入と言えるだろう。Y, I, S, G, 4人による「(どうも)ありがとうございました」が終了交換であるとも考えられる。終了部門は終了交換によって完結するのである。では導入部分をより詳細に見てみよう。Iの「じゃその女性像もこれから...。」〈断片1. I面の①〉という発言は、シェグロフ&サックスの言う「話題限定 (Topic bounding)」あるいは「未来の取り決め」と同様のもので、終了を導くものと言える。ちなみに「話題限定」の説明はこうである。「これは一方の話し手が昔ながらの知恵を格言的あるいは警句的に表現したものをを用いることからなっている。(中略)このような表現は『合意を得やすい』ので、この表現が一方の者から与えられ、他方の者が合意を示した場合、話題は終了に持ち込まれたのだと受け止められるだろう。」[シェグロフ&サックス 1972=1995: 203] つまりこれはこういうことである。話題を限定することによって、それまでの話を終了する準備をするのだが、ここでのIもまた同じ作業をしている、ということである。そしてこの後に、返答としてのYの「はい」〈断片1. II面〉が続くことから考えて、ここで先終了 (Pre-closing)⁽⁴⁾が行われていると考えられる。ここでのYの「はい」〈断片1. II面〉は、もうY自身が話すことはないという、Y自身の“発話権のパス”となっている。そしてそれが終了交換へと結び付いていると私たちは考えている。この場合〈断片1. I面の①〉について言えば、かなり強引な割り込み〈断片1. I面. Iの「じゃ...。」〉によって終了部門は始まっているが、終了部門自体は、うまくいった、ととることができるだろう。これが第1番目の終了部門である。もう少し説明すると、第1番目の終了部門は、放送番組内のコーナーの終了である。そしてリスナーが志向されている(≡マイクに会話が入るように気をつけられている)終了であると言える。

2、第2番目の終了部門

では私たちが考える第2番目の終了部門について見てみよう。第2番目の終了部門は、音楽が流れ始めてすぐ後のところである。〈断片1. VI面の③~④〉つまりリスナーには音楽だけが聞こえている状態である。ここでは、Sが曲を紹介し終えてすぐカフを下ろす行為、そしてIがイヤホンを外しながら体の向きを変え、Yを見るという一連の行為〈断片1. VI面〉が終了部門の導入となっていると分析できる。そしてIの「どうもありがとうございました」という発言と、Yの会釈〈断片1. VI面〉によって終了交換が行われたと言えるだろう。第2番目の終了部門は放送番組内のコーナーのために焦点づけられた集

まりの⁽⁵⁾終了である。ここでの終了は、マイクが無視されているものの、終了交換が体系的であると言える。(Iがリードして発言しているが、ほとんど同時発話のような状態で、I、S、Gが「ありがとうございました」「お世話になりました」と発話している。これらは一体のものとみなせる。)これが、第2番目の終了部門である。

3, 第3番目の終了部門

次に私たちが考えたのが、第3番目の終了部門があるのではないか、ということである。第3番目の終了部門は、〈断片1のⅦ面の⑤からⅧ面の⑥〉までと私たちは考えた。

「昼から阿南市で講演が…」〈断片1.Ⅶ面〉というYの発言は、「明示的な宣言」[シェグロフ&サックス, 1972=1995:211]のように思える。この発言は明らかに会話を終了させようとしているように思える。次の約束を持ち出すことは、会話を終了させる有効な手段の一つと言えるだろう。シェグロフとサックスは「行かなくちゃ」という言葉について説明している。そこでの「行かなくちゃ」は、Yの発言と同等の意味を持つと言えるだろう。「『行かなくちゃ』は、引き続き談話がなされることを禁止することができないし、また他者が、この発話の後に、言いたかったが言えなかったことを導入することもあるものの、しかし明らかに『わかった』⁽⁶⁾がともなうのと同じ結果を招くことはない。『行かなくちゃ』が用いられた場合、話題にもとづく談話を再び始めるという特殊な代替肢は発動しない傾向がある。だから終了部門を開始することにおいては、この先終了句の方が、『わかった』よりも効果を発揮する傾向にある。」[シェグロフ&サックス, 1972=1995:212]このことから、ここでのYの発言は終了部門を開始するための先終了句と読みとれる。そしてこのYの「それではどうも」、Gの「お世話になりました」〈断片1.Ⅶ面～Ⅷ面〉が終了交換にあたる。

このように第3番目の終了部門を経て、Yは立ち去ることができた。また逆に、Yが立ち去ったことから、〈断片1のⅦ面からⅧ面〉が終了交換と言える。これが第3番目の終了部分である。第3番目の終了は、スタジオに同室している焦点づけられてない集まりの終了と言える。ここではマイクも無視されているし体系的であるとも言えない。第2番目の終了と違って全員参加の終了はなく個人個人がかってに終了を行っている。又、私たちはトランスクリプト中にある「お世話になりました」〈断片1.Ⅵ面とⅧ面〉に注目した。本番のコーナーが終了する時Y. I. S. Gは「ありがとうございました」〈断片1.Ⅱ面〉と例外なく発言している。しかしコーナーが終了してしまった後Gは「お世話になりました」と発言している。確かに「ありがとうございました」も「お世話になりました」も会話を終了させる(終了変換)の可能性のある語ととることができる。しかし、もし「お世話になりました」を本番中に発言したらどうであろうか。それはあまりにも不自然と言えるのではなかろうか。明らかにGもSも「ありがとうございました」「お世話になりました」を使い分けているといえるだろう。

ではなぜか。なぜ「お世話になりました」は番組中に使えないのか。これについて榎田は賢明な主張をしている。「アナウンサーは放送中は『お世話になりました』は言えないんですよ、だって『お世話になりました』は業務上の会話に聞こえるんですよ。いわゆる

ゴッフマンのいうバックリージョン（裏領域）⁽⁷⁾ と言うんですかね。つまりね『お世話になりました』ってのは放送局側の人間が言うべきセリフなんですよ。アナウンサーは放送局側の人間ではあるけれども放送中は業務性があらわな発言はしないようにしているんだよ。でもね『ありがとうございました』は放送中でもそうでなくても使っていていいわけ。」
[樫田・1998.1.30] つまり「お世話になっています」と発言されているときは業務の域の中にある。そして確かに「ありがとうございました」と「お世話になりました」は使い分けられているのだ。

「昼から阿南市で講演が…」〈断片1. VII面〉というYの発言はこの第3番目の終了部門の先終了句であると述べた。ここではこのセリフが発せられた状況からYが立ち去るまでについて分析する〈断片1. VII面.VIII面.IX面〉。

第2番目の終了を終えた後、つまりコーナーのための集まりの（解放）がなされた後、Yはこの発言をしている。このYの発言は唯一Iだけの視線を獲得した。しかしすぐIは視線をそらしている。Sも視線を合わせず「忙しいですね。」と発言している。GもKも視線を合わせない。まるで他の全員が無視しているように感じられる。なぜか。それはここで会話が弾んでしまうことを恐れていたからと言える。会話が長引いてしまえば放送事故にもなりかねない。第2番目の終了部門が終わった後全員下を向いたままであった。そういう状況下で発せられたのがこの「昼から阿南市で講演が…」という発話である。私たちはこのYの発言は先終了句であると述べた。この発言はその後のYの「それではどうも。」の引き金になっていると感じられた。この発言でYは視線を獲得できなかったものの、返答は獲得できた（Iの『あっそうなんですか』とSの『忙しいですね』）。つまり先終了できたのである。それによってYは「それはどうも。」と発言できたのだ。その後立ち去る時も学生に会釈しながら「がんばって下さい」と発言しながら立ち去っている。このことから言えるのは人を加入させてまで終了するきっかけが探し求められることがあるのだということである。このことについて西阪はグッドウィンの主張を取り入れて論じている。⁽⁸⁾ そしてあいさつなしでは立ち去ることができない場面だったとも言えるだろう。

ここまで終了部門について考察してきた。その結果私たちは“終了が3回存在する”ということに関する分析ができたと思っている。そしてその3つの終了の意味が異なっていることにも言及してきた。もし私たちが主張するように、3度も終了が完了しているなら、3つの異なったものが終了部で終了していると考えるのが普通ではないだろうか。しかしここで新たな疑問が生まれてきた。それは「終了が3度あるということは開始（はじまり）も3度あるのではないか。」という疑問である。次の節でそれに触れることとする。

4. 開始は3度ある（か）

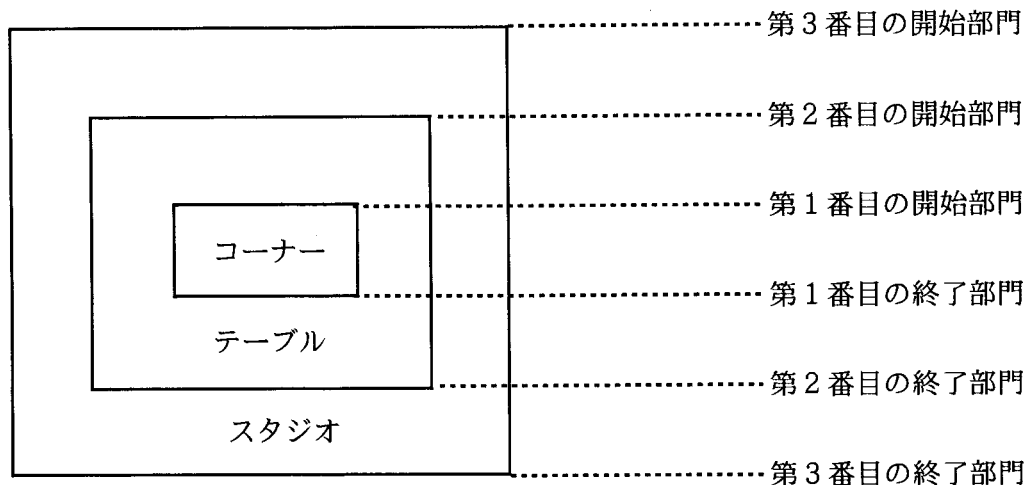
前節で開始（始まり）は3度あるのではないかと述べた。残念ながら「阿波の歴史シリーズ」の開始部分のトランスクリプトは紙幅の都合上のせることはできないが、結論から言ってしまうれば開始は3度あるということだろう。では「阿波の歴史シリーズ」の開始部分についてできるだけ詳しく述べてみたい。

まずYが「阿波の歴史シリーズ」に参加するためスタジオのドアを開けて入ってくる。この時Gが出迎いのあいさつをかわしている。ここまでが第3番目の始まりである⁽⁹⁾。つまり焦点づけられてないスタジオ内の集まりにYが入ってきたと言える。では第二番目の始まりは、テーブルの近くに寄ってきて、アナウンサー(I・G)やコメンテーター(K)とあいさつをかわし、席に着いたところである。ここでコーナーのための集まりが完了したといえる。ここでしばらく沈黙があるのだが、IはいきなりYさんに何の前ぶれもなくYに「途中で一回CM挟みます。」と発言している。このことことからYはすでにこのコーナーの集まりに加入していると言えるし、第2番目の始まりはもう起こっていると言える。このように考えると第1番目の始まりはOn Airのコーナーの始まりを意味する。ここで明確なゲストの紹介があって然るべきなのだが、なぜかゲストの紹介がなされることなくコーナーが始まっている。⁽¹⁰⁾けれどここでIによって「さあウェーブレポートの時間です。」という明確なコーナーの始まりが宣言されている。このことから考えて、ここが第1番目の始まりと言えるだろう。このように始まりもやはり3度あるのである。

5. 3度の終了と3度の開始(始まり)の構造

この節では今まで説明してきた3つの終了部門と3つの開始部分がどのような構造になっているかを図を使って説明してみよう。

〔図1〕



(時間は上から下に流れている)

第1番目の終了部分はコーナーの終了を意味する。トランスクリプトで言えば〈断片1. I面. II面. III面. IV面〉のところである。コーナーと書いてある部分はOn Air中を意味する。ここでの終了は、ゲストを迎えての会話の終了を意味する。ここでの終了は体系的なものである。第2番目の終了部門は、コーナーが終わってすぐのところである。ト

ランスクリプトで言うと〈断片1．VI面〉である。ここは放送番組内のコーナーのために焦点づけられた集まりの終了である。ここでGは「お世話になりました」と発言とすることからもわかるように、ここはもちろんOnAir中ではない。裏局域にあたるのだ（このことは3節で述べた）からマイクも無視されている。そして参加者全員がテーブルを囲んで終了交換していると言える。つまり体系的である。第3番目の終了部門は、ランスクリプトで言えば〈断片1のVII面、VIII面、IX面〉である。これは、スタジオに同室しているが、焦点づけられていない集まりの終了と言える。ここでの終了は体系的でなく、個人がそれぞれに終了交換を行っている。もちろんマイクは無視された状態である。また、別の言い方をすれば、スタジオ空間をあとにするための終了とも呼べるものである。

次に開始（始まり）部分についてであるが、スタジオに入ってきたときに、開始のあいさつが（YとGによって）行われる。これが第3番目の始まりである。読者の皆さんにとっては、なぜ第3番目から始まるのか理解しにくい方もおられると思うが、〔図1〕を見てもらえれば、わかって頂けるだろう。そして第2番目の始まりが、テーブルの近くに寄ってきて、アナウンサー（I、G）そしてコメンテーター（K）とあいさつを交わし、席に着くところである。つまり、OnAir中ではないものの、コーナー開始のための準備が開始した状態のところである。ここでは、焦点づけられた集まりが、開始されたともとれる。最後に、第1番目の始まりである。それはもちろんコーナーの開始部分である。つまりマイクを通しての始まりである。

3つの終了と3つの始まりは、このように図示することができる。ゲストはこの構造の外から入ってくる。第3．第2．第1の順番で開始（始まり）部分を通過し、コーナーに参加する。そしてコーナーを終えると第1．第2．第3の順番で終了部分を通過してスタジオを去っていくのである。

6．まとめ

私たちは「番組の構造はどのようにスタジオ内の相互行為と結びついているのか。」という疑問点から出発した。それを分析可能にしてくれるのがコーナーの終了部分でありコーナーの開始部分であったのだ。3度も終了が行われていることに私たちは驚いた。しかもその3度の終了は実は異なっていてどれも必要なのだと私たちは考える。そしてそれと対するよう開始（始まり）部分も3度存在すると言えるだろう。⁽¹¹⁾

ここで示した相互行為がラジオスタジオ、ラジオ放送を支えているということも可能であろう。私たちのこの分析はラジオスタジオ、ラジオ放送の制度を支える相互行為の分析と言えるのではなからうか。そして私たちの行った研究が制度研究としての相互行為分析の下地になれば幸いである。

（注）

（1）私たちがコーナーとよんでいるのは、人の配置が行われてから次の人の配置が行わ

れるまでのこととする。

- (2) トランスクリプトの記号とスタジオの配置図は、第1部のトランスクリプト例を参照。また、私たちがここで提示するトランスクリプトにおいて視線の表記が抜けているところがあるが、それは分析不能だったところである。
- (3) 正確には、このコーナーは、徳島ウエブリポートの「30分でわかる阿波の歴史シリーズ」の3回目である。内容は中世の阿波の歴史についてである。
- (4) 先終了句 (Pre-Closing) とは、シェグロフ&サックスによって作られた言葉で、正確には「先終了となる可能性のある句」と呼ばれてもよいのである。この句によって終了部門を適切に開始することができるようになる。詳しくは [シェグロフ&サックス, 1972=1995: 174-241] を参照。
- (5) 焦点づけられた集まりについては、[ゴッフマン, 1963: 35-55] を参照。
- (6) 「わかった」は「うん」「そうだね…」等と同じように先終了句のひとつである。詳しくは [シェグロフ&サックス, 1972=1995: 174-241] を参照。
- (7) バックリージョン (裏領域) と対するものとして、フロントリージョン (表局域) がある。フロントリージョン (表局域) はこのラジオ放送の場合 OnAir 中を指す。バックリージョン (裏局域) は OnAir 中でないときのことである。詳しくは [ゴッフマン, 1963: 35-155] を参照。
- (8) 詳しくは [西阪, 1997: 3-29] を参照。
- (9) なぜ第3番目の始まりなのかについては、次の節の [図1] を参照。
- (10) これはゲストを紹介し忘れていたということが、Sの発言によってわかった。
- (11) 開始が3度存在するかについては、もう少し議論の余地がある。

参考文献

- Goffman, Erving, 1959 "The Presentation of Self in Everyday Life", Doubleday & Company, Inc. =1974 石黒毅 訳「さまざまの局域と局域行動」, 『行為と演技—日常生活における自己呈示』 誠信書房: 124-163.
- Goffman, Erving, 1963 "Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings", The Free Press of Glencoe, 1980, 「焦点の定まらない相互作用」, 「焦点の定まった相互作用」, 丸木恵祐・本名信行 訳, 『集まりの構造—新しい日常行動論を求めて』, 誠信書房: 35-155.
- 森田聡之, 1997, 「気にすること・無視することの分析可能性」, 山崎敬一・西阪仰 編, 『語る身体・見る身体』, ハーベスト社: 99-122.
- 西阪仰, 1997, 「語る身体・見る身体」, 山崎敬一・西阪仰 編, 『語る身体・見る身体』, ハーベスト社: 3-29.
- 岡田光弘・山崎敬一・行岡哲男, 1997, 「救急医療現場の社会的な組織化」『語る身体・見る身体』, ハーベスト社: 168-185.
- Schegloff, E. A. and H. Sacks, 1972, "Opening up closing" .Semiotica 7: 289-327 = 1995 北澤裕・西阪仰訳「会話はどのように終了されるか」『日常性の解剖学』マルジュ社: 174-241.

山田富秋, 1995, 「会話分析の方法」, 『他者・関係・コミュニケーション』, 岩波書店:
121-136.

第4章 オープン・スタジオにおける番組参加者の志向性

-参加フレーム・マイク・リスナー-

FMやまのは班

1 問題

7月6日のFMやまのは⁽¹⁾のオープン・スタジオ⁽²⁾での様子が撮影されたデータを分析するにあたり、私をはじめに注目したのは、番組の終了場面であった。〈断片1〉は、午後2時40分ごろから放送された番組「フォーティーン・セイリング」の終了直前の場面で、3節で分析する〈断片4〉の音声だけを書き出したものである。

〈断片1〉：データY：3:34' 25"~3:34' 35"⁽³⁾

01 M：=(これまで)お届けしてまいりました、今日のお相手はわたし

まつやまだこう(い)ちと：:

02 (1.0)

03 S：サミュエルと=

04 Y：=ディージェーやすと

05 H：ほりせいだいで

06 (1.0)

07 M：そして

08 (1.6)

09 C：つばめのチャンチャンでした:=

10 M：=このあと、チャンチャンスペシャルお届けhしてまいりま：:す

M、S、Y、H、Cは、いずれもFMやまのはのメンバーで、かつこの番組の参加者である。番組を「届け」てきたかの女/彼らは順番に名乗り、この後に番組「チャンチャンスペシャル」が放送されることを公表している。

私には、参加者の名乗りが、特にHとCとの間がスムーズになされていないことが、たとえFMやまのはが営利を目的とした放送でなく、参加者がプロではないとしても、不思議であった。「つうじょう我々は、相手の外的な振る舞いに、内的な心理状態を対応させるなどといったことをしなくとも、端的に、お互いの行為を理解・記述・報告することができる」[森田, 1997: 103]から、Cは、Hの次に発言するのを期待されていることを理解しているはずである。

ところで、〈断片1〉の9行目のCの発言は、CがCの左隣に位置するSの前に置かれているマイクを使用してなされていた。FMやまのはでは、マイクが置かれたテーブルを囲むように参加者が椅子に座っているのだが、おもしろいことに、この時点においてCの前にはマイクは置かれていなかったのである。

ここでは、七夕を話題としたMに、Sが、Mは個人的に七夕の日にどのようなことをするのかと尋ねたところ、Mが答えに詰まったので、SはCを振り返って見て「七夕ってなにをするの」と尋ねている。図1はそのときの静止画像データである。そしてCはSの質問に答えて発言している。

ここで注目すべきことは、SがCを見て話している、そのしかたである。このSのふるまいには異なる二つの志向が含まれている。ひとつはCに対する志向で、もうひとつはマイクに対する志向である。Cに対する志向については、SがCに視線を移しているのが図1から明らかであるので、問題ないであろう。しかし、Sのマイクに対する志向には若干の説明を必要とするであろう。

そこで図2を見て頂きたい。Sが、①のマイクに正対している状態から、Cを志向つまりCを見ようとする、②で示されるように口もとがマイクから離れてしまう。ゆえに、Sが、2つの異なる志向を両立させるためには、③のように顔をマイクに向かって左側に移動させる必要がある。

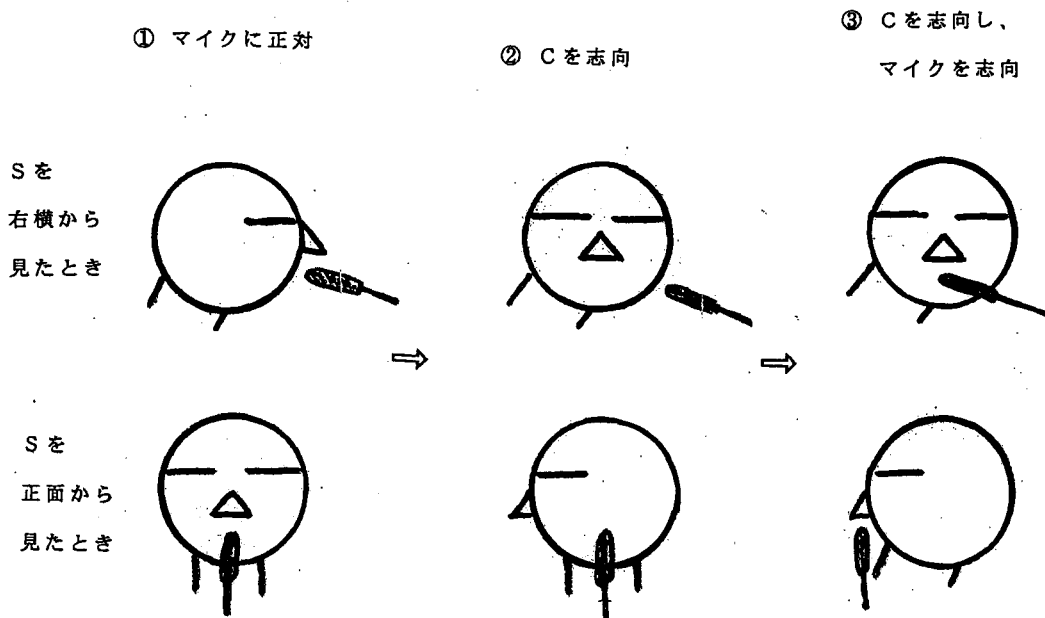


図2 SのCとマイクの志向の図式化

参加者は、番組のなかで放送すべき会話をするときには、いつでも会話できる体勢をとっている。それはマイクを志向していることを示しているが、それだけでは明確さに欠ける。しかし<断片2>の分析は、参加者がマイクを志向している証拠となる。

マイクを志向するということは、どうじにマイクを通して放送される会話を聴いているリスナーを志向しているということである。その証拠として<断片3>についての分析を次に示す。

<断片3>においては、場面全体にわたりスタジオのそばを通過するジェット・スキーの走行音が響き、またスタジオのそばを、買物をしているとMが判断した2人の女性が歩いている。視線の向きと発言の内容から、Mはその女性に向けて発言している。図1はそのときの静止画像データである。

Mは「買物をしている」2人の女性に話しかけているのであって、他の参与者、つまりS、Y、H、Cに話しかけているのではないということは、他の参与者がMに視線を送るなどの反応をしていないし、Mもそのことを不思議がっていない、ということからも示される。Hだけは反応しているようなふるまいを見せているが、それはHが歩道に面した位置に座っており、歩道を歩く女性へのMの視線を誤って受け取ってしまったからだと思われる。

Mの発言とふるまいは、オープン・スタジオにおける放送らしさ、つまり番組のライブ感の演出であり、そのことはまずMがリスナーを志向していることを示している。また、他の参与者も反応しないことによってライブ感の演出に参加していることから、リスナーへの志向をもっていることが分かる。

3 参与フレームから見える参与者たちの志向

これまで、参与者がラジオ番組らしくふるまうそのしかたとして、参与者がリスナーを志向していることについて述べてきた。これからは、番組のなかの参与フレームに注目して参与者がリスナーを志向していることを示しながら、あわせて、私自身の疑問である「参与者が目の前のマイクを所有している／していない」ように見える部分についても、私なりの説明を試みる。

西阪によれば、「参与フレームは、参与者たちの参与のしかたであり、どうじに参与者たちが参与している場面設定における出来事を経験するための枠組」[西阪, 1992: 61]である。すなわち、参与者の位置や向き、体勢のありかたであり、その形式のなかで、場面場面における参与者のふるまいが有意味なものとして参与者自身や分析者に認識されていくのである。

<断片4>は、1節で少しふれたが、午後2時40分頃から放送された番組「フォーティーン・セイリング」の終了直前の場面である。また、図4、図5、図6は、それぞれ<断片4>に示した時点での静止画像データである。



図4 SとYはマイクに正対 カメラI (3:34' 25")



図5 SとYはマイクから離れる カメラI (3:34' 28")

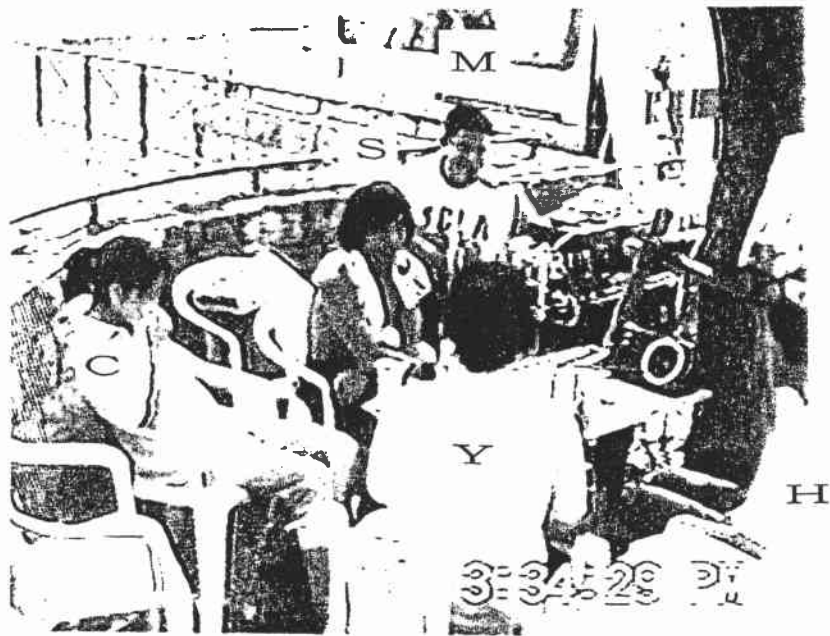


図6 SとYが再びマイクに正対 カメラI (3:34' 29")

図4、5、6を見ると、次のようなことが分かるだろう。参加者は、マイクが置かれているテーブルを取り囲むように座っている。マイクはS、Y、Hの正面には置かれているが、Cの正面には置かれていない。参加者の座っている椅子とテーブルとの位置関係について言えば、S、Y、Hの座る椅子に比べ、Cが座る椅子はテーブルから離れている。

<断片4>で何が起きているのかについて細かく見ていこう。この場面の前に、MはH、Y、Sにこの順番でコメントを求めている。そしてそれに続くMの「これまでお届けしておりました、…」という発言の間にSはMを見て、続いてYに視線を移しながら2回うなずいている。その後SとYはマイクから離れ椅子に深くもたれ、さらにYはアイスを食べようとしている。その後、Mが自分の名前を名乗るに至ると、S、Yは体を起こしマイクに近づき、それぞれ名乗っているが、Cは椅子にもたれたままで体を起こさない。Hはこの間一貫して、マイクに接近はしていないが椅子にもたれてもいない体勢を続けている。Hの発言の後、MはCを見ており、CはHからMへとゆっくりと視線を移している。MはHの視線を獲得したとき、「そして」とCの発言を促し、Cは身を乗り出してSのマイクに近づき発言している。そのあとMは、番組「チャンチャンススペシャル」がこの後放送されることを発言して、番組を締めくくっている。

参加フレームの観点から<断片4>の様子を見てみる。SとYは、まだ番組が終了していないにもかかわらず、マイクから離れ椅子に深くもたれたということ(図5)、いつでも発言できる体勢を崩したということであり、もうこの番組中では発言をする必要がないと判断したことが推測できる。しかしながら、その後に名乗るといふ発言をする必要が生じ

たとき、すばやく彼らは、いつでも発言できる体勢を作り出している(図6)。それに対しCは、この間椅子に深くもたれたままであり発言する気がないように見える。しかし、私は、発言する必要があるときに身を起こしてマイクに正対したSやYだけでなく、Cもまた、このふるまいをすることでリスナーを志向していたように思われるのである。

別の番組で、Cと似た立場の参加者を見ることができる。<断片5>は、午後3時45分ごろから放送された番組「チャンチャンスベシヤル」の冒頭部分であり、図7は、<断片5>に示された時点での静止画像データである。

<断片5> : データY : 3:45' 21" ~ 3:45' 36"

KKK : 缶ジュースとカップ, III : 調整卓などの機器、中中 : 中空、下下 : 下

【マイクから離れている】

IIICCCCCCCCCCCCCCCCCC

M :

↓ 図7

CC

S : というわけでね なんか今日は、特番でチャンチャンチャン

【椅子に深く座り、マイクから離れている】

SS

Y :

【椅子に深く座っている】

SS

H :

nod nod

SS

C :

はい

チャンチャン

【右下のほうを見て缶ジュースを持ち上げる】

CCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCC下下中中C
CC

M :

【首をかしげる】

CC

S :

なんだろう(1.4)

SS

Y :

SS

H :

nod

【首をかしげる】

SS

C : チャンチャン

チャンチャンチャンチャンどこいくの

【右手で持っている缶ジュースを左手で持っているコップに入れる】

CCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKK

M : ちゃh//ははは =どんな番組やねん(2.0)

【Mのほうを見る】

CCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCFFFCFFFFFFFCCCCCCCCCCCCCCCCCCCC..MM.CCCCCCCCCCCC

S : //どこいっちゃうんだよ= 天気もいいし

CCSSSSSSSSSSSSSS

Y :

CCCCCCCCCCCCCCCCCCCC...SSSSSSSSSSSSSSSSSSFFFCFFFFFFMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMM

H :

【笑いながら椅子にもたれる】

【マイクに向かう】

SSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSFFFCFFFFFF (分析不能) SSSSSSSSSSSSS

C : //はhはhはh//はhはh

【コップのジュースを飲む】

#####

M :

nod

CC

S : どこいこうかなっていう= ねえ

SS

Y :

SS

H :

nod nod

SS

C : =そうですね はい



図7 番組「チャンチャンススペシャル」 カメラ I (3:45'23")

<断片5>は、この番組の仮のタイトルである「チャンチャンススペシャル」に代わる適当なタイトルをSとCが話し合っている場面である。Cの提案した「チャンチャンチャンどこいくの」に対して、Mが冗談半分で番組の内容がよく分からないと指摘したため、SとCが説明を加えている。

椅子やマイクの配置については、前の番組「フォーティーン・セイリング」のときとあまり変わらない。しかし、参加者の位置や体勢は大きく異なっている。まず、HとCの位置が入れ替わっている。つまり、Sと対面する位置にCが座っている。SとCは、互いに向き合い、視線を送り、会話をしている。それに対して、Mはマイクから離れ、もっぱら放送機器の操作に集中しており、Y、Hは椅子に深くもたれ続けている。

私には、参加者が番組の参与フレームを成り立たせているそれぞれのふるまいを維持し続けることによって、全体としてリスナーへの志向が作りあげられているように思われない。<断片4>におけるCと似た立場と思われる、<断片5>のYは、椅子に深く座り続けることで、全体としてのリスナーへの志向の一部を担当していたのではないか。このYは、Yの前にあるマイクを所有しているようには見えないが、むしろ私たちに「マイクを所有していない」と思わせるふるまいをし続けることで、全体としてのリスナーへの志向を作りあげていたのではないか。

4 おわりに

ラジオ放送の参加者は、番組のなかでさまざまなしかたでリスナーを志向している。そ

のやりかたのひとつにマイクへの志向がある。しかし、リスナーの志向は、参加者のそれぞれがべつべつになしているのではなく、全体としてなされているのではないか。また、「参加者が目の前にあるマイクを所有している／所有していない」ように見せる参加者のふるまいは、リスナーを志向することのひとつのやりかたではないか。

注

- (1)徳島市のある公園で毎週土・日曜日に開局されている。新町川を守る会の下部団体でメンバーは皆ボランティアである。リーダーであるM氏によると、電波を飛ばすことが目的ではなく、FMという手段を用いることで人が集まってくる、ということが目的であるそうだ。
- (2)FMやまのはは、公園にスタジオを作っているため、ふつうの放送局のように、内と外との仕切りが全くない。だから、参加者は自由に道行く人々に話しかけることができるし、外の情報をただちに番組に取り入れることができる。ただし、どうしても放送機材は限られた質と量になってしまう。
- (3)ここで使われているトランスクリプトについては、第1部の記号一覧表を見よ。

参考文献

- 森田聡之(1997)「気にすること・無視することの分析可能性」、『語る身体・見る身体』,ハーベスト社:99-122.
- 西阪 仰(1988)「行為出来事の相互行為的構成」、『社会学評論』,154:102-118.
- , (1992)「参与フレーム身体的自己組織化」、『社会学評論』, 169: 58-73.
- , (1997)「語る身体・見る身体」、『語る身体・見る身体』,ハーベスト社:3-29.
- 岡田光弘(1996)「『制度』を研究するということ —インタビューと119番通話の終了部の会話分析—」『現代社会理論研究』, 6: 165-180.
- 岡田光弘・山崎敬一・行岡哲男(1997)「救急医療現場の社会的な組織化」、『語る身体・見る身体』,ハーベスト社:168-186.
- Schegloff, Emanuel A. & Sacks, Harvey 1973 'Opening up Closings' *Semiotica*, 8(4): 289-327. = 1989「会話はどのように終了されるのか」北澤・西阪 訳『日常性の解剖学』pp.175-241.
- 山崎敬一・好井裕明(1984)「会話の順番取りシステム—エスノメソドロジーへの招待」,『言語』,第13巻,7月号:86-94.
- 山崎敬一・佐竹保宏・保阪幸正(1993)「相互行為場面におけるコミュニケーションと権力—<車いす使用者>のエスノメソドロジー的研究研究—」,『社会学評論』,173:30-46.

第Ⅲ部 付録

第1章 トランスクリプト例

(9時46分00秒～9時52分00秒)

Y : 言葉はねえ、平家物語のhなhかhにちゃんとできます。

I :

S :

G :

K :

Y : //ええ。

I : ああ、そう //です//か。//んん：：：ん。

S : //ふ：：：：//ん。

G :

K :

Y : で、そことおって、そいで、え：：にじゅう、う：：、じゅ：：はちにちに (.) 屋

I :

S :

G :

K :

Y : 島に着いておるんです。

I : はい。

S :

G :

K :

Y : だから二日間 (.) しかいなかったんですよ。//ここに、徳島に、

I : //あ、阿波にはね、え：：

S :

G :

K :

Y : ところが、hhhhま、今、いろいろお話あちこちのhほhっhていますね。

I :

S :

G :

K :

Y : だから : : // ええ : : 、 あっちよったりこっちよ
I : あっちへいった、こっちへいっ// た。
S :
G :
K :

Y : ったりっていうことでhhただねえ : : あの : : 、 私たちがこ、この時代のことを
I :
S :
G :
K :

Y : 考えるのには、あの、義経が、だけのことを考えたらいかんのじゃないかと思うんで
I :
S :
G :
K :

Y : すよ=
I : =う、う : : ん=
S :
G :
K :

Y : =んで、義経にかけてね (.) 義経に味方して、いくへいしが(.) あの : : 、みなよ
I :
S :
G :
K :

Y : っていくわけですよね=
I : =はい
S :
G :
K :

Y : で、hhあの : : 徳島へきたときは150人だったんですけども//屋島に
I : え //え
S :
G :
K :

Y : またあの : : h h 讃岐に入ったんだと、ずいぶん遠回りしたな : : : なんてことを考
I :
S :
G :
K :

Y : えるわけです // (けどもそうじゃないんだと思うんです。)
I : // ふ : : : ん はい。
S :
G :
K :

Y : ま、こういうふうにして(.) あの : : とうとう屋島の合戦を迎えるわけですけど :
I :
S :
G :
K :

Y : : ま : この屋島の合戦の時に非常におもしろいお話がございますね == なす // の
I : // はい
S :
G :
K :

Y : 那須与一の // 話 (ですね : :) // ええ
I : // あ : : // 有名なね // え : : :
S : // 有名ですよね : :
G :
K :

Y : んでね、それをちょっとね h h h 私昨日 h h 源氏物語で読んでたら(.) だいたいあ
I :
S :
G :
K :

Y : の、よ、80メートルから90メートルくらいのところまで : : : っと舟が(.)
I :
S :
G :
K :

Y : あの源氏方のほうへ平家の舟がやってきましたね。

I : // はい。

S : // ええ。

G :

K :

Y : ほいで、よこつけでえ : : : こ (の) はらを見せてですね (.) あの : : まっすぐ進

I :

S :

G :

K :

Y : ンできた舟が横向きになって

I : はい

S :

G :

K :

Y : ひとりのえ : : 17, 8のあの、え : : : (1. 6) 女の人がですねまああの : : :

I :

S :

G :

K :

Y : 柳がさねという、外側が白で裏側が青の (.) 重ね着、昔はねあの : : 色って言うの

I :

S :

G :

K :

Y : は全部かさねだったんですよ。

I : ふ : : : ん。

S :

G :

K :

Y : ンであっ色っていうか着物はね、

I : はあはあはあ

S :

G :

K :

Y : ほいであの今みたいにプリント (.) の技術はありませんので

I : ふ : : : ん

S :

G :

K :

Y : 裏に赤い着物を着て、それで上白着ると桜重ね=ピンクになる

I : //ほ : : ん

S : //ふ : : ん

G :

K :

Y : ほいで裏に2枚赤を着ると、それが濃くなるでしょ//

I : //ほ : ほ : //ほ : ほ :

S : //ええ

G : //ん : : : :

K :

Y : そういうふう工夫して色を出していくんです// (けれども)

I : //へえ : : :

S : //はあ : : :

G :

K :

Y : その時に(.) 彼女が着ておったのがですねえ、柳がすりといいまして、下が青で上

I :

S :

G :

K :

Y : が白なんですね//表が

I : //ほお : // : :

S : //んんんん

G :

K :

Y : ほんで、まあすみどりにうつりますかね、そいれにえ : : はかまが赤でございまし

I :

S :

G :

K :

Y: てね

I: はい

S:

G:

K:

Y: んで、赤いうちわに、い: : 金色の (.) 丸を描いた扇をひらひらひらひらさせて

I:

S:

G:

K:

Y: //挑戦するんですね=//=挑発するんですね=

I: //ふ: : ん //ふ: : ん =え: : :

S:

G:

K:

Y: うってみいてごらんよ//ちゅう (に)

I: //ええ: : :

S:

G:

K:

Y: で、まあ: : 義経: : がですね、誰ぞ (.) あ: : いるものはおらんかつう: : んで

I:

S:

G:

K:

Y: : : まあにじゅういっさ20さいの那須与一がこれをいぬくというね

I: う: : ん

S:

G:

K:

Y: いぬいあの: : それあたると (.) 源氏はもちろん平家もふなばたたいてかんせ

I:

S:

G:

K:

Y : いhをhあhげh//てh
I : //はあはあはあ
S :
G :
K :

Y : のんびりしてますね
I : まあ//ねえ
S : //そうですねえ
G : んhんhんhんh
K :

Y : // ()
I : //そんな場合じゃないと//hおhもhうhんhでhすhけhどhねh
S :
G : //んhんhんhんh
K :

Y : もうね、やられかけてるよとhいhうhはhなhしhも (hすhるhけhどhねh)
I :
S :
G :
K :

Y :
I :
S : ふ::ん
G :
K :

Y : //そうですね
I : まああの昔の戦争というってのは、そういうかたちで//やっていたわけですよ
S :
G :
K :

Y : う::ん //あ:::ん
I : 戦国時代ぐらいからですよ//あれだけ調略とかい//ろいろ使うように
S : //は:::ん
G :
K :

Y : ね＝

I : 　＝はい

S :

G :

K :

Y : だから (.) あの : : : 天国とぶっえ : : 地獄まあこの当時でいえば、地獄、極楽を

I :

S :

G :

K :

Y : 見たというね、でこれ日本全体、日本人全体がねえそういうものを経験したわけなん

I :

S :

G :

K :

Y : ですね

I : 　ほうほうほう

S :

G :

K :

Y : で、その当時のしゅうきょう (.) かでまあ源信という人がゆふふ思想というのを (.)

I :

S :

G :

K :

Y : あの : : お話するわけですけども、みんながはあ : : 本当だなあこの世に地獄と極楽

I :

S :

G :

K :

Y : があるんだなというのをあのへいけものがえ : : 源平合戦は教えているわけです

I :

S :

G :

K :

Y : それでまあ、だからねえその後、平家がhhあの : : なくなりえ : :

I : //ふ : : ん

S : //ふ : : ん

G :

K :

Y : 滅亡しまして= んだら日本人っつ : : のはあの : : 昔からそういう敗者への(.)

I : =はい

S :

G :

K :

Y : 同情っちゆうのはあるんでしょうね

I : う : // : ん

S : //う : : ん

G : //う : : ん

K :

Y : だからここに、い : : 安徳天皇が死んだ、死んでおらないんだとか、あるいはまた源

I :

S :

G :

K :

Y : 氏ですけども、源義経はですね死んどらないと//んでえ : : 中国に行ってジンギス

I : //あ : :

S :

G :

K :

Y : カンになっちゃったとhねh

I :

S : ふ : // : ん

G : //ん : : ん

K :

Y : hそhうhいhうhせhつh= //たしかにありましたね

I : =ありました//ね え : : :

S :

G :

K :

Y : //でまあこういう説はあの徳島の人で内田やはちという小説家なんですけど

I : ありま//したね

S :

G :

K :

Y : ね //そういうことをい、いってですね、それを信じたんですよ

I : ほお : // : ん

S : //ふ : // : ん

G :

K :

Y : ね

I :

S :

G :

K :

(9時52分00秒～9時54分00秒)

Y : それを信じたいですよね
I : なるほどね、うんうんうん
S :
G :
K :

Y : 全国に:.hあの:平家伝説が:百ヶ所くらいあるんですよ百ヶ所くらいに: // 平家が隠
I :
S : // はあはあ
G :
K :

Y : れたという(場所)がね で:の:::祖谷もはじ祖谷にもありますし // 徳島で
I : // ふ::ん // はい
S : はあ // ふん
G :
K :

Y : はナカフクにもありますし ほれから:::九州の:あの:::なんだ(.)え:::有名なあれ
I : ふん
S :
G :
K :

Y : がありますね、え:::歌が出てく-くる、え:::白川郷ですか= =白川=
I : =あ、え= =白川は、
S :
G :
K :

Y : =うん、え、 // ま うん、ありますね、 // あのう:::
I : 富山(のほう)ですね= // たしか、あ // はあはあ
S :
G :
K :

Y : ま、そういう::ところ::がね百ヶ所ぐらいありましてね//んで、そういう
I : はあ //はい
S :
G :
K :

Y : とこ:ずっと見てみますとやっぱり山ぶか:い所で人情が厚くて //そいで
I : //はあ
S : ふん
G :
K :

Y : 経済的にはやっぱり(0.4)あの平野部に対して:非常に不満をもってる(という)
I :
S :
G :
K :

Y : ところが //あの自分たちの思いを:合わせてこういう敗者に対する理解あの::
I : はあ//あ::
S :
G :
K :

Y : ま同情をしていくわけですね これは日本の:::(人)のあれじゃないかと
I : //ふ::ん
S :
G : //ふ::ん
K :

Y : 思うんですけどねえ //いいところじゃないかと思うんですけども=
I : ふ://:ん =//なるほ
S :
G : //ふ::ん
K :

Y : やっぱり::あの:負ける:人に対しては、どないぞしてやりたいな(という)
I : どねえ:
S :
G :
K :

Y : //よく::今のえ話で言えば選挙なんかもね:あの(人)は危ないぞなんつ
I :
S : //う:///:ん
G : //あ:///::
K :

Y : うと= =つhつhh//hhh //だからあふたあけてみたら:あのそ
I : =ふふふ= //あはhh
S : //ふhふh//ふhh
G :
K :

Y : なかったり://っという //まあ //ふ::ん
I : //はは、じてんばらとかよく//(//)//そういう
S :
G : //ふ::ん
K :

Y : =まあ:そういう::意味で言うと.hhいじめっていうのは日本的じゃ
I : かんじですかね=
S :
G :
K :

Y : ないですね(.) //ん:今です(と) //ね //まそこで::
I : あ::ちよっ//と異質なものです//ね、はあ:://.hh
S :
G :
K :

Y : あの:義経はかなり徳島で:えたいへ-えあの:し-:西日本全体で.hhあの人気があり

I :

S :

G :

K :

Y : ましてね わたし:の母親は明治何年生まれ母親だったってもう今は(.)あの

I : //はい::

S :

G : //ふ::ん

K :

Y : 生きてはおりませんが、.hh母親が子どもの時ですから明-え:大正ぐらいです

I :

S :

G :

K :

Y : かね 田舎芝居(に)は必ず、義経が出てくる あの:ほ-え:::タケホト

I : //はい

S : //はい うん

G :

K :

(9時54分00秒～10時00分00秒)

Y : ほととぎすのあい間の頃に義経が出てきて//ね、義経の格好をして、で、

I : //ええ

S :

G :

K :

Y : すっと通っていくんだそうです= けどね で:あのいうセリフがですね=

I : =ええ =ええ

S :

G :

K :

Y : 「さしたる用はなけれども」つつつて=

I : =別に用事はないけれ//どつてはhhh

S : //通っていくっていう

G :

K :

Y : あの、幕間にすっと通って まあ うhhh義経が出てこないかね:::

I : あ::あ

S :

G :

K :

Y : 観客がね、あの:::納得しないんです//よ

I : //ぶっ//hふhふhふh

S : //へえ:::

G :

K :

Y : そういう人気 ええ ああ あ ど あの:::西日本ではそうですし東北では常陸坊

I :

S :

G :

K :

Y : 海尊と申しまして、//あの : : ええ : : 勸進帳の時に出てくる真っ白な頭の山伏

I : //はい

S :

G :

K :

Y : がでて、あのにつき (人気) があるんですね、東海で//は。 まあこういう

I : //ほお : : :

S : //ふう : : ん

G :

K :

Y : ことで あの : : ま (.) 大変に え : : 敗者 : : 判官びいきと申しますかね =

I : =はい

S :

G :

K :

Y : 敗者に対する同情が日本人の美徳じゃないかと私は思うんですね =

I : =う : : ん

S :

G :

K :

Y :

I : なるほどね : : この辺はK先生 = どうですかね : :

S :

G :

K : =はい いえ (.) あの : : (.)

Y : =え : :

I : =はい

S :

G :

K : 山にはですね = 私は歴史家じゃないからわかんないけどさんか =

Y : あります//ね : :

I :

S :

G :

K : //という そのつまり日本民族 (.) その統一最初からされてたわけじゃ

Y : =結局逃//けた人//ですよ//ね : : 荘園から逃れて山ん中
I :
S :
G :
K : なくて まあ=

Y : 住み込んでしまった//という
I : //う : : ん =う : : ん
S :
G :
K : そういうもう一つの文化の系譜があるから=こう

Y :
I : //う : : ん
S :
G :
K : 平地の農民だけが日本のその古くからの伝統だって思う必要ない//っていう話の

Y : それでその時に
I : =あ : : なるほどね : :
S :
G :
K : 一部だと思って聞いてたんですけどね : : =

Y : ね : : 私は一つおもしろいと思ったのはこの当時の女性が二つのタイプを描いてる
I :
S :
G :
K :

Y : わけですよ= 平家物語なんか (.) 見ますと= 木曾義仲の//
I : =ほ : : : =はい //あ(h)
S :
G :
K :

Y : 奥さんで巴御前というの//がございますよ//ね この人はですね 色も
I : //あの有名な //はい : :
S :
G :
K :

Y : 白くて髪も長くて= 容顔まことに優れて、非常に き あの 美しい人
I : =ふ::ん
S : =ええ
G :
K :

Y : なんですけれど (.) あの 力が強くて= 大変な= 一騎とうせんの
I : =う::ん
S : =ええ
G :
K :

Y : 強者と書いてある= で:::あの:::木曾義仲が最後に:::死ぬ:::
I : =ふ::ん
S :
G :
K :

Y : その:::七人になるまで戦ってねそれでもうどうぞ逃げてくれと= わた
I : =はい
S :
G :
K :

Y : 私が死んだときに女と一緒にあった言うたら後でいろいろ言われるわ恥ずかしいわ
I :
S :
G :
K :

Y : というんで逃げて行くところすけ//ど 最後にはすね (.) あの:::
I : //はい
S :
G :
K :

Y : え:::まあ あの (.) 一緒にあった 最後に戦って え:::まあ 目にものを
I :
S :
G :
K :

Y : みせてやろうつつうんで//おんだのはちろうという人を (.) え : : : もう敵の
I : //はい
S :
G :
K :

Y : 大将をですな= 首突いて (.) 首ねじ切って=
I : =ええ =か : : :
S :
G :
K :

Y : 捨てていったんですよ= これがやっぱり女性のね=
I : =くわ : // : :
S : //ふ : : : =ふ h h h
G :
K :

Y : 一つのタイプとして理想的なタイプとして平家は描いとるんですよ=
I : =あっそう
S : ふ : : ん
G :
K :

Y : で : まあ反対の (.) 女性もおりますあの運命に流されて= であのえ : : :
I : =あ : : :
S :
G :
K :

Y : 清盛にもてあそばれるというあの祇王とか= 仏とかね
I : =う : : ん う : : ん
S :
G :
K :

Y : でえ : まあ清盛っのは残酷な人でありましてねどういう意味で残酷なかっていうと
I :
S :
G :
K :

Y: 結局 h h h あの: 祇王という白拍子を: 愛しておりますで (.) で、始めの頃
I:
S:
G:
K:

Y: よ 良かったんですけどそのうちに仏って (.) ま 変な名前ですがね、あのあの
I:
S:
G:
K:

Y: 白拍子を好きになって で新しいこいびと: のために 前の恋人にですね (.)
I:
S:
G:
K:

Y: あの: : まあ踊りをさせたんですね: (.) お//
I: //お: :
S:
G:
K:

Y: そういうあの残酷な// まあそれがきっかけであの: : :
I: あh h h
S: //いやでしょうね: :
G:
K:

Y: 出家しましてね// その祇王は// で 仏も (.) あのこんな人と一緒に
I: //ええ //ええ
S:
G:
K:

Y: おったらなにされるやわからんつんで あの: 一緒に: あってんだっけ出家して
I:
S:
G:
K:

Y : 後を追うという話もあるわけですけど// こういう : : あの : 女性も
I : //ああ : :
S :
G :
K :

Y : おりますし、 あのさきほどの (.) 巴御前みたいな美しい// (.) 強い
I : う : : ん //hh
S :
G :
K :

Y : //女性も //そうですねひとつの快挙です
I : //hh 美しくて強いのが理想的なひとつの//
S :
G :
K :

Y : よ これあの その :
I : はい じゃその女性像も (.) これから (.) 鎌倉時代
S : ふ : : ん
G :
K :

Y : //はい
I : 入ってどう変わっていくかって のまた次回に// 楽しみです
S :
G :
K :

Y : //あども//
I : どうもありがとうございました// //ありがとうございました
S : //あり//がとうございました
G :
K :

Y :
I : ええ今日は元県立文書館館長大和武生さんにお話を伺いました (.) 阿波の歴史シリ
S :
G :
K :

Y :

I : 一ズでした

S : それでは音楽をお届けしましょう (.) ダイアナ・ロス「If We

G :

K :

Y :

I :

S : Hold On Together」

G :

K :

Y :

I : んhどうもありがとう//ございました

S : //ありがと//うございました

G : //お世話になりました : :

K :

Y : 昼から阿南市で講演// それじゃ

I : //ふう //あっそう//

S : //ふう //忙しいですね

G : //ふう

K :

Y : がんばってくださいよ : :

I : ええ

S : ったんですね はは ありが

G : お世話になりました

K :

Y :

I : どうございました (.) あっお世話になりました (7. 0)

S :

G :

K :

Y :

I :

S : そうなんよこれ新婚旅行に着た服やけん (h) ごっついえらい

G : Sさんだいぶ (.)

K :

Y :
I :
S : もう今日テレビやけんな : (こんなん着る日でなかった)
G : ああ : ていうか変わり
K :

Y :
I :
S : //あっ うーんそうやな : :
G : ますよ : : // 次から :
K :

Y :
I :
S : //あっあんまり : //
G : あっいつでもゆうてください // //でこそっとほくらだけで変わっ
K :

Y :
I :
S : う : : ん ふhhh ああ (7, 0)
G : たらわからないでしょう
K :

Y :
I :
S : ねえこの山本さんて有名な人あのおっちがうのか
G : あのはちろうさんの息子さんです
K :

Y :
I :
S : //あ息子なん
G : よ//
K :

Y :
I :
S :
G : うん
K :
D : () 吉野川原稿ありますか?

Y:

I:

S: お送りした曲はダイアナ・ロス「If We Hold On

G:

K:

D:() 曲紹介

Y:

I:

S: Together」でした

G:

K:

第2章 インタビュー報告

HOW TO INTERVIEW

インタビューに至るまでの下準備

私たちは実際にインタビューするに至るまでに次のような段取りで事を進めていった。

- ①インタビューする相手と、インタビューの日程を相手の都合の付く日に決める
(約2, 3週間前)
- ②その日までに各自インタビュー項目（いかにして私たちの研究に有意義な答えが引き出せるか、あるいはいかにして相手の琴線に触れることができるか）を熟考する
- ③参考資料（『放送ハンドブック=文化をになう民放の業務知識=』、『Audio Visual 時代のサウンドミクシング』等）を読んで、放送局（特にラジオ局）についての知識を、多少なりとも得て、実際のインタビューに備える
- ④インタビュー当日は、約束の時間2時間前に、徳島大学総合科学部の社会調査室に集合し（K先生も同席）、それぞれが持ち寄ったインタビュー項目を議論して有意義なものだけを採用する
- ⑤インタビュー経過を終始カセットレコーダーに録音するため、本番で失敗のないよう試し取りを行う（マイクを向ける方向、操作の仕方などに注意）
- ⑥約束の時間数分前にABC（仮）に到着し、受付で interviewee を呼んでもらう（“いざ出陣の心意気を忘れずに”）

私たちがインタビューをするにあたって、相手の方に失礼にあたることのないようにというのはいうまでもなく、一番気をつけたことは、安易すぎる質問は避けるということであった。このことには非常に苦勞した。また、この時、K先生の意見は大変参考となった。インタビューしていく上で重要なことは、相手の琴線に触れ、相手がこれはぜひとも話したい、話し続けたい、という気持ちになるようもっていくことであって、どんなインタビュー項目にすれば相手がそういうふうになってくれるか、私たちなりに懸命に考えた。以上のことがインタビューに至るまでの下準備である。

インタビューし終えてからの過程

- ①インタビューした直後、再び大学に戻ってきて、各自とったメモをインタビューに行った人数分（4人分）コピーして、それぞれ交換する
- ②テープにきちんと音が入っているかを確認して誤消却防止のツメをおる
- ③テープおこし（録音テープを聞いてそれを全部書き出す）{一人称一人語り方式}
{Q&A方式}
- ④書き出したものを、話のつながりや内容に合わせて編集
- ⑤ワープロ打ち
- ⑥研究会（読み合わせ）
- ⑦修正
- ⑧最終稿にコメント付け

interviewee の話をなるべくそのまま使った方がリアル感がでていいと思い、ほとんど一字一句違わずにテープから書き出すことは本当に時間がかかって大変だった。また、話の流れに合わせて編集するときに、どこをどういうふうにつなげれば話の流れとしてうまくいくかという点に苦勞した。以下のインタビュー記録は何度も何度も修正して、やっとできあがったものである。

*下記のインタビュー記録内で使われる（ ）は、担当者が補った言葉である。

I アナウンサーインタビュー

’ 97 / 6 / 11 ABC (仮) 食堂にて実施

Q 入社されたのは？

A 昭和55年です。

Q 入社試験はどのようなものだったんですか？

A 入社試験は、うーん、どっちが先だったんだっけなあ、あ、筆記試験が先だったと、うーんあの、一般職の人と一緒に受ける筆記試験という、ペーパーテストですね、一般常識の、それが午前中にありまして、で、お昼からアナウンサーだけは音声テストという、ま、テレビカメラの前で決められた原稿を読まされて、ま、それが1次テスト。で、日を改めてあのアナウンサーだけ2次の音声テスト。やっぱりフリートークとか、カメラを前にして、ま、いろんな質疑応答とか、えー適性テストをやらされて、最終の重役面接というパターンでしたね。

Q 何か練習はしましたか？

A うん、まあ、アナウンサーになる人っていうのは、たいがいの場合なんかそういう経験とかある人が多いんですが、まあ自分の場合も大学生の時に、放送研究会でやってたし、あと、あの東京の専門学校に、半年ぐらいですか、行きました。

Q 関東出身なんですか？

A いや広島です。大学が東京。

Q これまでどんな番組をされてきたんですか？

A もうねえ、18年目ですか、今。だからかなりいろんな種類の番組やってるから、一概に、一口に、言えないんですが。

Q ラジオでは？

A ええと一番最初にやったのは、今のお昼のワイド、みたいなのをいきなりやらされたんですが、それは長続きしなくて、あと夜のディスクジョッキー番組、ヤングスタジオっていう番組とか、どきどきステーションとか、若い時代は若い人を対象にした番組っていうのを結構やりまして、それであと土曜フレッシュパトロール、土曜のワイドとか、あと日曜の午後にやってる演歌なつメロ日曜3時間、今はタイトル変わったけど、いきなりやらされて、で、サンデーウエーブとか、去年まで、あ、この春までは、はりきりワイドもやってました。

Q 自分で企画を持ったことは？

A うーんだからこのサンデーウエーブっていうのは、さっきのSアナウンサーあたりと最初企画を考えて、作り始めた番組なんですね。それからどきどきステーションという夜の、ま、生番組だったんですけど、長いときで2時間ちょっとぐらいあったのかな、それ

もあの制作的なことも全部自分たちでやってるような番組だった。

Q それはどういう番組だったんですか？

A まあ電話リクエストなんかもとったり、あと地元のタウン誌のみなさんと協力している企画を考えたりとか、ラジオドラマやったりとか、ま、いろんなバラエティー番組ですね。

Q 取材を自分でやったことは？

A うーん、ま、うちの場合はニュースは報道部が、直接は報道するんですが、なんか大事件があったときなんか、アナウンサーも一緒に行って取材したり、レポートしたり、やることはありますね。この前も、あの、ほら、中国人の密航者が県内にきたときに、行ってましたけどね。

Q ラジオ番組の中での、ラジオ特有のアクシデントはありますか？

A うーん、ラジオ特有のアクシデント、パニックはしょっちゅうなってますからねー、トラブル多いし、そんなのはしょっちゅう、電話が繋がらないとかね、相手がいなくてとかね、それからまあスタジオでしゃべっても音がでないっていうのは、ときどきありますね。生放送でしゃべってるのに音がでないとかね、うーん。あんまり記憶力がいい方じゃないんでね。

Q プロとして気をつけていることは？

A うーん、そうですねー、難しい質問だなー、なんで難しい、だいたいアナウンサーっていうのは、質問するのは得意だけど、受けるのは苦手なんですよねー。どっちかっていうとね。放送の場合ねー。これだけは気をつけよう、まあようするにあのー、聞いている人はもちろんなんですけど、一緒にいる人、を不快にさせるような発言をしないように、自分をいましめてるっていう。で、人によって、アナウンサーによっても違うんですけど、こう、タイプがあるんですよ。自分が目立ってこうガンといく人と、相手の良さを引き出すっていうタイプの人。僕はどっちかっていうと後者なんで、この相手の良さを引き出そうっていうことも、まあある程度考えながらやってるんですけどね。

Q 体調などには気を使っている？

A そうですねー、本当はあの、昔はね、カゼひいたっていったら怒られたらしいんですよ。だけどアナウンサーってせまいスタジオで、空気が汚いところで、ずっとノド使って仕事してるでしょ。だから、普通の人より弱いんですよ、逆に。だから、カゼひいたり、ハナつまったりとかっていう人が多いね。(自分もカゼひいたりすることが)ありますね。人より多いんじゃないかな。

Q アナウンサーは、リスナーの代表でもあると思いますが？

A ある部分ではね、ええ。

Q リスナーとの関わりはあるのですか？

A えーあの一そうですね、最近は直接には呼びかけたりはしないけど、けっこうそのネタの提供とか、そういうことについては、あの、呼びかけてるんですよ。だけど意外とあの一、そういう部分では、ラジオ聞いているみなさんっていうのは、どっちかっていうと受け身の状態というかたちで、ま、ほんとはそれ、心がけなきゃいけないことですよね。

Q 手紙などがくることは？

A うん、それありますよ。やったことに対する反応とか、批判とか、そういうお手紙はいただきます。それ以外にも、もちろん会社もね、番組審議会とかって、そういうあの一一定の人、リスナーを一年間とか、あの契約してですね、モニターをしてもらって、それについて書かれたものとか、1ヶ月に1回ぐらいまわってくるんですよ。ほいで、それを見て、まあ一喜一憂したりね。いろいろしてますけど、はい。ただ、ま、全部の番組にまわってくるっていうのではないですけどね。特定の番組をピックアップして、それを書かれるわけですよ。「あのアナウンサー出さな」とかね、書かれたりとか。「不快だ」とかね。

Q そんなこと書かれるんですか？

A まあ、たまにはあるでしょう。

Q サンデーウエーブのリスナーのターゲットは？

A うーんまあ、ターゲットっていうのは、一番やっぱり（番組を）作る上で、考えなきゃいけないことで、さっき言った「演歌なつメロ日曜3時間」という番組だったら、もういわなくてもターゲットって想像ができるでしょう。でまた、「ヤングスタジオ」という番組だったら、それは聞いただけで、これはターゲットって想像できると思うんですが、サンデーウエーブの場合は、日曜の午前中にある番組ということで、あの一、時間帯だけでしほれば、わりと高齢の方が中心になって聞いているんじゃないのかなって想像は、できるんです。で、ABC（放送局名、仮名）っていうAMのラジオ局の場合は、どちらかっていうと若いみなさんは、もっと音質のいい電波を聞いてたりとか、CD聞いたりしてるんで、最近リスナーの高齢化が進んでると思うんですよ。だけどそれに合わせて放送を全部送り出していると、ますますそれに拍車をかけてしまうということで、あえて、その今まで、そのABC（仮名）のイメージで聞いている人と、若干ズレがあるかもしれないけれど、もうすこしそういう年齢層的にも下へずらしたりとか、あとそのテーマと話の、なんていうんですかね、いわゆるほかの番組とニュアンスを変えてやってみたりということで、ま、異色のやり方っていうかね。

Q サンデーウエーブの中では、メインのアナウンサーですよ？

A まあ、年長ですからね。

Q 自分がメインになって変わったことは？

A うーん、さっきも言ったんですけど、あの、自分はどっちかっていうとメインだといっても、ガーッとでてね、自分がしゃべってね、サンデーウエーブ自分の番組だぞーとい

って、自分の意見を述べたりとかいうタイプじゃないんですよ。これまでサブ的にやってきたこと、で一、そういう経験が活かされるっていうか、まわりの人たちが、いま何をしゃべりたいとか、そういうことをやっぱり常に考えながらやるべきだな、と、まあ、できてるかどうかわからんけど。うーん。

Q トラブルが起きたとき、一番に対処しなくてはならないのでは？

A まあ、ね。

Q 心理的にたよられていると感じますか？

A 番組やってる中で、特にそれはないですね。あの、アナウンサーってみんな自分が一番うまいと思ってスタジオの中では、しゃべってるんですよ。あの、後輩だったらね、たとえば、Iという先輩といっしょに仕事するときも、アイツがいなかったら自分がメインできるのになって思ってやってるような人たちだと思うんですね。どっちかっていうと。そんなにたよってるっていうのは困るし。

Q 18年間続いてきた活力となったもの、理由は？

A 活力ねえ、まあ、あの一。なんて答えましょう。

Q いろいろな人と会える楽しさなんかは？

A それはそうですね。一番の魅力ですよ、この仕事やってる中でのね。ただあの一、やめたいなっていうことでは、アナウンサーって誰でもできることじゃないでしょう。まあ、その、適性っていうのがあるんですよ。その、能力っていう問題だけじゃなくって、たとえば口の形だとか、極端に言えば歯並びだとか、あの一発音発声のことからね、はじまってくるわけだから、そういうのでいうと、もう自分の適性とか、ずっと悩んだ時期もあったし、誰でもそうだと思うんだけど、自分はアナウンサーに向いてないな、他の仕事したいな、(と)思うときに絶対もう何度もあると思うんですよ。その繰り返しだと思ってるんですよ。だけどまあ、なんで続けてるかっていうと、それは、一概には言えないけど、まあ今になってしまえば、生活をしていくための、ひとつの手段ですからね。

Q お子さんは、仕事に対して？

A うん、まあ、関心は持ってると思うけど、あんまりね、うちの家族は観たり聞いたりしてないんです。うん。それはほか(のアナウンサー)とだいぶ違うな。うーん。他の人たちってけっこうね、家にいる人がいいモニターだったりすると思うんだけど、うちはあえて家に帰ると仕事の話であんまりしないっていうか、昔はそうじゃなかったんだけど、最近僕もね、家と仕事っていうのをあんまり一緒にしたくない。区別して。家にいるときは、仕事のことあんまりしたくない。それではいけないんですけどね。

Q 自分の出演した放送を後で聞きますか？

A えーっと、毎回は聞いてないですね。サンデーウエーブは、あの、カセットに同録(同時録音)を録ってるんですが、反省会の時に、前はよく聞いてましたけど、最近はときど

きっていうか。

Q 昔と比べて、放送の中での自分は、変わってきたと思いますか？

A もうそれは昔の方がたくさんテープおいてあるから、やっぱりほら、20代30代、今40代に入ったけど、肉体的にも変わるじゃないですか。声も当然変わるし、考え方も変化していくし。あの一こういうマスコミに働いている人間として、昔はそのジャーナリストっていうか、としての使命感が、若かったから、強かったと思うんですが、ま、最近報道をめぐるトラブルとかいっぱいあるじゃないですか。そういうことも含めて、こう中に長いこと身を置いていると、こういう業界ってというのはこれでいいのかなって思うことも、多々あるし、かまえていうのが若いときに比べると、だいぶ、ね、できてしまいますよね。

Q これからやってみたい仕事は？

A うーん、だからねー、それが一番ねー、ローカル局でいると難しいことだよねー。あの一こうどんどん若い人が増えてくるじゃないですか。仕事って、そんなに、あの一、極端にね、量がふえるわけでもないし、段階を追うように、あの一、上がっていくようにね、ま、なんていうか、グレードの違う仕事があるというわけじゃないでしょ。自分がこれをしたと思ってても、その、できるわけじゃなくて、こういう組織の中にいると。だからあの一、若いときは、そういう志向が強かった。自分はあれやりたいこれやりたい、と。今は、逆に、与えられた仕事をいかに自分なりにこなしていくか。こなすっていうとすごくあのサラリーマン的な感覚で聞こえてしまうかもしれないけど、でも、言われたことをちゃんとやるっていうのがいかに難しいか、ということですね。

Q サンデーウェーブのこれからの展開は？

A そうですねー、えー、今、特に、うーん、教えてほしいですねー。

Q 自分のコーナーを持つことは？

A いや、だから、僕は逆にその全体っていうかたちで、メインのあのウェーブレポートっていうのがメインですけど、あれが月4回あるとしたら、だいたい3回くらいは自分が中心になってやるっていうパターンで、いまやってるんですけどねー。

Q アナウンサーとして仕事をするときに、情動的なジレンマはないですか？

A うーん、そうですねー、というか、アナウンサーの性っていうかねー、どうしてもそういう一般的な落としどころに持っていこう持っていこうとしちゃうようなところ、あるんですよねー。だからサンデーウェーブでいうと、コメンテーターの先生とか、外部の人にスパッと行ってもらうと。でも自分が言っちゃうと、それはリスナーの反感をかうことになるんですね、どっちかっていうと。それをまあコメンテーターという立場の人に言っていただくことによって、リスナーの方にも共感が得やすいというか。だから割とコメンテーターの先生方も、今だいたい4人の方をお願いしてるんですけど、時代とともにメンバーも変わってますけど、このバランスというか、実を言うとそういうこともやっぱりあ

る程度考えながら、多様な意見をお持ちの方っていうか、かたよらないっていうか、そういうことも配慮しながら、やってるといえばやってる。だからその中で、合うとか合わないとかいうことに関しては、ジレンマは、あるといえば、ある。

Q 18年アナウンサーをやってくると、変わりますか？

A 要領はね、うまくなっちゃうでしょ、だから同じ仕事するにしても、例えば、入って（入社して）1年目の人が丸1日かかることを、自分だったらまあ、ちゃちゃっと2時間ぐらいでやっちゃうとかね。そういうことはあると思うんです。ただそれが、いいかわるいかっていうと、こういう番組制作っていうのは、あの一、ものを生産してる、単にそういう活動じゃないから、やっぱりある部分で芸術的な要素とか入ってきますから、それがいいかわるいかっていうと、また別問題と思うんですね。ただ、要領だけは、確実にうまくなったかなって気はしますけどね。

I アナウンサーインタビューについての感想

私たちインタビュー班がサンデーウエーブをはじめて見学させていただいたときに、まず感じたのは、Iアナウンサーが番組の中で中心となっていて、番組を作り上げていく上で非常に重要な役割を果たしているということであった。

他のアナウンサーやディレクターもインタビューのなかで、Iアナウンサーが番組の中で最も重要である時間の管理をしていることを認めておられた。しかしIアナウンサー自身は、番組中のトラブルに対しては自分が最初に対処しなければならないということについては「まあ、ね」と肯定されていたが、心理的に頼られていると感じますか、という質問には、「番組やってる中で、特にそれはないですね」と否定し、「そんなに頼ってるっていうのは困るし」とプロらしい厳しい意見をおっしゃっていた。

Iアナウンサーは、自分自身のことを「相手の良さを引きだすっていうタイプ」と分析され、メインのアナウンサーではあるが、「まわりの人たちが、今何をしゃべりたいとか、そういうことを常に考えながらやるべきだな」と考えて、番組を進めているそうである。

アナウンサーとして仕事をしていく上でのジレンマについては、「アナウンサーの性っていうかねー、どうしてもそういう一般的な落としどころに持っていこう」とするところがあると笑って、「自分が言っちゃうと、それはリスナーの反感をかうことになる」ことはコメンテーターの先生方に言ってもらうことでバランスをとっていると言われていた。

4人のコメンテーターのタイプがそれぞれ違うので、持っている意見も当然違って、そのあたりのバランスについても配慮しながら番組を進めているそうである。このあたりの、メインのアナウンサーとしての番組に対する細かい配慮について、本人から貴重な話を聞けたと思う。また、以前はコメンテーターとゲストが意見を戦わせるのを見ているのが非常に面白かった、という裏話も聞かせて下さった。

18年間のアナウンサー生活については、「要領だけは確実にうまくなったって気はしますけどね」と笑っておられたが、これからも番組の中心として活躍されることと思う。ありがとうございました。

入社・入社試験

入社したのは平成元年。ちょうど天皇陛下が崩御された年なので、昭和64年が平成元年になった年の4月です。入社試験は、まず「私と放送」というタイトルで小論文を400字詰め原稿用紙で3枚程度書いて、それを履歴書と一緒にまずABC(仮)に送って、その中から書類審査があって、書類審査で通った人だけハガキが来て、そのハガキが来たのでABC(仮)に受験に来て、でその受験内容はまず午前中に筆記試験があって、それはもう時事問題、英語、数学、国語も何かこう総合的な試験で、その後お昼からアナウンサーとしての試験があって音声テストが一次、二次とあるんですけど、まず第一次音声テストがあってそれは同時にカメラテストも一緒に、カメラで映しながら音声テストをするんですけど、審査員がこういて、5、6人いて、最初はあの簡単な天気予報とかそういったものを読んで、その試験が終わった後しばらくして、その合格者だけ発表されて、で受かったのもそのまま残って第二次音声テストっていうのを受けるんですけど、で第二次のテストは音声テストが詩の朗読とそれから3分間で自分の意見を述べよっていうフリートークがあって、テーマが阿波踊りか、瀬戸大橋か、それかイランイラク戦争かこの3つのうちのどれかを選んで、自分の意見を3分以内にまとめよっていう、それはあの一まあ控室で待ってて、あの一面接会場に行く前にまあ椅子にちょっと座られるんですけど、一人ずつ、その時にはじめてその問題用紙を渡されて、そこで初めて、あっこんな問題なのかっていうことを、ま3分か5分ぐらい見て、それからすぐ会場に入って、それも同時にカメラテストもしながら音声テストで、でその日の夜か次の日ぐらいに、あの一連絡のいった人だけ合格ですっていうことでその時に、電話が来たんですね。でその後今度は役員面接があるんですけど、まだあって、役員面接は1週間後ぐらいだったかなあ、だから女性はその時3人残ってたんですけど、役員面接で2人になったんですよ。でも、もう一人の女の子も結局北陸放送のアナウンサーになったので、よかったんですけど、うん。それが最終で。入社試験の倍率ですか。その辺はぜんぜんわかんないですよ。書類審査でどのくらい通ったかはわかるんですけど。私の友達とかでもね、その日たまたま九州朝日放送の試験と重なって、その時に人生の選択でどっち行くかで九州朝日放送受けて、落ちてしまった子もいるんですね。そっち受けずにもしこっち受けてたら受かったかもしれないし、それはもう運というか。でも重なったから分散したし、おかげでこっちは少ない人数ですんだみたいなのがあるし。だから春休みとかね、神戸の親戚の家に居候してそこから大阪通ったりして、でやっぱりずっと四国にしか住んでなかったの、でやっぱり本州ってどんなところだろうとかがあって、それはやっぱり暮らさないとわからないと思ったからやっぱり暮らしたいなあと思って。なんかセンスが身につかないとか言われて、田舎臭いとか。それは困ったと思って。いろいろ大阪の友達もいっぱいできたし、今でも友達は仲が良くて、札幌テレビにもいるし。テレビみるとズームイン朝とか、いっぱい中継友達が出てくると「ああ彼女も頑張ってるから私も頑張ろう。」と思うことがよくあります。

大学時代・ダブルスクール時代

私は、アナウンスの専門学校にダブルスクールで行ってたので、大学はK大学に行って、それで地方の国立大学だとアナウンサーになれないと思ってたので、高校出るときはもうあの東京の有名な大学の英文学科に行かなければと、頭がコチコチになってたんですけど、でもやっぱり親が、外には出さないということと経済的理由とかいろいろあって、結局出られないということになって、でも自分の好きな学部もないんですよ、地方のK大だと。でも絵を描くの好きだったので、だからもう全然関係ない教育学部の美術研究室に入って、でも自分で何とかしなければというので地元のラジオ局にアルバイトに行っちゃったりとかしてたんですけど、でも地方だと情報がないんで、もうこの受験というのは、もう情報がすごいんですね、全国300社くらいあるのかなあ、その中でどこが募集をしてるのかっていうのを知るだけでもすごい大変なんで、だから大学3年の秋に大阪の専門学校にダブルスクールで行って、大学に昼間行って、昼2時とか3時ごろから月曜と木曜日だけ大阪に行って、夜はその日に帰って来てたんですけどまだ瀬戸大橋が出来てないころで連絡船に乗ってめちゃえらかった。お金もかかるから、だから最初は関西汽船とかで4時間かけて行ってたんですけど体力がもたないとかっていうことでバイトしながら、お金ためながら、親にも世話になって、それで情報すごい集めて、でもその時にね、やっぱりあの、一人でかってに喋ってますけど、有名な大学の子の、すごい信じられないかもしれないけど、有名な大学の子の「私は何とか大学の何とかと申します。この度貴社に入社したく〜。」っていう、こう問い合わせの手紙があるんですけど、それを有名な大学の子の下書きしたのを写すんです。で何枚もそれを作って全国に発送して、で返事が来たのを一斉に貼り出して、それを見て自分が受験するという。もう全国北海道から九州までみんなで受験ツアーみたいな。多い子だと40社くらい受けて、私もだから教育実習が5月なので、教育実習行ってたら日テレとかTBSとかが受けられないので、教育実習は止めて、たまたまK大は教育実習行かなくても教育学部が卒業できたので、もう単位はギリギリで、で受けて、もし受からない場合は、卒業制作だったので美術は、卒業制作を教授に、もし受からない場合は、提出したけど、提出してないことにして、浪人させてもらうって約束で、だけどたまたま受かったんで、ま、今があるみたいな。もし受かってなかったら浪人して大阪に行こうと思ってたんで。うん、ほんとに大変だった。

今まで受け持った番組

これまでいろんな番組を担当してますけど、そりゃまあ何というかサラリーマンなのでいろいろしなくてはいけないので、自分がやりたかった仕事とやりたくはなかったけれど組織の一員としてこなさなければいけない仕事みたいなのがあって、まあでもいろいろあって、ラジオとテレビと両方あるんですが自社製作率がラジオの方が断然多いので、どうしてもラジオが多いんです。ラジオはまず新入社員の時は輪番勤務といって朝始まって夜終わるまで、番組と番組の間のつながりのニュースとか交通情報とか天気予報とかそういったのをずっと覚えていくというもので、覚えながらまあその情報を番組と番組の間に入れていくという感じですよ。だからまだ番組は持てない時代はそういうのをやって、あとはテレビのレポートの取材とかニュース番組の中のそういうのをやって、本当に一年目はもうすごいしんどかつ

た。というか仕事やしんどいっていうよりもやっぱり人間関係とか自分のやりたい仕事かなかなかできないとかで、自分に実力がないのにこういうのがやりたいと思って先走りするとすごくやっぱり悪い意味で目立ってしまって、まだ何にもできないくせにみたいになってしまって、結局はおとなしくしているのが一番いいんだみたいな。なんかちょっと夢破れてしまったみたいなのところがあったんですけど、今はいいんですけどね。2年目に番組を持ったときに“今週の一冊”というコーナーをやって、私はそのコーナーをぜひ引き継いでやって更に発展させようということで、県内のいろんな人にその人の愛読書をきいてまわる仕事をしたんですね、それはワイドの中のたった6分だったんですけど人間関係をやりくりしながら、まあ自分がやれるものを確保しておきたいということで、それはすごい楽しい仕事で、人に会って本も一週間に一冊必ず読んでそれで話を聞くというものでした。ところがその番組が終わってしまったんですよね、半年で。なんか徳島の方は本読まないとか言われて私はショックで、「なんで」とか思って、もうすごく沈んでその時にその番組だけじゃないけれどやっぱりサラリーマンの中にも一個ぐらいは自分がこれと思うものを持ってないとなんだかこうちょっと寂しいというか。自分は何のためにみたいなのがあるから。まあでもそんな中でも輪番の中でお昼の時間帯に“いすゞミュージックアワー”っていうのがあって、自分が音楽かけながら一人でしゃべる番組があるんですけど、その番組に随分支えられたというか、何言ってもいいから自分が感じたこととか実感持って思えることとかをしゃべろうと思って。だから何かこう新聞とかに書いてあるものじゃなくて自分が実際に見に行ってそれで自分が感じたものを基本にしゃべるということだったんですけど、それに随分支えられて、でその番組がなくなったときも、うじうじしていたんだけどもなんかたまたまIさんと飲みに行行ってそれでこんな番組がやりたいみたいな話をして、それでたまたま“サンデーウェーブ”ができたんですよ。だから“サンデーウェーブ”はすごく大事な番組で、Iさんもたぶん思い入れが強いし私も思い入れが強くて、私が今“A子のワンダフルピープル”というのをやらしてもらってるけどあの時間帯は普通はワイドの中でメインのアナウンサーがずっとしゃべりますよね、でも私に20分から25分の時間をくれて私の好きなようにみたいな感じでしてもらえるのは、最初のスタートがそういう関係で始まったからです。そのコーナーでは本はできないということでそれじゃいろんな人に会ってインタビューをするコーナーがしたいということを書いた企画を書いて、それで通ったという感じです。まあ他は土曜の夜の“とんでもナイト”とかは、もともとあった番組を、私がまあ、若手に代わっていきますよねだんだん番組が。そんな中で代わった番組で、他の番組はそういうまあ自分が企画して自分がとかいうんではなくて、ルーティンというか流れの中で先輩から受け継いできた仕事で、例えば宝くじのテレビの仕事とか、あとスポンサーのあるカラオケの仕事とか経済情報とか。

ワンダフルピープル

ただ、一人でやっていると独りよがりになってしまったりとか、なんかあの全然みんなが知ってることなのに自分だけ知らなくて、自分だけなんかいい気になっているとか、そういうこう危ない穴に落ちることがあるので、必ず番組が終わった後は自分で聴くようにして、でまあ反省してあと聴いてもらってる人もいて、あの先生みたいな人がいてその人に聴いてもらって批評してもらってそれでやっていると。人を選ぶのも基本的には自分が興味のある

る人ということで、よく今視聴者が何を望んでいるとか、そういうことを基本に人を選んだ方がいいとアドバイスしてくれる人もいるけど、でも私は基本的に自分が会いたいとか自分がおもしろいと思う人がおもしろいと思うので、そういう人を基本に選んでます。それとあといろんな人が紹介してくれるので、紹介して下さった方は必ずお会いしてみようみたいな。そうすると必ずまた紹介して下さるので。(先週のコーナーに出てもらった) S.Jさんの場合は、映画センターがまああの地方都市を配給している映画なんですけど、映画センターの人とは、私が入社した頃映画が好きだったので見られない映画を見る会に入ったんですけど、その時に知り合った人でずっとまあつかず離れず、長いことみたいな感じで。でその人が紹介してくれてインタビューすることになったんですけどそういうふうにいるいろいろ情報を出していると情報が入ってきやすいというか、そういうのもあるし、本当に今まで250人ぐらいの人にお会いし、いや150人だったかな、にお会いしたんですけど、やっぱりそのネットワークでいろいろこう、すごく仲良くなって今も一緒に絵を描いている人と一緒に飲んでる人とかもいるので、その人たちとのつながりの中で新しい人を紹介してもらえたりとかもするので。あと有名な人が徳島に来たときには本を必ず読んで、でその人のことを調べるのはこれは先生が言ってたんですけど、丹念に調べるんだけど、なんて言うかその人のことを知りすぎないというか先入観を持たないというか。例えば人に出てもらう時にはその人に少なくとも4日ぐらい前に会って話を聞いて、その時に全部聞かずにまあこれは本番で聞こうみたいなのをとっついて、それからあの、会った後しばらく普通に忘れて生活しているうちに沈殿してくるものと、上に上がってくるものがある。でその中からインタビューする内容を決めていったりとかします。先週のS.Jさんの場合は、日本の映画のシステムについてとかの話になったのでいろいろまたその映画センターの人に教えてもらいながら、文化庁の人に教えてもらいながら文化庁の資料を取り寄せたりしました。それで日本映画のシステムといっても人によっていろんな意見があるので、S.Jさんの意見が絶対ではないので、そのへんは難しいですね。だけどやっぱり主体性もあるし、だから客観的にと公平にとかっていうのもすごく大事と思うんですけど。私も生きてるので、やっぱり自分の考えを言うのが卑怯じゃないだろうなと思うし、でも言えないことってあるから、言うとな身の危険があるとか、そんなのはちょっと私は言えませんけど。小心者のサラリーマンなのでそんなに大それたこともできませんけど。それに実力がないと相手にされないというのがよくわかっているんで、だから実力をつけることも大事ですよ、本当に自分が意見を言おうと思えば。人のことを好きになるのがわりと得意なので、もともと人にたいして懐疑心とかあまりないほうだったのでそれは良かったなあと思います。

リスナー・マーケティング・視聴率

よく放送で言われるのは中学生でもわかるようにみたいに言われるんですけど、でも例えば「カディンスキー」とかって言っても、わかんない場合はわかんないですよ。でもそれがすごく言いたくて、それでないと言葉がないみたいな時は使ったりしてるので、うーん、だからあまりマーケティングしてないんです。“ワンダフルピープル”はあくまでも自分が主体となるべくわかりやすく伝わるように心掛けているという感じです。それに週によって登場する人が違うので、特にこういう人に聞いてもらいたいなあとかっていうのはあるけれど、で

も若い人を対象にとも思っていないし、お年寄りを対象にとも思っていないし、どの年齢にも共通できるなにかがあればいいなあと思っています。それは“サンデーウェーブ”についても言えることだと思います。難しいんですけどね。ほんとは放送とかでは視聴率がすごいんですよ。Sテレビとか大きな局とかいったら、廊下は回りまわってエレベーターの中まで視聴率はあってるんで、そういう競争があるところではやっぱりいかに聞いてもらうかということで、どんな層が聞いているかということで、その層をターゲットにパーツと絞り込んでいくみたいなのがあるかもしれませんが、うちは幸い一局しかないのもそういうのがあんまりないので。だからその辺は考えないのが幸せなのか、良くないのか分からない。視聴率が壁に張ってあるのいいとは決して思わないし。でもNHKのように贅沢に予算をつかえる訳ではないということですね。

ラジオ番組の中でのパニック

失敗とかはよくあるんですけど、笑うような失敗とか。例えば、なんか音楽の回転数間違えるとか。33回転のを45回転でやって、なんかアリアが歌ってるみたいになったりとか、ニュースの後は必ず自分の名前を言わなきゃと思って残り一秒なのに「Sです。」とか言って、何だったかさっぱり分からなかったとかいうのもあるし。それから、ON AIRをとばしてしまうとか、すっかり忘れてごはん食べてたとか。そういう時はもうすごい大変で必ず部長のところに行って怒られるとか、何回も続くと譴責処分になったりとかするし。困ったことはもっと何て言うかメンタルな面で困ります。例えば、予算とのせめぎ合いとかで、ピアニストの人に演奏してもらおうと思って放送の時間でいうと3分の演奏に調律とかしたら、今1万かかるとして。そしたらプロでしょ相手は。払いたい、お金を。だけど3分で1万円じゃちょっと考えるとか。でもそれは本当はディレクターが考えるんですけど、ラジオの場合はアナウンサーもちょっと製作と一緒にかかるところがあるので。前にそれでいろいろ、ケンカができる程ケンカができたらいいんですけど、泣き寝入りとか。ケンカができるようになればいいですよ。

プロのアナウンサーとしての心掛け

放送禁止用語を使わないということです。これにもいろいろ論議はあるんですけど、文学上の表現で。だけど、びつことか差別用語ということになっているので、まあそれを言わないということ、やはりアナウンサーなので何しゃべっているか良く分からない、というようなことにならないように割舌（かつぜつ）とかはつきりしゃべるとか、そういうことは基本ですよ。あと人がいらっしゃる時にはその方になるべくしゃべってもらうとか。でもこれも考え方がいろいろあるので、自分の考えを主張して相手を怒らせてしゃべらせるとかいう方法もあるみたいですし、それは性格によって、アナウンサーのキャラクターとかによっても違うと思うので。やっぱりアナウンサーはコマーシャルもお金いただいて読むので、先輩からはよく、この1枚の原稿が何円なんだからということでお客さんが来るように読まなければ、と言われていました。やっぱりアナウンサーの基本はしゃべりですよ。だから、しゃべりが下手なのに、製作面でいろいろ言うのが辛いとか。でも時代はそんな時代で

はないと思うんですけど。ポーダレスで、少々しゃべりがあれでも内容が何かあれば、とも思うし。体調面で気を付けていることは、アナウンサーになって何かすごく喉が痛くなるようになったので、前は風邪をひいても、喉が痛くなるというよりは鼻風邪が多かったのに、今は喉がすごく痛いから喉が痛いなと思ったら、必ず早い段階で風邪をひかないようにするとか、熱が出て一晩でひくようにするとか。アナウンサーは風邪ひいたら恥なんですって。だから“おはよう徳島”やってたTさんとかは、ここからそこに行くのでもコートを必ず着るとか、本当に絶対に風邪をひかないようにすること。熱が出て笑顔でやってますからね、すごいと思う。親が死んでも、みたいな。親が死んでも来ましたからね。まあ私たちみたいにまだ親が若かったらだめですけどね。番組は絶対休まない、ということですね。私はつわりで休んだけど。2回“サンデーウェーブ”休んで、つくづく女の人は大変だと思ったなあ。それとやっぱり体力が落ちると気力も落ちて、それでも頑張ってる都蝶々とか、石丸ひろしとかやっぱり違うなと思いますね。

テープチェックについて

今でもテレビのニュースは全部撮ってて、あとラジオとかはVTRで残ってるので時々聞いて反省したりとかしてます。

反省会について

昼からいつも“サンデーウェーブ”は（反省会を）やってるんですけど、でもなかなか難しいですね。私も性格的にあんまり怒らない性格なんで、ケンカして怒鳴りあうほどやったことはない。あの全然話がとびますけど「カミュクロードル」っていう映画があって、その映画の中でクロードルっていういつも怒ってるんですよ。あのロダンの愛人なんですけど、自分もすごい彫刻家で最後発狂してしまうんだけど、お母さんと仲が悪くていつも怒ってる。怒りん坊とかかって言われてお父さんが、彼女をかばって彼女は怒りん坊ではなくって一途だから怒るんだ、とかいうのがあって、それを東京で午前中見て「ああ私って一途でないんや」とか思って、昼からさまよい歩いたという思い出もあるくらい、怒れないんですよ。だから、怒れる人ってすごいと思いますね。その場でパーッと怒れる人ってね。でも、怒れる人に聞いたらそういうのはえらいから、やっぱり怒らない方がいいとか言うけど、たまってしまう。私。それで爆発するという典型的日本人みたい。だから本当に番組の反省会も、スパッと行ってみんながスパッスパッというような性格であとがない、とかいうみんなそんな人だったらいいけど、そんなこともないからやっぱり傷付いたりいろいろあるんです。それでこの人にはこういう風に言おうみたいな、そんなのを見極めて言う。本当の批評家っていうか、難しいと思いますね。

ストレスについて

買い物とか洋服買いに行ったりとか、あと、寝ると忘れられる性格で良かったなあと思うんです。尾を引かない、あんまり。でもずっとたまってる、誰かにしゃべるとやっぱり楽にな

るので。会社の中だと利害関係があるので、しゃべれないですよ、何でも。だから社外に友達をたくさん。まあ私みたいにインタビューの仕事をしていると、友達がたくさん出来たんで、社外に話せる友達がたくさんいるので、電話して話したりとかしてストレス解消してる。

アナウンサーをやっている良かったと思うこと

それはもうABC（仮）という名刺一枚で、ほんとに会えないような人に会えるという。これまでも狂言師の人間国宝のS.Sさんとか、S.Hさんとか、Y.Kさんとか、やっぱり私個人の名前だと会ってもらえないけどABC（仮）ってついてるとそれでもうブランドになって、安心して会ってもらえる。それでそんな有名な人から県内のいろんな人に会って、お話しさせてもらえて、その話をしたり、自分があの本を読んで良かったと思ったり映画をみて良かったと思ったりしたことを、自分の言葉で発言する場所があるということがいいですね。それを思ってもどこにも言うことが出来なかったら次第に勉強もしなくなるだろうし、なんか精がないっていうか。どこかで発言する場所があるから言葉をいろいろ選んだりとか、何でも勉強になるなと思って。好奇心とかも触発されたりとか、どこかに行こうとか思うので。

これからどんな番組を持ちたいか

私はもうすぐ育休っていうか、産休に入るんですけどまた子供を産んだらいろいろ考え方とか、妊娠しただけでもすごく、例えば女子保護規定撤廃の問題とか前とは全然違うように思ってきたし、いろんな経験を子供を産む事によって何か変わるような気がする。どういふふうになるかは分からないけれど。このインタビューの仕事も続けてはいきたいけれど、でも今までつくってきたネットワークとかいろんな専門分野の人達がいるので何か別の事が出来たらいいなとは思っているけど、まだ全然その具体的なものは何もない。このままインタビューでずーっといくのも何かこう一つの道を極めるみたいなんだけど、でも一週間ずつ一人の人間が変わっていくので自分がああ良かったと思っても、また次の週に違う人に会わないといけない。それならだんだん軽薄になってくるような気もして。何か例えば今週は火曜日に取材に行ったんですけど、もう日曜日には文楽人形づかいのY.Mさんにインタビューするんでその準備もしないといけないし。だから今週会った人に感動ばかりしてたら、でもつながるところもあるんだけど、何か一週間がとんでいくみたいなどころもあるんで、自分の中で消化不良のまんまいつてるような気もするので。1年間会社を休めるので、その間に何か自分で今まで会った人とかを整理したりとか、ちょっと文章でまとめてみたりとかできたらいいなと思ってるけど、赤ちゃんができればこんなに（忙しくなって）なってできないかもしれないけど。

先生のような人とは？

大学時代に私がバイトにいった時にディレクターだった人で、もう今はフリーで大学でジャーナリズム論教えてたりとか、メディア論教えてたりとか、あと自分でもしゃべったりする人で、わりと文学青年だった人だから、この人にはすごく人間て何なのかというのを教

えてもらったという。だから例えば、今回の野村証券の問題でも本当に悪いことしてますねーみたいにするのってどうしても楽で、私もそういうのを、まあ私は地方だしそんなのちょっと言わないけど、でもキー局とかだったら言うじゃないですか。アナウンサーって会社の中にいて何か悪いことしてるのは本当に良くないですねーとかって。けどもし総会屋っていうのが暴力団であるならば、その人にお金を渡さなければ自分の身が危険だったら、人間誰でも渡すんじゃないですかとか思って。だからそういうものをすごく教えてもらったというか。そういうのを抜きにして、表面だけなようなマスコミの今までのそういうのにはなるなど。でもこれは行き着くところに行き着くと暴力団と天皇制でしたっけ、その人は別に共産党じゃないんですけど。でも責任のとり方とかいろいろやむやにしてきたこととかそういうことに原理というか何か基本的なこと、人間の基本的なことみたいなのを考えるのってすごくしんどくって面倒臭くって。そんなにしてたら毎日のニュースについていけない。でもマスコミは毎日ニュースですから「新しい」ですよ。だから一時このニュースが大事だと思って入り込んでも、こればっかりしてたらサラリーマンなのに自分に色もついてしまうし。あと社会は全部つながってるんでしょけど、表面上はいろいろな事件があるので、これを追いかけると何だかもう毎日グルグルとんでいってるという感じで。だから本当に人間とは何なのかみたいなのを常に忘れないようにということを、その人から常に教えてもらってるという感じですね。そういうのってなかなか教えてもらえない。教えてもらえないというか、口で言ってるもんじゃないというか。だから本当にその人との付き合いはしんどいし、結構辛いというか、ズバーッと言われるので、もう明日から生きていけないぐらい、欠点もいろいろ言ってもらえるので。それとその人の欠点もさらけ出されるというか、もう若いときは浴びて浴びて消化不良でもうあーっていう感じだったけど、今はなんか年齢もすごく離れているので、その年の人達の思っている事とかも私と同年齢の人よりは少しは分かるような気もするので、まあ良かったかなあと。あと、高校生の友達とかもいるので若い子の考え方も、いろんな人と付き合わないといけないなと思いますけど。でもその人は本当に人間とは、みたいなところを教えてもらった、本当に私の先生だと思ってます。

仕事と結婚

高校の時に、まあ小学校1年のときからアナウンサーになりたかったけど、雲の上と思っていたから、でも高校のときに自分の人生とか進路って一番考えるから、その時にやっぱり人間って1日の間で寝てる以外はだいたい仕事をしてるのがいいと思って。それでも絶対仕事しないのはちょっと考えられないんですけど。だから子供産んでも仕事したい。K県と徳島で遠距離恋愛して、それで私の場合は徳島でずっと住んでる人と結婚するのが一番いいでしょう。もう結婚できないなと思ったんやけど。物理的にもう別れないかんとかってほなけど彼の方が、別に結婚生活がどんな形であろうと、結婚すれば何とかなるんちゃうとかいう軽い一言で、ほな結婚しようかってことになって、ていうか1年半位はずっと別居してた。で、たまたま、ほんとにたまたま徳島に去年の暮れ転勤になったんで、良かったなと思うけど。でも2.3年たったらまたどこ行くかわかんないんで、どうしようかって思ってるっていうか。子供にお父さんはやっぱりいつもおる方がええかなあとかね。本当に仕事に集中できるのは独身のときだけやなあ、女の方は。何かいろんな、子供の守りに入るんかなあ。若いとき

にどんどんしといた方がいいよ。

Sアナウンサーインタビューについての感想

Sアナウンサーは、サンデーウエーブが放送を開始した当初から、サンデーウエーブに出演されていたアナウンサーである。アナウンサーになりたいとずっと思っていて、大学3年の時に大阪の専門学校にWスクールをして、「めちゃえらかった」けれど、「もし受からない場合は（中略）浪人させてもらうって約束」をして、アナウンサーになったとおっしゃっていた。

しかしアナウンサーになっても、1年目は「サラリーマンなのでいろいろしなくてはいけない」ことが多くて、「ちょっと夢やぶれてしまった。」その後「サラリーマンの中にも一個ぐらいは自分がこれと思うものを持ってないとなんだかこうちょっと寂しい」と思っていたときに、「たまたまIさんと飲みに行って、それでこんな番組がやりたいみたいな話をして、それでたまたまサンデーウエーブができた」んだそうである。「だからサンデーウエーブはすごく大事な番組で、Iさんもたぶん思い入れが強いし私も思い入れが強い」とおっしゃっていた。

また、「A子のワンダフルピープル」については、「普通はメインのアナウンサーがずっとしゃべる」時間だけれど、「私の好きなようにみたいな感じでしてもらえるのは、最初のスタートがそういう関係ではじまったからです」と言われていたが、それだけではなく、メインのアナウンサーであるIアナウンサーが「相手の良さを引き出す」というタイプであることも関係していると思った。そして、「独りよがりになったり」しないように番組が終わった後は自分の放送を必ず聞いたり、「先生」と呼んでいる人に聞いてもらって批評してもらったりしているそうである。自分の番組に対するプロとしての責任感とプライドを感じた。

アナウンサーの立場については、「客観的にとか公平にとかっていうのもすごく大事と思うんですけども私も生きているのでやっぱり自分の考えを言うのが卑怯じゃないだろうって思うし、でも言えないことってあるから」と難しい部分があることにふれておられた。

インタビューのあと、しばらくして産休に入られたSアナウンサーだが、「1年間会社を休めるので、その間に何か自分で今まであった人とかを整理したりとか、ちょっと文章でまとめてみたりとかできたらいいなと思って」いらっしゃった。母になられて大変だろうと思うが、アナウンサーという仕事に対して非常に真摯な姿勢で取り組んでおられたSアナウンサーなら、復帰された後もいろいろな人と会って、がんばっていかれると思う。ありがとうございました。

Gアナウンサーインタビュー

’ 97 / 9 / 5 ABC (仮) 3スタジオにて実施

Q 入社したのはいつですか？

A えーっとね、ちょうど今年で5年めですね。だから(19)90(年)今が7年ですから(19)93年ですか。(19)93年入社ですね。はい。

Q 今おいくつですか？

A えー今年で28になります。だから一回、大学で一回留年してるんで、えーどうなるのかな18、19、20、21、22の24の時入社ですか。24歳で入社です。

Q なぜアナウンサーの道を選んだのですか？

A あーその質問ですね。えーっとですね、あの一大学がね、えーK大学のえー商学部だったんですよ。で、まあ、商業勉強する学部で、ていうのが、あのうちがね、あの一雛人形屋やってまして、でーまあ自然にやっぱり親の仕事とか見てるから、まっ自然にその一商売を継ごうかなっていうまっ自然な流れでその商学部を受けて、で通ってでまあ四年間勉強したんですけど、大学四回生の時に、あの一、いざ、その就職一のまあシーズンですよ、就職試験始まる時になって、で、全くなにも考えてなかったんですよ、ていうのが、自分は本当今までもう自然にその一親のやってるのを継ぐんだらうなってすごく思ってた、で、その流れで来たから、全くその就職にはあの一頭の片隅にもそういうのはなかったんですね。ただ、やっぱり四回生になって、周りが就職でばたばたしだすと、あーこれは、ねー、なんかやらないとだめかなっていう、そういうかんじであの一、就職のその一就職読本って出てるじゃないですか、そういうのを買って、ばらばらってみたら、たまたまその一、マスコミってのが目について、でーあの一大学時代にね、商学部に入ってたんですけどあの一、まっマスコミ研究会みたいなかんじのっていかどちらかというマスコミよりもその雑誌ですね、だから自分達でミニコミ誌みたいなをつくらうっていうそういう研究会があるんですけどそれにも入ってたんですよ、そのながれで、あの一最初は雑誌関係を受けてみようかなと思ったのが始まりですね。それからいろいろ研究するに従って、いや、雑誌よりもそういう放送局のほうがもっとおもしろいことができるんじゃないか、でやっぱり放送局の中でもいろいろ仕事見るとやっぱりアナウンサーっていうのは、一番表に出る仕事で、でー就職試験も一番厳しそうだったんで、どうせやるんだったら一番その一、厳しいところチャレンジしてみようじゃないかっていうんで、まっアナウンサー受けてみようかなっていう気持ちになったんです、まっただね、やろうと思った人が四回生のまっ本来なら皆さん就職が決まってるね六月七月だったんですよ。それから勉強始めたんでまっ一回留年して五回生に改めて受けたということです。

Q その一年の間、どこか専門学校へ行ってたのですか？

A 大阪にね、井上(仮名)教室っていうアナウンサー専門学校があるんですよ。そこに行っていましたね。かなり特殊な学校なんです。そこで主催してる人が、一匹オオカミっていうか、すごく変わりもんのおやじでね、有名なんです。放送局受ける時に、「井上

(仮名) 教室行ってました」って言ったら落とされますよ。嫌われてるんですよ。そのね、代表の人が60越えてるんですけど、大阪出身の人で、NHKに入社してNHKで10年くらい、それから読売テレビに移って、だから結局NHK喧嘩してやめたんですよ。で、読売テレビで副部長までいったのかな、かなりアナウンス室の中ではえらいさんまでいったんですけど、そこでもまた管理職の上役連中と喧嘩してやめちゃって、で、放送局はもういやということで、教室を開いて生徒を育てているわけなんです。合格率はね、100に近いんですよ。普通の有名なアナウンス学校でも、全体の数10%もいっただろごいじゃないですか。10人に1人もなれないじゃないですか。そのかわり、少数精鋭なんですよ。ダメだと思ったら、さすがに暴力まではいかないですけど、言葉の暴力で、まっそれに傷ついてみんなやめていくんですけどね。だから、やめらされた生徒を入れると、あれなんですけど、もうたたかれてふんずけられてふんずけられていった、そういうのを最後まで面倒みて on air で使える声と実力はおれが教えてやろうっていう、寺子屋みたいな所ですね。人数も少ないし、ぼくらの時で30人くらいいて、でも11人くらいやめて、20人弱が合格。そのかわり、残ったのは全員合格しましたね。

Q まる一年いっただけでいいんですか？

A いや、やっぱりね、長いこといった方がいいんですけど、そのへんは微妙なところで、話しだすと難しいですけど、例えば大学一回生からこういうとこいって3年やってさあ4年目です、てなると、すごく癖ついちゃうんですよ。読み方に。で、そういう人って、やっぱりいざ試験になると、嫌われるんですよ。

Q 専門学校で学ぶことと、実際に職場で学ぶことの区別がありますか？

A そうですね。特に僕関西にずっといたんで、関西にいて専門学校いく生徒はだいたいアクセントと発音、これにつきますね。標準語しっかりしゃべるといふ。うまい読みというのは学生で到達しないですね。なかにはうまい子もいますけど。逆に言うとそのまできく必要ないんじゃないかと思えます。だから、僕は、ここしかいってないから、他の専門学校はどうか分らないですけど、ここに関しては、一年くらいがちょうどいいんじゃないかな。基礎から始まって、発音、アクセント、そして標準語がだいたいしゃべれるようになるのが一年くらいなんですよ。それくらいで変な癖がつく前に受けに行くのがいいかなってすごく思いますね。その一、四年勉強したからなれるもんでもないですからね。

Q アナウンサー専門のところなんですか？他にもディレクターなども養成してるのですか？

A いや、ここはね、アナウンサーとあとタレントっていうか、ラジオでフリーでしゃべったり、ナレーションとかそういう人も教えてるんです。けど、おもにアナウンサーですね。

Q 小さい時からアナウンサーになりたかったわけではなかったのですか？

A ぜんぜんないです。だからあの一、関西生まれの関西育ちなんで、かなりアクセントとか、大変でした。短い期間でね、やらないとだめだから

Q 今までどのような番組に出ましたか？

A えーっとですね、まっ入社して最初はまあ基本的なそういう番組ってのはもたないんです。だから、よく皆さんラジオとか聞いてるとその、ピーッと時報がなって「正午になりました。それではニュースをお伝えします。」みたいな感じで、あの15分とか10分のニュースがあるんですけど、それから始まって、で2年目に、2年目にこの“サンデーウェーブ”の一員としてあの、番組に参加させてもらうようになりました。で今はですね、あの“サンデーウェーブ”日曜日とそれから金曜日に“カモン電リク”金曜日のナイターが終わったあとなんですけど11時45分までの番組、リクエスト番組です。音楽の、その二本をやっています。

Q “吉野川紀行”(“サンデーウェーブ”のコーナー名)はKさんが企画したのですか？

A いや、あの一実はですね、僕がそのサンデーウェーブについて今から3年前、4年前になるのかなあのころからねほとんどサンデーウェーブの内容ってのが変わっていないんですよ。今と。で、入社2年目で、まだ右も左も分からない状態で番組に参加させてもらって、で、どのコーナーがいいだろうなっていうような時に、まっ一番短い時間で、で、あちこち吉野川紀行って自分で取材にでるじゃないですか。だからまっ、若いうちはどんどん外に出ろっていう、まっ上からのそういう考え方もあって、で、あの吉野川紀行から始めたわけなんですけど。

Q “吉野川紀行”はどのようにして作られているのですか？

A 主にですね、徳新(徳島新聞)からのネタが多いですね、最近。あの徳島新聞のローカル面に、えーいろいろ、そうですね、川に関する事とか、あの載ってるじゃないですか。例えば、どここのあの何歳のおばあさんがその、吉野川の絵を何年も書き続けて展覧会を開きました。ってそういうのを見るとあの、だいたい住所が出てるので、電話帳を見たり、もしくは104で調べて電話をして、番組のテーマを説明してそれから取材に行きます。で、取材に行くのにDATというカセットテープレコーダーの高級っていうんですかね。カセットは小さくなるんですけど、非常に音のいいあのカセットテープがあるんですよ。でそれを持って行ってそこで話を聞いて、だいたいね、あの1時間は1時間ぐらいですね。説明も合わせて、向こうに行って話を聞くのが。だから実際最初番組の説明とか、いきなりね一始めちゃったらむこうもこう緊張してしまいますからね、あの軽い話とかでふふふ、で実際に、あの話し始めてからはだいたい30分、40分くらいテープ回しますね。で、それを持って帰って、最初のうちはね、自分で編集してたんですよ。で、今年の四月から、あのディレクターが変わりまして、で、彼は編集をやりたいということなんで、編集はもう、そっからはまかしています。だから今まではそれをいったん編集して、で前枠と後枠のそのコメントですよ、自分で考えて、書いてやりました。

Q “吉野川紀行”は録音テープを流すという仕組みなんですけど、リスナーにとってライブ感がなくなると思うのですが、それに不安は感じませんか？

A あのね、自分でコーナーを考えて始めたときはそういうのを考えるんですよ。だからこれを聞いて、人がリスナー例えば自分のそのターゲットを絞ったね、10代だったら10代、20代だったら20代のそのリスナーが聞いてくれるだろうか、また例えば、会社のその上層部っていうんですか。内部の人も聞いてますから納得させるだけのコーナー

になるだろうか、ってすごく気を使うんですけど、やっぱりこういうふうには最初からあったコーナーを受け継いだ場合っていうのは、そっち方面にはそんなにねあの一、意識いかなかったんですね、正直な話。で、やっぱり入社二年目で、何も分からない状態で、ましてやあの一、出身が兵庫県ですからこっち来て二年目ですよ。一年しかいないわけですよ。で一年の中で吉野川紀行っていわれても、吉野川っていわれてもその川でしょ、ぐらいにしかおもってないわけですよ。あの一昔がどうだったとかどんな魚がいるとかわかんないわけですから、そっちの方を勉強するのに必死で、そこまで考える余裕がなかったというのが本音ですね。ただあの一、今言われたライブ感なくなるっていうんですけどね、あの一実はね、今は多少ウェーブリポートの内容もまだ、あの一、ソフトになったっていうか、えーそれがあるんですけど、昔はもっとheavyだったんですよ。例えばね、その一、自然保護をもうちょっと真面目に考えてみようよって、すっごくねもうかなり筋の通った自然保護派の人たちがきて、こう、ガンガンやりあうようなそういう番組だったんですよ。だからそれをちょっとあの一かなり重いネタが続いた後のまっほんの、5分、10分くらい休んでもらいましょうよっていうそういう意味も込めて吉野川紀行があったわけなんですよ。あの一前後に音楽を挟んでるじゃないですか。あれもその一貫なんですよ。音楽を聞いて、で、川の音を聞いて、まっちょっと気分をリラックスしてもらいましょっていう感じのコーナーなんですよ、もともと。

Q 一般にアナウンサーは中立の立場をとるとされていますが、吉野川に対して、中立の立場でコメントできてますか？

A えーっと例えば、中立的ですよ。その一吉野川への想が強くなって中立でなくなるっていうのは、まっ今だったらやっぱりその一開発か、保護か、っていうことですね。になってしまいますよね。えっと、これはね一、実際に勉強すればするほど難しい問題なんですよ。だから第十堰にしてもあの一、第十堰付近に住んでる住民にしたら、実際賛成派の方が多んですよ。というのが、もし、あの一堤防を決壊したら、家とか財産失う可能性あるし、とすると、命まで失ってしまうかもしれないじゃないですか。だいたいその一、第十堰付近の人たちが、もう堤防をね、第十堰とっばらってしまっって、堰をつくってくれて言ってるんだったら、これは、例えば僕なんか松茂（徳島市郊外の地名）に住んでるんですけどあの一、直接関係ない人間がね、いや自然は大切だから、だからおまえたち命が多少危険にさらされてもいいじゃないかっていうふうには絶対言えないですよ。だからそういう部分ではあの一、やっぱり言えない部分ってのはありますよ。あの一、意識して中立になっているわけではなくて、やっぱり両者から話を聞くじゃないですか。両方から聞いたら両方ともこれ本当筋通ってる部分もあるし、逆に僕らが聞いてても、ちがうだろっていう部分もあるし、だから、あの一、実際意識しなくてもその一、断定はできないですね。これがね、もしね、僕が第十堰周辺に住んでたら、もっと意見は出せると思うんですよ。でも、僕はあの一少なくとも子供の頃から吉野川でアユをとっていたわけではないし本当こっち来て、まっ4年ちょっとで、最近になってその一、釣りをするようになった、で一河口のね、その一、川原を走る程度ですからなかなか言えないですよ。

Q この前は徳商（徳島商業高等学校）の取材お疲れ様でした。実際に取材に行くのと、スタジオでトークするのはどちらがおもしろいですか？

A あっそうですね、やっぱりおもしろいのは、実際現場に行く方がおもしろいですね。

えー、やっぱりあの一生の声が聞けたり、で一例えば、その一試合でもね、仕事じゃなくても実際球技場、球場それから現場に行つて生のものを見るのとやっぱりテレビの前で見るのとではちがうじゃないですか。同じようなものですね。

Q 今まで一番印象に残っている取材は何ですか？

A やっぱり、そうですね、阪神大震災の時ですね。あの淡路島に行つてまっ現地で一あの北淡町という所と一の宮町、まっ一番被害の大きかったね、まっ淡路島の中では一番被害が大きかった所をその一二つを取材して、んあの一よかったことはぜんぜんないんですけどね、あの、そうゆう悲惨な場所ですから。ただ、やっぱりそういうとこで取材して、なんて言うんですかその一仕事のその一厳しさを知ったというか、ん一、そういうのはありますね。はい。で一楽しかったのは、あの一、音楽番組やってるじゃないですか。で、アーティストと会えるんですよ。これはもう文句無しに楽しい仕事ですね。だからその一テレビなんかであの一見てるアーティストいるじゃないですか。で一例えば、パンクロックのアーティストなんて、テレビではすっごくねもうすっごくもうだら一つてしてて、もう司会者がなんだみたいなね、リスナーあの一、視聴者がなんだみたいなそういう態度とるんですけど、実際裏にまわるとすっごくいいひとだったりすることがあるんですよ。そういうのを見ると、なんかすっごくうれしいですね。

Q 今まで放送中で一番困ったことは何ですか？

A 放送中で一番困ったことですか。困ったこと・・・えー、やっぱりその一、阪神大震災の時ですかね。うん。あの一ちょっと放送業界の中の話になるんですけど、現場にいてみんなよくしゃべっているじゃないですか。あれ一、画面に映ってるのは、まっリポーターがいてマイクがあるだけなんですけど、実際、その一周りに人がいるんですよ。例えばあの一時間を計る人とか、それからカメラマンもちろんいるし、で、カメラの後ろにはもちろん中継車っていう大きな車があるんですよ。あの一、パラポリアンテナのついた、衛星回線を使った、衛星回線ですよ。衛星回線を使って、例えば、その淡路島で撮った映像を日テレに送って、で日テレから全国へ放送してるんですよ。で、僕その一、一番に淡路島に入ったんですけど、まっその車とね、カメラマンはいたんですよ。でもあと誰もいない状態だったんですよ。で、普通まありポーターがしゃべっていると、前で、その、テレビ画面で今こういう場面が映ってますよってこれニュースでもそうなんですよ。僕ら、あの一、スタジオでニュース読んでても、目の前には、あの一、いわゆるプロンプタっていうね、原稿を写す画面があって、その横に今自分の映ってる自分の顔、まっ on air の状態のテレビの映像が流されているわけなんですよ。カウントダウンの時計なんかもついたりするんですけど、まっそういう小さいテレビ、小型テレビっていうんですか、そういうものもあるし、それから、あの一、いわゆるエアモニ（エアーモニター）っていうよくみなさんね耳にイヤホンつけてますけど、あれは東京からの、ま、全国放送の場合ですよ、東京のその on air が聞こえてくるわけなんですよ。だから東京のスタジオで「それでは淡路島の何々さん」て呼んでくれたら、それに入つて、「はい」っていうようなかんじですか。それもなかったんですよ。で、あの一、テレビもないと。だから本当にシーンとした状態ですよ。地震で壊れて、なんかシーンとした状態で、あの一目の前にカメラがあつて、今もう全国中継のつてるよって言われても、あらってかんじでね、あの一ときはちょっと本当に困りましたね。で、しかもね、全国中継が初めてだったんですよ。あんときは何

もしやべれずじまいで終わっちゃって。困ってる僕の姿が映ってたらしいですよ、後で聞いたら。その時はね、僕本気で辞表書こうとマジで思いましたよ。

Q でも一応無事に終わったんですよね？

A いや、無事じゃ、あはははは（大笑い）ぜんぜん無事ではありませんでした。

Q 状況は伝えることはできたのですか？

A 状況を伝えることはできませんでしたよ。うん、もう本当に、いや一家がこんな状態でえらいことです。はい。終わりみたいな感じで終わっちゃって、以上です、つてもう自分からね、終わっちゃって。でーただ何回かあの一その当時の状況ってのが、関西からね淡路島に入ることができなかつたんですよ。もう全部港が壊れて、船でしか行けないじゃないですか。淡路島行こうと思ったらね。こっちから行くっていったら鳴門橋しかないわけですよ。となると、ABC（仮）が一番乗りだったんですよ。淡路島に入ったのが。その震源地に入ったのが。ふえ、ねえ、他の局、例えば、徳島ってあの一民放が一つしかないっていうね、ABC（仮）しかないんですよ。で、日テレ系でしょ、NN系列。だから他の例えば、TBSとかが、いや淡路島の映像下さい、っていっても、「いや、だめなんです。うちは日テレだけなんです。」ってそういう世界なんですよ。だから、うちしか行ってないんですよ。だから日本テレビにしてみたら、少しでもその一、震源地の映像とかほしいわけなんですよ。だからもう十分おきくらいに呼ばれてその度に、「いやー、もうー、こんな状態です。以上です。」その繰り返してね、うん、まー、今から考えてみてもゾッとしますね。

Q Gアナ自身におけるマンネリ化対策は？

A あー、マンネリ化ね、ありますね、マンネリ化は。例えば吉野川紀行。どうしてもネタが同じなんですよ。例えば、6月になるとアユが始まります。アユの人の話を聞きに行きます。で、9月とかなってくると、台風シーズンなので災害を経験した人とか。だいたいね、一年を通してネタが決まってくるんですよ。そうなってくると、いわゆる、マンネリ化してきますよね。もうね、マンネリ化したらしてきたで、特には対策はとっていません。ただ、仕事は吉野川紀行だけじゃないんで、他にもスポーツ中継とかあるし、特にスポーツ中継になると、マンネリ化しようがないんで、やっぱり、目の前にある試合を中継するわけじゃないですか。マンネリ化するには、仕事が厳しすぎて、マンネリ化できないのが現状ですね。毎回新鮮だし、だから、そういうのがあるからなんとかマンネリ化せずにやっていますね。だから毎年スポーツとか、大きい仕事が廻ってくるシーズンになると自分でも分かるんですよ。気合い入ってるのが。だから、そういうのが、あるから、マンネリ化は今のところないです。これから10年、20年したらわかりません。

Q 番組（サンデーウェーブ）におけるマンネリ化対策は？

A それは僕が気をつけなくてもIアナがいるんで大丈夫です。まっ、最初役割って部分でどうしてもね、ディレクターがまだ25歳で若いんですよ。実質的なディレクターはIアナなんですよ。ネタから最終的判断するのはIさんなんですよ。で、毎回11時まで放送ありますよね。で、昼御飯食べて、1時から反省という形で打ち合わせなんかもやるんですけど、悪いところとか指摘されますし、まっ、自分でも分かるじゃないですか。

今日はこの部分でもうちょっとこうやってればよかったかなと思ったら、ずばっと指摘されますし、そういう意味でIさんの存在は大きいかなって思いますね。もし、なんらかの理由で、Iさんがサンデーウェーブぬけちゃうと、ちょっと難しいですね。一から全部変えないとダメですね。他に誰かが来るにしても、残っている我々でするにしても、全部作り替えないとダメですね。それぐらい大きな存在ですね。自分は部屋の中しか見てないけど、Iさんは天井裏の釘まで見てるんですよ。例えばコメンテーターの先生が4~5人いらっしゃるんですけど、その先生のことをよく知っているのもIさんなんですよ。多分Iさんが10のことを知ってたとしたら、僕は3~4、ひよっとしたら、半分も知らないんじゃないかって。だからもっと全体的な知識を広げていくっていう。そこでIさんがいなくなると、相手にも失礼だしコメンテーターの先生にも失礼だし、リスナーに対しても失礼じゃないですか。隅々まで分かっている人と、表面しか分かってない人が同じことするとしたら、同じようにやってるようにはみえてもどこか違いますよね。もし自分が中心となってやるなら、全部一から見直して、全部を自分の中で消化して行って、初めて番組が成り立つのでは。それからサンデーウェーブはじまってからの流れも大切ですよね。一時は硬派なのやってたんですけど、今はちょっとソフトになって、家庭の主婦とかが家事しながらでも聞けるようにしてるんですけど。まっ、昔からの流れも大切ですよね。

Q 番組内で何か気をつけていることはありますか？

A 最近余裕をもってできるようになったんですけど、それでもまあ、新しい番組とかちょっと慣れないテレビの特番とかになるとかなり緊張すると思うし、そうなったらやっぱり緊張してる状態でできることって限られてるんですよ。だから、例えば、ここはこうやってやってで20もやることを並べられても絶対にできないんですよ。だから、大切なことを5個くらい頭において、あとはもうその放送の中で、勉強していくのが多いです。だから、最初僕が気をつけたのは、二時間の番組でしょ。その中で、自分がしゃべるのはどこなんだってチェックしましたね。だから一番困るのがやっぱりみんなで協力してやってる番組ですから、Iさんが「～～です。」ていった後に僕がでないと困るんですよ。僕がでるところで。間ができちゃうと今までつくってきた流れがバタッと、止まっちゃうでしょ。だからそれだけは絶対やっちゃいけないなっておもったんで。例えば今だったらまずIさんが「〇月〇日、日曜日、ABC(仮)サンデーウェーブです。」ていった後すぐにニュースヘッドラインが入るじゃないですか。その時に向こうのマスター(光ディスクを用いた音声放送装置)からでるんですけど“*This morning's head line news*”っていう“どなり”があるんですよ。それいった後に僕が読むという、それ大切なチェックですよ。今ではもう普通にできますけど。最初のうちは、どなりがあるのかないのか忘れることが多いんですよ。どなりがあるのに勝手にヘッドラインニュース読んじゃって、読んでる最中に、“*This morning's head line news*”って入っちゃうとかっこわるいですからね。そういうのすごい細かくチェックして、何ヶ所か二時間の中で、自分はここはこれを気をつける、ここは誰々のしゃべった後にでる、であとはもう放送の中で覚えていきました。

Q 声が重なったこととか、失敗したことはありますか？

A 重なったことはないんですけど、番組の中です。それとウェーブレポートのコーナーでアジアのコーナーやってるんですけど、9:25~10:00までで、曲もクッションでおいてるんですよ。で、あるとき曲も全部なくなっちゃって、もう曲もかけ

ないってことになったんですよ。曲カットしますって指示がきて、ということは10:00の時報ピッタリに切らないといけないんですよ。ところが話をどうやってもまとめることができなくなっちゃって、わー、あと一分なのにまだゲストしゃべってるわ、どうしようって思ったら、もうやっぱりそういうときは残り30秒ぐらいでIさんが、「はい、ということで」て、しゃべってるのうまいぐあいに「何々しましてね、なるほど、はい、今日は、ですねー」ていう感じで話を終わらせてくれました。そういうときは本当助かりましたね。

Q 曲はそういうためにも入ってるんですね？

A そうなんですよ。10:00の時報をずらすわけにはいきませんから。曲はのぼしたり縮めたりできますからね。5分の曲を選んで入れてたら、9:55~10:00までの間いつ話がおいてもいいじゃないですか。まとまった時点で、「はい、ありがとうございました」って。そういうかたちでも曲はあるんですけど。

Q 話が10:00までにまとまらない場合も、話をむりやりきるのですか？

A そうですね。時報の方が大事ですから。

Q 途中で曲カットとかBGM（バック・グラウンド・ミュージック）で流すとかの時間調整は誰がするんですか？

A あれはですね、Iさんがするときもあれば、ディレクターが判断する場合があります。

Q Iさんは自分の判断をどうやってディレクターに伝えるのですか？

A あのね、ほんの一瞬の間にカフを下ろして、この白いボタンがトークバックといってむこうにこれ、例えば今カフを下ろしますね。で、今こうしゃべっている声は全部むこうに入ってるんですよ。だからこうやって、「曲カットします」って数秒でおわらして、で、またカフ上げてしゃべってますよね。ほんの一瞬です。だから例えばほんのちょっとだけ、RT（パーティシペイティング・コマーシャル=番組時間中に放送されるCM）CMが入ったあいだとか曲をかけてるあいだとか、例えばサンデーアジアとかになると、アジアの曲紹介があるじゃないですか。一曲かけて、いったんみんなカフ下げますよね。で、曲がかかっている状態、そのときに残り時間とかみて、この後二曲目はカットでというのを軽く指示したり、そういうのはあります。

Q 相談して曲カットとか決めるんじゃないんですね

A ないです、ないです。

Q では、先に判断した者勝ちですね。Iさんが先に判断したらその指示に、ディレクターが先に判断したらその指示に従うのですね？

A そうですね。ただディレクターが判断しても一応Iさんが総合ディレクターみたいなもんなんで、Iさんが違うってときにはIさんの意見ですね。Iさんの判断が一番ですね。

Q スタジオ内での曲カットの周知はないんですね？

A ないです。

Q 皆Iさんを見てるわけですね。

A そうですね。それはね、教えてもらうんじゃなくて、毎回毎回するに従って自然に分かっていったんですよ。

Q 曲は多めに組んであるんですね？

A そうです。カットするのは簡単ですからね。増やすのは難しい。

Q どれくらい曲組んでいるんですか？

A 4分×3曲=12分くらい用意してますね。

Q IアナやSアナはイヤホンしてるのに、Gアナはイヤホンしてませんが、それはなぜですか？

A (大笑い) これね、こわれてるんですよ、僕のぶんが。ずっと前から。音が入るんですけどすごく雑音が入ったり。こういうのはね、本来直してもらわないといけないんですけどね。

Q 困りませんか？

A うん。僕は困らないですよ。(笑) あのね、えーと2Fに4スタっていうスタジオがあるんですけど、4スタではつけないと困るんですよ。これね、なんでつけてるかっていうと、これね、例えば、基本的に、カフっていうのがあるんですけど、これ下ろしちゃうと全く声入らないんですよ。で、上げると声が入る、放送にのるわけなんですよ。例えば吉野川紀行のBGとか、CMとか、それぞれ番組始まったときの“ABCサンデーウェーブ”って外国人の人が言うじゃないですか。そういう声はカフ上げてると聞こえないんですよ。2Fのスタジオでは、基本的に耳(イヤホン)から入ってくるんですよ。

Q いつから話せばいいか全く分からないわけですね？

A そうそうそう。そうなんですよ。だからね、例えば、サンデーウェーブの“ウェーブレポート、ジャカジャカジャカジャカジャン”ってこう入るじゃないですか。ジャンっておわったところで、カフをばって上げてしゃべるんですけど。基本的にね、カフ上げちゃうと音が聞こえなくなるんですよ。だからイヤホンをつけてる、イヤホンからはずっと聞こえるから。ただ、このスタジオはね、その音が聞こえてくるんですよ。そのスピーカーから。だからスピーカーからそれを返してもらってるんで、全然困らないということです。

Q でも、ディレクターの人が直接話しかけるのはスピーカーからでないことがありますよね。

A あれはね、そのぶんここにテレビモニターがあってこれをつけると、向こうにカメラがあって、今、手映ったでしょ。こういうので指示出してくれるんですよ。だから僕、主にこっちのほうでやってるんで。

Q 番組のトップの自己紹介のあいさつの言葉は事前に考えてるんですか？

A ぼくね、どうしてもちょっと背伸びしちゃうんですよ。というのが、番組のレベルがちょっと背伸びをしないとついていけないんです。だから準備します。

Q 2、3日くらい前からですか？

A いや、そんなことはないです。当日の朝です。数分前にやるか数十分前にやるかの差なんですけど。その差結構大きいんですよ。思いつかなかつたらえらいことですよ。でも、時々準備を忘れることもあるんですけどね。いけない、何も考えてなかったとか。あまりバカなこともいえませんしね。やっぱり朝の情報番組なんで、ちょっと話の奥がないといけなくて、それがね、難しいんですよ。正直いって“サンデーウェーブ”の中で一番嫌なコーナーが、朝のあいさつなんですよ。あれは僕の等身大の姿じゃなくて、仮面を被った姿なんですよ。

Q “サンデーウェーブ”の中で、職種混合化はしてませんか（アナウンサーであるだけでなくパーソナリティー化しているのでは）？

A やっぱりうちとかはローカル局なんで、まだそこまで行ってないですね。やっぱり、パーソナリティーやってる人もいますが、あくまでアナウンサーの枠の中でやってますね。うちのアナウンサーの中で「おれはこういう生きざまだ。おれについてこい。」ってやってる人はいないですよ。その一、（ABC（仮）の中での）レベルの差はあっても、東京とか大阪とかでやってるようにはできないですね。だから皆アナウンサーとして意識してやってますよ。

Q これからつくってみたい番組はありますか？

A そうですね。あのねーラジオでもテレビでもどっちでもいっていったらあれなんですけど、どっちかっていったらテレビがいいんですけど。この前徳商がベスト8までいったじゃないですか。あーゆうのを県大会のときから地道に取材して、一つの結果（ベスト8）を出しましたよね、そういうのをドキュメントでつくりたいなど。自分がディレクターも兼ねて、もちろんナレーションも兼ねて。もちろんディレクターはいますよ。企画をもちこんでということ。

Gアナウンサーインタビューについての感想

吉野川第十堰問題に関して、私自身が詰めてない質問をしてしまって、Gさんに、「それはどういうことですかね」と聞き返された時に、答えに詰まってしまって何も言えず、それは私の詰めてない質問が原因で、質問しているときにすでに自分自身があまり理解していないことは分かっていたのだが、まあなんとかかなかなと思っていて自分が甘かった。質問内容を十分に理解していないまま質問するということは、実に恐ろしいことだと身をもって実感した。

上記のインタビュー内容でよく分かるように、Iさんが実質的なディレクターであり、時間調整も行っているという。例えば、スタジオ内にゲストを呼んで話をしてもらう時など、Iさんはゲストの話だけに聞き入ってしまうとは時間管理ができないから、ゲストの

話を聞きつつも、時間チェックもモニターを見て常に行っている。とすると、ゲストの方ばかりに気を向けることはできないから、そこはGアナウンサーや、Nアナウンサーがフォローっというか、ゲストの相手というか、そういうふうにしてゲストの方に失礼のないように、番組はチームプレーで成り立っているということがよく分かった。

マンネリ化対策に関して質問したところ、Gアナウンサーは「ありますねマンネリ化は。例えば吉野川紀行。」一年を通じてのネタが同じになってくると言っていて、でもそれは、以前のサンデーウェーブはもっと堅い番組であって、吉野川紀行はその息抜き（心を落ち着かせるようなもの）みたいなものであり、Gアナウンサーはそういう番組の構成を知っているから、別にマンネリ化に困っているふうではなかった。また、吉野川紀行に対してマンネリ化がいけないというふうでもなく、逆にマンネリ化もいいというようなニュアンスも込められていたように思える。また同じ質問をNアナウンサーにしたところ、まだ番組に出始めて間もないから自分自身の番組に対するマンネリ化はもちろんなく、で、一年を通じて話すことが決まってくる（季節ネタなど）のは仕方ないのでは、と言いつつも、もっと情報網を広げたいのだが、話題提供者もいなくて、挫折せざるを得ないと言っている。このマンネリ化に対する意見の相違はGアナウンサーとNアナウンサーの番組の方針に対する考え方の相違であって、Gアナウンサーはスポーツ番組に大変熱を入れており、Nアナウンサーは新しい人にいろいろなことを聞くことがよいという方針で、一見同じ考え方のように思えるが、よくよく考えてみると、実は違うのである。

私達のあいだで、“IアナウンサーやNアナウンサーはイヤホンをしてるのに、Gアナウンサーだけイヤホンをしてないのはなぜだろう”という疑問がずっと持ち上がっていたのだが、インタビューすることによって、その理由を細かく説明してもらえたのでよく分かった。

これからつくってみたい番組は、この前徳商が甲子園でベスト8まで行って、県大会からベスト8にいたるまでを追ったドキュメンタリー的な番組といていたが、そういうのはぜひともつくってもらいたい。というのはGアナウンサーは様々な所に取材に行っているからその経験を十分に生かしたら、実にいい番組に仕上がるのではないかと思うからである。ありがとうございました。

入社までの経緯

入社したのは、今 今年が3年目ということは、1995年ですね。(199)5年の4月ですね、あってるかな、ふふっ。Gさん、私より2コ上ですね。私はダブルスクールなんかには全然行ってません。普通の大学。もともとアナウンサーになるつもりが全然なかったんです。大学は、あ、えっとですね神奈川県内の大学に行ってたんですけど、学部は、まれな、今いっこしかないかもしれないんですけど、環境情報学部っていいまして、何をっていうか、主に私がやってたのは、コンピューターのソフト関係やってたんですけど。あの一できたら、卒業したら、東京のほうの会社で働きたかったんですが、ま、ひとりっこなんで、両親も帰ってこいっていうことで、もうもめにもめて、ま、じゃあ仕方ないから徳島県に帰ってこようと思って、ま、いろいろ徳島県の会社って限られますよね、だからこの業種っていう風なしほりかたできなくて、とりあえず、ま、有名所っていうか、(そういう)ところを何社か受けて、その中の一つがたまたまABC(仮)で、だから別にアナウンサーになりたい人っていうのはたぶんそういうスクールに通って、いろんな全国各地の放送局回るんですけど、私はもうここだけしか受けてないですね。

入社試験について

入社試験は、そう一般と、アナウンサーとがあったんですけど、記念受験的なっていうか、そのアナウンサーの試験ってどんなもんだろうっていう興味からはいって、もう内定ほかの会社からもらってたんで、ま、別に、一般だったら別に、っていう感じがあって、アナウンサーの試験を受けようかなって思ってみたら、こうなった。アナウンサーの方を選んだ理由ですか？うーん、ま、もともと一回落ちてたんですね、ここ。アナウンサー。他の方が決まってたんですけど、その方が他の局にいて、で、穴があいて、回ってきたんで、結構8月の阿波踊りぐらいに電話かかってきて、それその段階ですでに、ここだめだったから違う会社の内定式はないですけど、内定者の懇談会にでちゃってたんですけど、ま、やっぱり謎っていうか、未知数っていうか、どんな職業かも分かんないし、いろんなことが体験できそうだっていうんで、こっちを選んだんですね。前行こうとしていた会社は、大学でやってたことが生かせる会社だったんですけど、ま、ここだったらゼンゼン関係ない、ま 無駄っていうか、大学4年間勉強してきたことは何だったんだ、って親にも言われたんですけど、魅力っていうか、どんな職業か分かんないってところにひかれて、入ってきました。

入社してから

あと入社して、研修があるんですけど、いろいろ話聞いて、アナウンサーってそれまでどんな仕事って、実際どんな仕事しなきゃいけないかっていうのを聞いてるうちに、絶対

私には無理だ、と、思っ、思わぬ研修中に、アナウンサーも一般（職）に変われますかっ、て聞いちゃったんですよ。もう、こわくなって、できないと思っ、て。

Wスクールについて

Wスクールに行かなかったことに対する後悔ですか？それはすごくありましたね。あの一決まっ、てから一応その、アナ室の一番上の方のすすめで、やっぱり学校へ行っ、た方がいいっていわれて、入っ、たんですよ。10月くらいに。3ヶ月くらいの講座。もう東京では有名なアナウンサー学校だったんですけど、はいっ、て10何回で終わるんですけど、1回目いっ、てダメだ、こんなのは私には、っ、ていうか、雰囲気はなんっ、ていうんでしょうね、「私はモデルよ」とか「アナウンサーになるのよ」とか、高飛車っ、ていうか、キャッキョしてっ、ていうか、その雰囲気がなんかこの田舎から出っ、て、そういう芸能界みたいな匂いっ、ていうか、ああいう感じなのかなっ、ていうのがして、これはっ、ついていけないと思っ、て、あと2、3日は行っ、たんですけど、もう行かなくなりました。すぐ。で、なんか先生も偉そうっ、ていうか、うーん、こんな人とはできないっ、ていう。でもやっぱり、続っ、けて行っ、てけばよかっ、たっ、て今でも思っ、つけど、その一たまに今でも、こう、アナウンサー研究会っ、て、全国のアナウンサーが集まっ、て、なんか研修することがあるんですけど、やっぱりアナウンサーアナウンサーしてっ、るんですね。で、結構ABC（仮）にいたら、そんなアナウンサーっ、て雰囲気じゃないんです。けど、全国の（アナウンサーが）集まっ、てきたら、うーんみんなアナウンサーっ、ていうんで、ひいちゃう。私もひいちゃっ、て、なかなかこう、疲れる。いるだけで疲れるっ、ていう雰囲気。で、その雰囲気が、いまだに嫌い。ここではあんまりないんで、ほっ、としてる。だからやっぱりそういうスクールに通っ、てるとか、昔からなりたくっ、ていろんな放送局受っ、けてる人っ、ていうのは、そういう雰囲気っ、ていうか、すごい持っ、てる人で、それはいまだに慣れないし、自分は向いっ、てない、向いっ、てないっ、ていうか、アナウンサーらしくないアナウンサーなんっ、てですね。今、ABC（仮）でも。だから、大学時代に勉強した方向にいっ、つとけば、自分の力っ、ていうか、生かせるかもしれないっ、ていうのはやっぱり今でもたまにフッ、と思っ、つときはあるんですけど、でもこっ、ちもこっ、ちで面白いんで、今に至っ、てるっ、てかんじですかね。

これまでの仕事について

これまでの仕事ですか？テレビとラジオと両方ありますから、両方してっ、るんですけど、主にラジオの方が多っ、いですね。えー1年目のときは、あの一、ラジオカーっ、てご存知でしょうか。（それ）に乗っ、て、リポーターがまず最初の仕事ですよ。あとそれ以外の日は、輪番っ、ていうかんじで、ニュースとか、交通情報とかを、みんなでこう、かわりばんこっ、ていうか、ローテーションで、まわっ、てやっ、てましたね。主にその2つ。で、2年目、3年目になると、ま、いわゆるワイド番組的な、朝だったら「えんやこらワイド」、昼は「午後はこれからはりきりワイド」っ、ていうのがあっ、るんですけど、そういう番組の何日かを担当するようになっ、たりとか、あとラジオでも、特番とかあっ、たりしますよね、そういう、ま、カラオケ大賞とか、あと小松島の歩け歩け大会だったら、なんか5キロくらい歩いっ、て、

みんなで放送しながら歩くとか、そういう特番があるときは、そのスタッフに入ることもあるんですけど、主に自分の持ち番組プラス ニュースとか、天気とか、そういう輪番の仕事ですね。で、テレビになると、今は徳島の広報番組やってるんですけど、それ以外は例えば、夏だったら、高校野球とか、あと11月はサッカーとか、ラグビーとか、あるんですけど、そういう風なりポーター、応援席とかベンチのリポーターやったりとかありますね。レギュラーである番組に、特番があったら、たまにポツポツと出るっていった感じですね。これまでの取材で、一番おいしい思いをしたのが、北海道の帯広。みんなにうらやましがられたっていうか。えっとね、徳島市の広報番組で、産業文化姉妹都市なんですよ、それで、こっから訪問団が行くっていうんで、一緒に同行、途中までして。札幌は雪祭りですけど、帯広は氷祭りなんですよ。その取材に今年の2月ぐらいに行ったんですよ。それはみんなにいろいろ言われました。ズルイとかいって。すっごい寒いと思って、気合入れて行ったんですけど、向こうの方がこんなにあったかいときはないって言うくらいの、いいお天気っていうか、あったかさかげんで、ま、でも0度とかきるんですけど、恵まれてました。あと、いろいろ行きますね。餅つきも行くし。いまりハビリ講座っていったりハビリの先生と一緒に介護の仕方をシリーズでやってたりとか、あとどっかで文化祭があるっていったら行くし、ネタは市役所の広報の方が決めるんですけど、ひょうたん島のクルージングに行ったりとか、まあ徳島市の広報番組だから、市内中心ですよ。

Iさん、Sさんについて

Iさん、Gさんとは、特番では一緒だったことはあっても、レギュラーの番組では、はじめてですね、二人とも。サンデーウェブに決まったきっかけですか？まあ、Sさんとの関係もあるんですけど、今、女子アナをみた場合、結構女子アナが足りない時期で、その配分っていうか、その一、この番組に適してる年齢層とか、キャラクターとかいろいろ考慮した結果なただけだと思うんです。実力？そんなことないです。

女子アナが足りないのは、あの一、まあ、Sさんがお休みっていうので一人減りますよね。これまで契約タレントさんがしてた番組を、女子アナがやろうじゃないかっていうことになって、ようやく取り戻したっていう時期なんです。10月から。プラス一人休んでるっていうことで、結構足りない状況なんです。今までタレントさんがしてたんで、ま、大丈夫だったっていう面もあったんですけど、その分もやろうじゃないかってきて、一人休んでっていうんで、ちょっとみんな大変な時期ですね、今。やっぱりあのABC(仮)のラジオの方の中心番組っていうと、月から金の帯番組、朝は「えんやこらワイド」、昼は「はりきりワイド」ですよ。それをアナウンサーがやらずして、タレントがやっていいのか、いいのかっていったらいいんですけど、アナウンサーとしてやっぱりこうやりたいっていうか、取られたままでいいのかっていうのはありますよね。だからっていう感じで、別に職種の幅を広げるというよりは、まあ、いい経験にもなるじゃないですか。いつもニュースばかり読んでるより、ワイドしてあいつちの勉強したりとか、いろんな、クイズの枠があったりとか、なんでもまあ、こやしになるっていうか、その経験の場が、今までなかったのが、取り戻したことによって経験ふめるわけですよ、で、しゃべる時

間も長くなります。ニュースだったら、2、3分ですよ、ワイドしてたら、何時間もしゃべるので、しゃべらないところ、経験というか、育たないというか、ずっとデスク座ってただけだったら、全然伸びないっていうか、いい勉強の場がもどってきたというかんじですね。

サンデーウエーブ初出演について

サンデーウエーブにはじめて出たのは、10月12日です。緊張、やっぱりこうその番組の進行が、頭に入ってないというか、回を重ねないと、体に染み込んでこないんで、次は何、次は何、次は何っていうのを自分で絶えず次のことばかり考えていて、今を見てないっていうかんじで、すごい緊張しましたが、多分まわりの方も緊張してて、いろいろ言ってくれたんで、無事終わったって感じなんですけど、やっぱり前の晩とかドキドキしますね。

他の番組と比べて

他の番組と比べてですか？そう、まったく違います。相手というか、アナウンサーもみんな違うんですけど、番組のコンセプトっていうか、違います。サンデーウエーブだったら、ま、結構カタイというか、なんていうんでしょうねー、知的な番組っていうか、ニュース性がある番組ですけど、月曜日の番組（大人になりたい）は、もうおちゃらけてるっていうか、何でもあり、同期の林田健二（仮名）っていうアナウンサーと2人でやって、ディレクターがいないんですね。だから、好きなテーマで、好きな人を呼んで、好きなふうに時間っていうか組めて、できるっていうんで、もう、いろんな、高校生ネタから結構マニアなネタまでとか、UFOとか幽霊とか、あやしい、何でもありっていうか、結構自由がきく番組ですね。で、「えんやこらワイド」は、もうあの番組は、カチッと決まりすぎてるといいうか、いじりようがないっていうか、やることやることがずっともう決まってるんで、その枠にパッパッパッってはまってって、成り立ってるっていうか。一番こうアシスタント要素が強いのが、「えんやこらワイド」で、だからもう本当に全部違いますね、役割っていうか。

サンデーウエーブについて

サンデーウエーブの中のチームワークですか？あくまでもっていうか、メインはIさんですよ。だから、Iさん何を言いたいとか、どこまであいづち打てばいいのかとか、どの番組でも共通してるんですけど、どこであいづち打てばいいのかとか、やっぱり目で見たりとか、経験っていうか回数重ねたら、あうんの呼吸っていうか、があるんで、本当にもう慣れないと、なかなかうまくいかない、かみあわないかなーっていうのはありますね。あと、複数だと、安心ですね。もし自分が間違えたこといっても、すぐ訂正してもらえっていうか、今のはちよっとってかんじで、ま、いろいろ注意されるし、顔見てたら、あ、言っちゃいけないかなって思うこともありますよね。

番組の中で話す時は

話す順番のタイミングですか？あいさつ？さいご？あ、曲名とか、テーマとかドナるのですか。はい、あれは決まりごと。あれはもう慣れないと、私もだからいまだにビクビクしないと。これは私言わなきゃって、書くんですよ、朝。たまに忘れて怒られるんで。最初本当に番組始まる前に、こう言って、こうでこうでっていう段取りを教えられて、テープ聞いたりして、かんじっていつのつかんで。段取り覚えるしかないっていうか、自分のものにするしかないってかんじですよ。あれはもう決まってて、テーマを言って、私がゲストを紹介するっていう決まりごと。私もうっかりっていうか、ボーっとしてること多いんで、忘れて。今日、曲、一曲目紹介するときに、私まだ今日はじめて知ったんですけど、いつもIさんが、では音楽まいりましょう、かなんかかって、私が、なんとかさんの、なんとなかって曲って紹介すればいいと思ってたんですけど、そうじゃないってことがはじめて。あとで、結局今日は曲まいりましょうって（Iさんが）言って、私曲紹介したんですけど、その前に、間があったんですよ。空白っていうか。で、おかしいな、と思って、もしかしたら私が全部やんなきゃいけないのかなあって思って聞いてみると、そうだったっていう。ゲストの紹介ですか？それは私の役って聞いているんですけど。日によって違いますね。ゲストご紹介しましょうって言われて、なんとかさんですって言うときと、今日は、最初なくて、前半フリがなかったんで、それはもう自分の方で言うべきかなって、その瞬間に判断します。言う担当っていうのは決まっていますけど、これを言ったら私のしゃべる番っていうのは、決まってないです。最後何の言葉で終わるか、その日その日によって違いますよね。だから自分で判断するしかない。

12月7日の番組について

今日はですね、いつももっとしゃべらないんですけど、結構私も加わらないといけない、たまたまネタっていうか、ガーデニングも、一応メインっていうか、誰が中心になるかっていうことが決まるんですけど、今日は私が一応中心だったんですよ。ガーデニング。だからあれだけしゃべってたんです。で、今あの、紅茶と、星と、犬と、あとアウトドアと、ワイン、5つあるんですけど、3人で割り振って誰かが中心になろうっていう話なんで、今日までの段階では紅茶は私になるんじゃないかっていうことで、Gさんよりも私の方がしゃべってたっていうのは、そのへんがあるんですよ。

下調べについて

下調べですか？そうですね、ま、テーマが決まりますよね、決まったら、やっぱり本屋でも注意してみるようになったりとか、今日、結局本使わなかったんですけど、本買ってみたりとか、テレビでやってたら、あっと思っていたりとか、新聞読んでても、コピーしたりとか、ま、最近インターネットとかはやっていますけど、インターネットで調べたり

とか、やっぱりしますね。うん。

新しい企画について

サンデーウェーブの中での新しい企画は、今の番組の構成から見ると、なんか新しいのが入るスペースっていうのはもうないですよ。だからそのメインのコーナーのウェーブレポートとか、あのこだわり講座の中のテーマを選ぶときに、今日も1時から、いつも1時から会議してるんですけど、そこでいろいろみんなが、こんなテーマはどうか、っていうかんじで話すので、その時に自分のやりたいテーマがあったらこれはどうですかかっていて、じゃあそれやってみようってことになったら、それで自分が中心になって。はい。え、反省会？反省会... あの、今後の打ち合わせっていうか、来週はこれとこれのテーマ、次はこれとこれっていうか、こう表っていうか、それぞれ個人で持ってるものは違うんですけど、日曜日のが入ってますよね。で、埋めていくっていうか、埋まってない日があったら、この日じゃあなんのテーマにするとかそういう感じのが、打ち合わせですよ。反省会っていったら、今日の話どうだったかとか、もうちょっといろんな話が聞けるから、もう一回今度いつごろ呼んでみようとか、うまくっていうか、まあスムーズに流れてなかったら、これが原因だったから、今度はこうしてみようとか。そんな、濃い反省会ではないんですけど、やっぱりちょっと簡単におさらい、反省会、たまに、同録（同時録音）テープ聴きっていうか、後ろに流しながらやることもあるんですけど。

マンネリについて

マンネリですか？どっからきいたんですか？自分が、今日数えてみたら、まだ6回しかやってないですよ。だから自分の中では、マンネリ化してないっていうか、まだまだ慣れない状態ですけど、やっぱりこうメンバーが決まって、ゲストもローテーションとか、何ヶ月ぶりに来たとか、テーマも、一年通じて起こること、徳島にいても、ボコボコ事件も起きないし、そんなに新しいことないですよ。だからどの番組でも、マンネリ化っていうか、しゃべることなくなるんですよ。うーん。だってもう季節の物っていうか、もうすぐクリスマスですけど、クリスマスが近づいてきたら、ま、クリスマスのお話、でも去年も話したし、おとしも話したして。ま、それは仕方ないっていうか、季節ネタっていうか、みんなが気になることだったらしゃべるし。もっと情報網っていうか、広げればいいんですけど、なかなか特派員がいるわけでもないし、新聞とかね、しか、情報源っていうか、こんな人がいるってほしい新聞とか、人に聞いたとかですよ。だから結構月曜日の番組で目指してたのが、ゆきとどかないじゃないですか、郡部まで、で、特派員じゃないですけど、各町村に、親しい人を作つて、こんな話題があるんですよって言ってきてもらえるような番組ができれば最高だって思ってたんですけど、挫折。なかなかやっぱりむずかしいし、向こうの人も、多分こんな話題役に立たないんじゃないかなって、提供してくれないっていうかね、こっちから電話して聞いたら、こんなんありますよって言うってくれると思うんですけど、自分から電話して、言うってくれる人はいないですね。もっといろんな人いると思うんですけど、なかなかしりあえないっていうか、その点ラジオカー

乗ると、飛び込みとかでも、農家のおばちゃんに話し聞いたりするんで、意外な人を発見したりはしますよね。今、中の仕事がメインになってるんで、なかなか出会いもないんで。やっぱりマンネリはするでしょう。それをどうにかするために、いろいろ考えるんですけど、なかなか（うまく）いかないですね。

プロのアナウンサーとして気をつけていること

うーん、プロのアナウンサーとして気をつけていること、やっぱり一応何ていうんですか、会社、私がどっかで悪いことしたら、会社の名にキズが付くっていうか、お客さんが来ても、愛想よくっていうのは常に考えてますけど、うーん、それが偽善、偽善っていうかねえ、なかなかまあみんなに対して、ニコニコしてっていうのは、心がけているんですけど、自分がプライベートで嫌なことがあったときとかが、大変ですね。特に放送にある程度出てると思うんですね。前の晩なんか嫌なことがあったとかだったら、多分あんまりしゃべらなかつたりとか。いけないと思いながら、出てしまうという、そういうコントロールができるようになったらいいなっていうのは、すごい思いますね。あとは、体調ですね。今結構崩してる方なんですけど、まだキャリアも浅いんで、寝なかつたりしたら、声が出ないとか、割舌（かつぜつ）が悪くなるとか、すぐ出るんですよ。睡眠不足の悪い影響が。先輩と比べると、先輩は前の晩少々寝不足でも、一定の声が出るんですよ。この幅で。カゼひいたりしたら別ですけど、少々のもんでは、もうだいたい何があってもこうこの幅で、安定性があるっていうんですか、声に。でも若いと波があるんですよ。出る日もあって、出ない日もあって。お酒遅くまで飲んだ、とかによって全然違う。体がまだ全然できてないっていうんでしょうか、先輩は多分起きて、おはようって言ったら、（声が）出ると思うんですね。でも私たちそんなおはようって一言言っただけでは、絶対でないし、発声練習して、出るようにするんですけど、なかなかそれをして出ない。寝起きとか全然出ない。体が寝てる。大学受験のときに、試験の3時間前までに起きるように、とか言われますけど、それと一緒にじゃないですけど。（発声練習は）部屋ではしないですけど、スタジオがありますよね。時間があるかぎりはやったりとか。あと車の中とかが多いです。昔結構ね、（通勤距離が）5キロぐらいあったんですけど、そのときは、多分対向車の方は、何あの人って思ったと思うんですけど、一人で運転しながら。今はすごく近くなったんで、終わらないままに着いちゃう。会社に来てやったりするんですけど、絶えずやっとなきやダメよって言われますしね。多分、何十年とか、かかるんでしょうけどね。まあ、もともと生まれ持ったものもあるんでしょう。けどね、ある程度は、声が出てくると思うんですよ。

失敗について

失敗談ってね、すごいいある、あるんですけど、これ、私、けっこう記憶力っていうか、すぐ忘れる方なんですよ。失敗談。いっぱいありますね。ちっちゃな、本当にちっちゃな、だから、やらなきやいけないっていうか、これは誰が読むっていうのが決まっても、それを忘れてたりとか、本当、大きな失敗っていうのはまだないですね。ちっちゃな失敗が

すごいあるから、ちょっとすぐにごでこない... 申し訳ないんですけど。番組を抜かしたこととかもないですね。それだけ、結構私時間を守るっていうか、几帳面。まだないですね。幸運なことに。でもみんな結構飛ばしてますよね。うん。警報ピーピー鳴ってたりとかして。走っていったりとか。うん。その空白の部分が何十秒か、忘れたんですけど、何十秒かあれば、ピーピーなるんですよ。無音の部分が何十秒かできると。機械が自動判別して。もうとりあえずそれを聞いたら、みんなスタジオに走って行って、そこにある、ま、天気予報の原稿だったり、交通情報の原稿だったり、とりあえずなんか読む。そうすると、まあ、技術の方が、いろいろこうしてすぐ回復したりするんですけど。次のコマーシャルが出たりとか。警報が鳴るとアナウンサーはとりあえずみんな走る。大変ですよー。ぶかっこうっていうか、で、ハアハアいってるじゃないですか。だからなんかねえ、オカシイ放送っていうか、出た者が損っていうか、聞いている方は、誰が本当はしなきゃいけないかったかっていうのは、知らないわけですから、その人が遅れたみたいで、ハアハアいってるし、なんだこいつは、みたいな、損しちゃいますよね。

プロとしての責任について

プロとしての責任ですか？サンデーウエーブより、朝の「えんやこらワイド」の方が、ニュースの枠もあって大変っていうか。その番組の中で、一番しゃべれない時間。寒いですね、暑いですねとかいうときは、何でも言えるじゃないですか。でもニュースってあの総会屋がどうだとか、山一が倒産とかになったら、何を言ったらっていうか、知らないと言えないじゃないですか。朝いつも7時前には来るんですけど、やっぱり寝ないと体調もって思って、夜11時には寝るんです。でもニュース知らないとしゃべれないんで、見なきゃって思って。そしたらもう家に帰ってても、仕事っていうか、絶えず気にしたりとか。あ、これ、今度柿の実がこれぐらいの色になってきたらこうなんだ、とか、いつもこう仕事っていう感覚があって、私結構深く考えすぎてしまうんで、疲れてしまったり、自分の時間が持たないっていうか、そういう時すごい困るんですけど。

ストレスについて

ストレスですか？ストレス発散は、今はできてないですね。どうやって発散しようって考えてる時期なんですけど、家に帰ってもニュース気になったりとかするんで、仕事のことを忘れるために、今日映画見に行こうって思ってるんですけど。こう映画観てる時とかは、その世界に入ってますよね。忘れられるっていうか、仕事とか、嫌なこととか。だから、うん、映画とか観るのが好きですね。以前までは、レンタルビデオ屋さんがとなりのとなりぐらにあって、帰りに行って、週何本も観てたんですけど、今もう何ヶ月も借りて観てない状態で、だからストレスたまってるのかなーとか、いろいろ考えてるんですけど、とりあえず今日はちょっと映画に行っておようかなと思ってます。

これからの課題

これからの課題ですか？そうですね、一人っ子なんで、わがままに育ってるんですよ。で、けっこうしゃべるときも、自分中心に、自分がこうだからみんなこうじゃないかっていうのを勝手に思ってしまうって、発言してしまうんですけど、よくそれを注意されるというか、もっとみんなが、こういう事件が起こったら、大多数の人が思ってるだろうってことを、考えてしゃべりなさいっていうかんじで言われるんで、大多数の人が感じてることを自分も感じて、それを伝えるっていうか。自分のエゴに走っていかないように、こころがけようかなって思ってるんですけど、なかなかうまくいかない。気づいたら、自分中心になってたりするんですよ。アナウンサーはあくまでも伝える側であって、自分がまれな意見を持ってたとしても、あんまり言わない。タレントさんは、いろいろ言ってもすくわれるっていうか、アナウンサーじゃないし、社員でもないし、皆さんに近い存在の目からいろいろ言えるんで、かえってそちらの方が、ものが言いやすいと思うんですよ。ま、社員でアナウンサーっていうのを意識したら、自分の個性をバンバン打ち出すっていうのは、ニュースのときに限ってですけど、皆さんに受け入れられる方を選んでしまうっていうか。ゲストやコメンテーターは、アナウンサーに言えない領域ってあるじゃないですか、そういうのが、担当っていうか、そういう役割。社員、アナウンサーが言えないようなことを言ってもらっていうのが、かなり必要な存在。

Nアナウンサーインタビューについての感想

サンデーウエーブでは最も新しいアナウンサーであるNアナウンサーについては、インタビュー班のみで1度見学させていただいただけだったので、予備知識を集めるために、3人で先生からNアナウンサーの出演している他の番組のことや、サンデーウエーブに初めて出演されたときのことなどを聞いて、できるだけ調査として有効な質問ができるように努力した。

Nアナウンサーが、これまでにインタビューさせて頂いた他の3人のアナウンサーの方たちと違って、インタビューの日を含めてサンデーウエーブへの出演が6回目だったことから、新しい番組に出演するようになるということについて、またどのようにまわりの人たちと番組を作り上げていっているか、進行の手順などはどうやって覚えるのか、などをこれまでと違った方向から聞けるのではないかと思い、質問の項目もそういう要素を増やして作成した。

実際にインタビューをしてみて驚いたのは、Nアナウンサーが全くアナウンサーになるつもりがなかった、ということである。他の3人のアナウンサーの方たちは、大学で放送委員会に入っていたり、専門のアナウンサー養成学校にWスクールしていたり、アナウンサーになるために努力をして、他にも放送局を受験したりされていたが、Nさんは大学時代にやっていたコンピューター関係の会社に内定していたので、「記念受験的な」興味からABC（仮）を受験して、「一般だったら別に、っていう感じがあって、アナウンサーの試験を受けようかなって思ってみたら、こうなった。」という異色の経歴の持ち主だっ

たのである。そのため、他の放送局のアナウンサーの持つ「雰囲気」になじめず、「自分はアナウンサーらしくないアナウンサー」と、アナウンサーという職業の持つ特殊性に悩むこともあるそうである。

ラジオ番組の中にも、アシスタント要素の強い番組や、ディレクターがいないので自分で「好きなテーマで、好きな人を呼んで、好きなふうに時間とか組めて、できる」番組などがあり、番組によって、果たしている役割が違うことについても、教えて頂いた。

ニュースに対しての意見をどう持つかということにも悩んでおられ、ジレンマがあってもなかなか家に帰っても気が抜けないそうである。

話す順番のタイミングについても、私たちが見学していると、とても自然に交代が行われているように感じられたが、「段取りを教えられて、テープ聞いたりして、感じているのをつか」んで、「段取り覚えるしかないっていうか、自分のものにするしかない」そうである。

また女性のアナウンサーが足りない時期ということもあって仕事が忙しく、ストレスの発散がなかなかできず、大変だとおっしゃっていたが、これからも様々な番組でご活躍されることと思う。ありがとうございました。

Kディレクターインタビュー

’ 97 / 9 / 10 ABC (仮) 6スタジオにて実施

Q 入社されたのはいつですか。

A 今3年目だから、90何年だろう、94年の4月、いや95年の4月。

Q 入社試験はどのようなものでしたか。

A 内容とか、難しかった。

Q 例えば。

A 時事問題とか。うん。

Q 面接もあったのですか。

A うん。面接はけっこう難しかったけど、ずばっと「君は法学部だね。」と言われて、「はあ。」と答えると、「ワイマール憲法どう思うか。」と言われて、えーとか思ってね。でもたまたまそれゼミでやってたんで答えたけど。いきなりそんなん聞かれてもなかなかわかんないよなあとか思いながら。けっこう難しかった。

Q 入社試験の準備はされていたんですか。

A うん。放送じゃなくてマスコミに行きたかったから、新聞とかも受けたし。だからまあまあ勉強しましたねえ。でもけっこう好きだったんで、こういう勉強とか。だから苦にならなかったというか。うん。

Q これまでどんな番組を担当されてきましたか。

A うーん、入ったときは“ハリキリワイド”の見習いで、当時“50市町村ふるさとキャラバン”というのをやってて、50市町村をラジオカーでまわってて、そのアシスタントみたいな感じでまわってたんだけど。あと去年ぐらいからワイド（番組を）持ちだして、“土曜ワイド徳島”とか、“あんたが大将”も持ってるんですけど、これはもう入った時からずっと持っていて、“とんでもナイト”もそうですね、入った時の秋ぐらいから任されて。うーん、あと“シーサイドステーション”は今もそのまま持ってるし、“サンデーウェーブ”も。でも去年のほうがもっと多かったですね。去年なんか7つか8つぐらい持っていて、今なくなった番組もあるけど。今5つぐらい持ってますね。

Q サンデーウェーブのことについてお聞きしたいんですが、ラジオ番組中一番困ったこと、ハプニングはどのようなことがありましたか。

A うーん……

Q 例えば、先週のサンデーウェーブでは、モニターが壊れてしまいましたよね。

A ああいうのは、モニターが壊れたというのは前回は初めてだけど細かいアクシデントはけっこうあるからね。こないだ見てもらったディスクファイル、DFっていうんですかね、あ

れが無くなったときがあつて、あのときはバックアップ用に前の前のディレクターがMDでとってたんですよ。だから急遽（録音）素材を全部MDでだしましたよ。あと日曜日とか情報卓っていう部署があつて、日曜日は人がいないんですね、月曜から土曜日までは2人いるんやけど、あ、土曜日は一人か、でも日曜日はゼロというか誰もいないから、大きな災害が起こった場合とか地震とか事故とか海が荒れてて、高速船が全部運休になってるとかそういう時は担当の別なアナウンサーが、本当は別な仕事があるんだけど、そっちにまわってもらつてあちこち電話かけてもらつて情報を入手してもらつたりもしてますけどね。ただ日曜日に関しては僕が持つてからはまだそういう事態になってないんで。まあでも細かいアクシデントはけっこうありますよ。機械の故障なんかはしょっちゅうでもないけど、うん、ちよくちよくね、細かいのはありますね。

Q ではこの前のモニターの故障というのは、すごいアクシデントだったのですか。

A うん。別にでもあれは放送に直接支障がないから、サブとスタジオとの間の関係だから別に問題にはならないけど。まあDFがなくなったとかいうのは問題外で。あの時はちょっと焦りましたね。

Q サンデーウェーブはどんな年齢層のリスナーを意識しているのでしょうか。

A うーん、30代後半から40代ぐらいまでではないかな。

Q そういうことは番組やコーナーを作るときも考えていらっしゃるのですか。

A うん、考えてますね。

Q サンデーウェーブは反省会があると伺ったんですが、そこでは意見のぶつかり合いとかもあるのでしょうか。

A そういうのはあんまりないですね。やっぱりIさん（アナウンサー部副部長）が中心になってるから、僕はディレクターといつてもまだ経験も浅いし、うん。Iさんは他のワイドとかいろんな番組で経験積まれてるし、だからもめそうになった時はIさんが「これはこうだ。」というふうにまとめてくれるんで、そういう意見のぶつかり合いにはまずならないですね。

Q IさんはKさんよりかなり先輩になると思うんですがその辺は一緒に仕事されてて意識されてる部分は大きいですか。

A うん。まあ僕が頼りにしている部分もあるし。それはでもGさん（アナウンサー）にしてもSさん（アナウンサー）にしても同じだし、やっぱりね、Iさんがいないと普通の放送は大丈夫だけど何かこう起こった時にIさんの指示があつたりすると助かるし。そういった面ではすごい頼りになる人ですね。

Q 次にスタジオ設備とか番組作りのことについてお聞きしたいんですが。スポットCMと番組提供の2つありますが番組提供はスポットCMより金額的にどれくらい高いのでしょうか。

A ああ、それわかんない。営業でないかわかんない。うん。

Q プロデューサーというのはいらっしゃるのですか。

A うちはでもプロデューサーはあんまり、まあ一応部長がプロデューサー的な役割なんやけど。だけどもあんまりそういった役割はないですね。

Q CMのこととかスポンサーのことと、それから出演料とかお金の面のことはプロデューサーの仕事ですよ。

A そういう意味で言うならプロデューサーは部長ですね。部長はこれぐらいギャラ出して予算がこれぐらいあるからこれぐらいでいけとかいいますけどね。

Q じゃあ出演料のことはあんまりKさんはタッチしてないということですか。

A 出演料の額とか。額はスタッフの間でこの人だったらこれぐらいかなと決めといて、で部長にこれぐらいでいかがでしょうみたいな感じです。だから最終的に決めるのはもちろん部長だけど最初の段階はもうぼくらスタッフ、もうだからIさんと僕とで決めちゃいますけどね。

Q 出演料に対してご不満はおありでしょうか。以前3分の出演で1万円払わなければならない状況があったと伺ったんですが、やっぱり考えてしまうと思うんですが。

A うん、まあそういうこともやむをえんとか。あれはでもなんであんなったんだろうな。あれはたぶん（聴取不能）週間の時だったと思うんですよだから特別に予算も出るから、ほんまは記念品だけで済ませる予定だったんですけど、たまたま（聴取不能）週間で、部長がねもうちょと出したれみたいな感じでなんかそういうことになっちゃって、結局そんな額が出ちゃったけどね。だから普段はあんなことないんやけど。たまたまだね。

Q レギュラーとゲストの出演料の違いはどれくらいなんですか。

A いや同じくらいだとは思いますが。

Q 例えばK氏のようなコメンテーターと電話で出演される方、例えばサンデーウェーブでは各地の天気出演される方がいますよね。

A 各地の天気とかは2000円かな。電話のは2000円か3000円くらいだったと思う。

Q スタジオのことについてお聞きしたいんですが。設備で使いにくいところはありますか。

A 下（1F）のスタジオに関して言うとインターネットがほしいんですよ、あそこは。

Q それはどうしてですか。

A 例えば急に資料が欲しくなったときに今だったら二階のアナウンス室の裏に本棚があるんですけどそこまで百科事典とか、誰かアルバイトの子に走ってもらってちょっと取ってきてとか調べてとかコピーとってきてとかってということになるけど、スタジオにあったらねえ、ぱっと調べてぱっともう見ながらしゃべれるし。あったらいいなと思ってるん

ですけどねえ。まあ設備はまだまだ。下のスタジオとか全然だめだと思いますよ。

Q 本で読んだのですが、生ワイドをするには決まった調整卓やモニター何台とか言うふうにある程度基本的なものが揃っていないと生ワイド番組はやれないとかやりづらいというふうに書いてあったのですが。私が見た感じでは、揃っているのかなあと思ったのですが、たとえばサンデーウェーブを放送する時に機材の不足は感じられますか。

A だいたい狭いしねあっこ。機材にしたってちょっと古いと思うしね。でね、下のスタジオに関して言えば録音するスタジオであると同時に生放送するスタジオでもあるわけだし編集するスタジオにもなるわけだから、やっぱり放送は放送するスタジオであってほしいし、別に編集するスタジオとかあったらいいですね。うちスタジオが少ないんですよ。だから編集しようと思ったときにもうスタジオがいっぱいになっててできないとかあります。しょうがないから夜まで待とうかみたいな感じで、結局夜まで待って、それで超勤つけようと思ったら部長に「何だこの超勤は」と言われて。ほんなんあるわけ。

Q 専用のスタジオがあったらいいですね。又、いい機材も必要ってことですね。

A うん。ここのスタジオでも最近DNが入ってMDが入ってちょっと揃いだしたけどまだもうひとつだね。

Q 番組中のアナウンサーとの連絡の仕方についてお聞きしたいのですが、これは緊急時にはどういうふうになっているのでしょうか。例えばモニターを見るようにしてるとかコーナーの切れ目切れ目にはKさんの方をアナウンサーの人は必ず見るようにするとか決まっているのでしょうか。

A 決まってる訳じゃないですけど見るようにしてますよね。別にそうしろって教えられた訳じゃなくて、やっぱりスタジオとサブとがコミュニケーションとれてなかったらぎくしゃくすると思うし。だから先輩のディレクターから言われたのは絶えずスタジオのほうを向いてろって言われたんですけどね、例えば素材出すときもDFとかあるじゃないですか。それでどうしても後ろ見ちゃうじゃないですかガチャガチャしながら。それを見るなど、できるだけスタジオと目を合わしながらアナウンサーのほう向きながらチラチラとこう合わせるようにしろと。そういうこと言われましたね。

Q つまらない質問なんですけど機材の使い方は入社してから覚えられたんですか。

A もちろん。

Q ということは入社されるまでそういう機材についての知識はなかったのですか。

A ぜんぜん。うん、みんなそうだと思うけど。

Q 専門学校というのは。

A ああ、ありますけど、うちはたぶんそんな人いないと思いますよ。

Q 皆さん入社してから覚えられるんですか。

A そうですね。もちろん機材にしてもそんなに専門的にやるわけじゃないじゃないですか。技術さんみたいにイコライザーとかしょっちゅういじってやるようなんじゃないからね。まあ入ってからでも十分いけると思いますよ。

Q 次にラジオの置かれている環境についてお聞きしたいんですが、AMの受信環境が悪くなっていると聞いたんですが。FMに比べて音質的にもきついですよね。

A ああ、そうですね。まあこれはしょうがないと思う。FMには絶対勝てないし、だからFMは地域が狭いじゃないですか、まあ802（FM802＝大阪のFM局＝のこと）とかは結構いけますけど。やっぱりAMは広域で聞けるし聞ける世代層もだんぜん多いし。でも若い人中心に離れていってるのはつくづく思いますね、うん。

Q やっぱり音楽番組はやりにくいですかね。

A やりにくいってことはないけど、でもどうしてもFMを意識してしまいますよね。AMなのにこうなんかDJっぽいしゃべりでこうかっこよくやろうとしてしまいがちですよね。AMがFM化していきそう、寄っていったような。まあどこの局でもそんな傾向はあると思うんですけど。

Q ABC（仮）は今ワイド中心のプログラムですよ、あと天気予報とかニュースとか、やはりワイド中心というのは仕方のないことなんでしょうか。

A うーん、まあ今の流れだったらね。

Q そうすると先程話に出たんですけどアナウンサーがパーソナリティー化してしまうということが起こってしまうと思うんですが、そのへんはどうでしょう。

A うん。それねえ、まあそれはそれでいいんじゃないですかねえ。例えば“とんでもナイト”っていう番組なんか2人だけの、Sさん（“サンデーウェーブ”出演のアナウンサー）とE.Yアナウンサーのほとんど2人だけのしゃべりで1時間放送してしまうんですけど、あれはあれでなにかパーソナリティーのよさっていうのがでると思うしFMにはないAMの強みだと思いますしね。そのパーソナリティーの強みを生かしてるっちゅう点でいいんじゃないですかね。

Q サンデーウェーブに新しいコーナーや新しい企画があったら教えてくださいませんか。

A うーん、今考えてるのは“大人のための通講座”っていうか、より洗練された大人になるためのとあって、対象は大人なんですけど、ワイン講座とかカクテル講座とかチーズ講座とか、なんかシリーズでやろうと思ってますけど、その世界の専門家を呼んで来て。

Q それはKさんのお考えですか。

A ええ、そうだったですね。

Q Kさんが企画をお書きになって企画会議に持っていきますよね。だめになった企画とかあったんですか。

A うーん、あんまりオレ企画出してないからね今、まああったんでしょけど、なんだろうなあ、いや何個かありましたけど忘れちゃいましたね、どんな企画だったかは。でもたぶん「こりゃだめだ」っていわれるような企画だったと思いますよ。

Q SアナとかIアナも企画を持ってこられるんですか。

A ええ、そうですね。

Q アナウンサーが企画にかかわっているというのは、とてもいいことだと思うんですが、他局はそういうことはあまりないのでしょうか。

A あるんちゃうですかね、やっぱり。別にディレクターだけが企画考えるっていうふうに決まってる訳じゃないし、いいと思ったらみんなが考えて持ち寄って決めたらいいし。うん。そう思いますよ。

Q サンデーウェーブ以外でこれからやってみたい思っておられる企画はありますか。

A うーん、こないだ民間放送連盟で中四国の大会に行っただけですけど、南海放送だったか、グラフ部門で“オーロラになったサムライ”っていうラジオドラマがあったんですよ、それすごいよくできてて、アナウンサーがせりふ読んで、で効果音とか入れながら音楽とか入れながら。ラジオドラマって聞いたことがありますか。

Q むかしはたくさんあったって聞いたことがあります、でも今は少ないんですよね。

A ええ、少ないですよ。それ一回作ってみたいなんて思って今考えてるんですけどね。

Q でもそういうのって視聴者が集中して聞くことが要求されるじゃないですか。

A うん、あんまりリスナーにはね。あんまりうけは悪いんですよ。ああゆうんってだから営業的にもなかなか売れないし、まあドキュメンタリーみたいなもので、うん。でも、まあ一回作ってみたいなあと思っているんですけどねえ。うん、それからドキュメンタリーも作りたいし。

Q その時にやっぱりこう音だからできることをめざすって感じになるんですか。

A そうですね。はい。

Q その画面がなくても……

A そう表現できるものっていうのは絶対あるはずだし……

Q そうすると今作っていらっしゃるサンデーウェーブも部分部分はそういうのを実はねらってらっしゃるんじゃないかと思うんです。“A子のワンダフルピープル”もこう音だから、つまり画面見てたらこうどんくさそうな人かもしれないんだけど、ラジオ聞いてると、すごいどれも奥が深そうな人に聞けて、実に成功してるように思うんですけど。そういうねらいはおありになるんですか。

A ねらいはどうなんでしょうね。あれ僕が持つ前に、だいぶん前からっていうか最初からあるコーナーですし、でもそういうねらいもあるのかなあ。

Q 編集の時に誰かが助言なさったりするんですか。それとも全部Sさんがおやりになるのですか。

A ええ。実はいま全部Sさんがやるんですよ。でまあ仕上がりを土曜日の深夜にだいたい聞くんですけど。聞いていながら先週ちょっとね、出しミスがありましたけど。

Q “ワンダフルピープル”や他のコーナーをチェックされるときに、例えば「こういうふうになれば」とか「ここはいけない」というふうに言われたりするのですか。

A うーん、でもそういったことってあんまりなかったですねえ、今まで、うん。

Q 以前のディレクターの方は、バンバン言い回しを注意なさっていたとお聞きしたんですが。

A ああ、前のディレクターはアナウンサー出身の方で、だからそういう、表現にはうるさいというかね、まあよく気が付く人だったんですけど、ぼくはなかなかそこまで気がつかないですよ。そういえばそうかなっていうぐらいで。

Q そういうのもディレクターの役目なのでしょうか。

A まあそうですね。ほんとはそうですね。

Q イヤホンをアナウンサーの方がしていらっしゃいますけどGアナウンサーはしてませんよね。

A うん、あれは、ここですか、これは(ON AIR)です。だから自分の声が聞こえないと喋りにくいという人もいるし、アナウンサーによってボリュームとかも全然違うんですよ。めちゃくちゃ大きくしてないと不安になる人もいるし、E・Yさんなんかはもうめちゃくちゃボリューム最大限にせんと不安になる人でしゃべれん人で、Sさんなんかは低くしないと自分のしゃべってる声と聞こえてくる音のこうバランスっていうんがある程度似てないとだめな人もいるしGさんはぜんぜん気にならないということだと思いますね。でもこれしないとトークバックていって向こうからスタジオに喋った時の声が聞こえないこともありますし、もちろんスピーカーから出るトークバックもありますけど放送中なんかはもうスピーカーから出すより、トークバックだけで「CDとぼしますからね」とか「次、天気予報いって」とか言うときは、そういう時はGさんだったらたぶん聞こえないですけどね。うん。まあGさんが進行するってことはサンデーウェーブに関しては多分ないから、それはそれでいいのかもしれないですけどねえ。

Q 前回の最後ですねえ、なんか時間がおしることをKさんが心配なさっていて、行き違いがちょっとあったというか、伝わらなかったように思うんですが、そもそもGさんがニュースを読みますよね共同通信の、でニュース読み始める直前にIさんの方を見て、でIさんがうなずいて、それでGさんが続けてニュースを読んでるっていうのが録画にあるんですが、あれはIさんがトークバックを聞いていて例えばKさんからニュース1つとぼしてみたいな指示があるということを確認するというような振る舞いなんですかねえ。

A あの時指示はだしてません。

Q そうすると（今回は）指示はだしてないけれども、Gさんは自分がトークバックないから見るわけですよねIさんを、それ（でもKさんが）だすこともありえるのですか。

A もちろん。もちろんあります。

Q ニュースって、あそこにあるのは、重要順ですよ。

A そうです。

Q そうすると最後「1つ落とせ」とか「2つ落とせ」という指示になるのですか。

A もちろん、そういう時はそういう指示になりますねえ。

Q でもそれをGさんに対して口で言ったらマイクに入っちゃいますよね。今回はそのまま続けてうなづけばよかったけれども、「落とせ」と言うときはどうやれば落とすことができるんですか。

A うーん、Gさんしてないから、やっぱIさんを通じてになりますね。

Q IさんはどうやればGさんに伝えることができるのですか。

A えーだから3つニュースの原稿があるとしたら1つめを取り上げるというか、もうこれはいってというふうに。

Q 1つめはでも重要なニュースですよ。

A そうです1つめは。だから多分並べてあると思うんですよ、上から順番に重要な順に、だから3番目の比較的重要なじゃないニュースを抜くか、まそういうことですね。

Q まあ確かに（朝イチで読んだニュースの）繰り返しもありましたね。

A ええ、そうですね。

Q じゃあ中の進行はおおむねIさんがやってるということですか。

A そうですね、はい。時間調整もIさんが冷静に見てるとおもうんですよ。

Q そのKさんが気にしていらっしゃった、そのつまりGさんが（“ティーブレイク”での学生への）インタビューの時に時間をたくさん使っちゃったっていう時にIさんが止めなかったのは、何か行き違いがあったんですか、Gさんとは。Iさん別に止めてないですよ。

A ええ、あれはあれでいけると思ったんじゃないですかねえ、Iさんは。

Q その前にもう1曲とばすって指示はIさんにしてるんでしょ。

A しています。はい。

Q じゃあIさんはそれを計算して1曲とばすならまだ2人目のインタビューしても大丈夫というふうに思っていたのでしょうか。

A そうですね。

Q でもKさんはそうは思っていなかったと。

A はい。

Q 2人目の（学生への）インタビューはしないか短くするかと。

A ええ、そういう行き違いはあったかもしれませんがね。うん。

Q たいへんですね。

A まあ、でもそういうのは、まあきっちり伝わるといのはなかなかありませんからねえ、ええ。

Q 緊急の時に一番速く、一番強い伝え方っていうのはあるんですか。モニターが速いとか言うのが速いとか。

A それなら言うのが全然速いですね。だから生放送中に指示出す時は、スピーカーからださずにイヤホンだけで「次、天気」とかもうそのまま言いますからねえ。だから下のスタジオだったら、あのトークバックありますよね、トークバックでセクターがあるじゃないですかイヤホンとスピーカーからでるやつと…

Q マイクチェックの時してらっしゃるやつですか。

A そうですかねえ、ええそうですかね。うん。スピーカーとイヤホンだけを選択して、向こうから聞こえてくるように「次、天気」とか「次、電話OK」とか言って。こういうふうにしたらもう一番速いんですけどね。モニターとかだったら見ない人もいるし、横向いてる人もいるし。そりゃやっぱりこれが速いです。

Q 話が変わるんですが、Qシートの用語について3つほどお聞きしたいんですけど、ジングルってうのは番組が始まる直前にその番組の宣伝っていうか、サンデーウェーブだったら「なんとかなんとかABC（仮名）サンデーウェーブ」っていうような番組の直前に流れるものって聞いたんですけどそのようにとらえてよろしいんですか。

A うんジングルはもうちょっと意味が広いというか、流れを変える時とかにまあよく使うんですね。これは“ウェーブネットワーク”に入りましたよっていうジングルですね。「ウェーブネットワーク」っていう。でCMの後に一番最後に流れてくるのが、

Q 「STUDIO 3 ABC（仮）」っていうやつですね。

A そうですね。あれがまあ正式なジングルなんですけど、あれはでも、どういったらええんかな、あれはお聞きの放送はABC（仮）のサンデーウェーブですよっていう意味のジングルですね。他にもジングルはいろいろあって、例えば電話インタビューばかりでくる時とか話が続く時とかあるじゃないですか話がずっときてて、でまたこっちの後半部分で続きの話を聞かなきゃいけない時、そういう時は、まあジングル一本うって、ちょっと流れを変えて、また話を聞くっていうふうな。だからまあ曲がわりと言ったらおかしいですけど、まあちょっとほっと一息みたいな。何かそういう合図的なものと捉えた方がいいと思うんですけど。

Q その時に曲がわりに流れるのはどんな音が流れるんですか。

A といいますと。

Q ほっと一息の時などはどんな音なんですか。

A ジングルもいろいろ5パターンあるんです、サンデーウェーブだったら。これは前のディレクターが作ったやつなんですけど。

Q どれを流すかはどうやって決めるんですか。

A ええ、これはもう“ウェーブネットワーク”のジングルですから、これテーマみたいなもんですよね。だからサンデーウェーブで流れるそういう意味の正式なジングルっていうのは、やっぱりCMの後で流れる分だと思えます。

Q それが1パターンで残り4パターンあるわけですか。

A ああ、ありますねえ。

Q そのうち残りの4つのうちの1つが「ウェーブネットワーク」というジングルなんですか。

A いや「ウェーブネットワーク」はジングルはジングルでもその5パターンとは別のものです。

Q さらに別なわけですね。

A はい。

Q SBですけどこれはステーションブレイクの訳で、例えば10時にそごうが開店するから10時にそごうのCMを流すってことですか。

A この10時のステブレっていうのはちょっと意味が違うんですけどね。ほんとは時報の前にくるのがだいたいステブレなんですけどこれは特別な流し方で10時からそごうが開店するからあえて後ろに持ってきてるんですね。ほんとは時報前ぐらいにもってくるんですよね。でもうちは10時からの“えんやこらワイド”とか“土曜ワイド”とかでもそうですし“サンデーウェーブ”もそうですけど、それは特別なステブレで、ほんとの意味のステブレとはまた違うんですけどね。ステブレ契約金はどうなのかちょっと分からないですけどPTとかと同じように差がついてると思うんですよ、スポンサーから貰えるお金に。

Q これはランクとしてはかなり上のCMになるんでしょうか。

A そうだね、時間が決まってるからね。

Q J&BGはよくわからなかったんですがこれはどういうことなんですか。

ジングルアンドピージーですか。ここですかね。これはですね、まあこれはもう意味ないですね。これはジングルレベルっていうかテーマレベルのフェーダーにあわしといて、でSさん天気予報、今日の気象状況管理士さんからです、でBGニュース上げるという技術さんに分らせるためのもんなんですよ。だから最初テーマレベルにあわしといて、つまり最初からBGって書いとくと技術さんがBGレベルで最初からだしちゃいますから。

Q それ音量のことですか。

A うん。音量のこと。だから最初ちょっと大きい音で聞かして、Sさんがしゃべってこう下げるといふ、こう技術さんのための合図ですね。

Q 聞かなきゃぜんぜん解らなかつたです。

A これは多分僕だけだと思ふ。

Q そういう工夫がおもしろいんですよ。

A だから他のディレクターが見ても「なんだこれ」って言うようなもんだと思ふます。

Q 他のディレクターには解らないけど技術さんには解るといふことですよ。

A ええ、そうですね。本当のこと言うと《テーマアンドビージー》とかにした方がいいんですけどね。“ウエザーインフォメーション”はもともとコメントがあつたんですよ、先生の。

Q ほんとですか。

A ええ。だからそうなつてたんですけど、今これ変えちゃいましたからね。だからほんとにはテーマアンドビージーの方が正確といへば正確。あえて言うならですよ。テーマレベルでだとしてBGはいるといふ。

Q “ウエザーインフォメーション”のところにJ&BGと書いてありますが、これはほんとにはテーマ&BGと書くべきだといふことですか。

A ほんとにはそうですね。

Q テーマ&BGと書くのとジングル&BGと書くのでは何が違うんでしょうか。

A うーん、なんだろうな。ジングルってことはやっぱりだいたいコメントが入つてますよね。

Q テーマは音楽だけでジングルといふのは人の声が入つてないとジングルといふ言わないんですか。

A 正確にはどうなんだろう、でもジングルといふのは普通入つてますね、どれも。

Q 「ABC（仮）」とか「サンデーウェーブ」とかなんとか。

A “土曜ワイドとくしま”とか“えんやこらワイド”ですとか、音楽だけのジングルは聞いたことがないですね、やっぱり。

Q といふことは前のディレクターからこう書き方が引き継がれているといふことなんですか。

A ぼくがこれQシート作つたんですけど、前のディレクターは古いQシート使つてましたんで、僕が新しく作り直したんですけど、なぞですね。これはなんでしょうね。だから多分昔用のコメントが入つてた時代からこれ書いてて、で5月くらいからテーマ曲変えたんでそのなごりなんですよ。

Q つまり5月以前は人の声が入ってた。

A はい、そうです。

Q うちにここにいないけどそういうことを分析するのが好きなM君て子がいてですね、「9時18分のジングルはジングルが鳴っていない」と「これをジングルっていう理由が解らない」と主張しているんですが。

A そうですね。これもジングルじゃないということよですね。

Q これを機械の人が見て解らないと質問に来るっていう打ち合わせの時間が前もってあったりするんですか。

A それはないですね。

Q 機械の人は見れば解るといことですか。

A ええ。サンデーウェーブのみなさんは長いですから。技術さんも持ち回りでずっと回りますから、僕より長い人いますからね。だから解ってますねえ。

Q 機械の人は交代交代でいらっしゃるんですか。番組の中でも変わってらっしゃいますよね。

A そうですね。9時30分から変わりますね。

Q あれは指名とかできないんですか。

A もちろんできません。あれはもうローテーションで決まってて技術運行部の中で決まってるもんですから、だから9時30分から誰が来るのかそれもわからないですからね。

Q じゃあ打ち合わせもなにもないわけですね。

A そうね。例えば“サンデーワンチャン”とか“サンデーコンサート”とかちょっと外でやる時はもちろん前もってやりますけど、この“阿波の歴史シリーズ”とかだったらスタジオに先生がきてしゃべるだけだから、特にカウンターの動きがないので、普段どおりということをやりますけど。

Q ABC（仮）の場合はあまり他局との競争がないと伺ったのですが。

A そうですね、いいことではないと思いますよ。

Q 例えばある局では視聴率が壁にズラーっと貼ってあるらしいですね。

A まあ、それもそれで僕はあんまりいいことじゃないと思うんですけど。でも競争がないってのもねえ、やっぱりのほほ〜んとしてしまうしね。そうなるあんまり新しい企画考えてどうこうやろうという勢いがおこらんし。それはそれでいかんことやと思いますよ。ただ視聴率、視聴率って騒ぎ過ぎるのもどうかと思いますけどねえ。

Q 難しいところですね。

A うん。

Q そのSKY B でしたっけ有料電波だけ音だけ流していたりしますが、ぜんぜん競争相手じゃないわけですか、あんなの。

A どうなんでしょう。まだそこまでだれも意識してないんじゃないかなあ。

Q 新聞報道によれば、しばらくすると、衛星ラジオ放送ネットがくるそうですね。2007年には。

A はい。うーん、あれでも怖いですねやっぱり。

Q 車の人は簡単に聞けるわけですからね。あれは有料放送ではないですよ。言ってる事聞くと。

A そうですね。無料になると思いますね。

Q じゃあ全国の地方ラジオ局はどうなっちゃうんでしょう。

A そうなんです。地方は地方独自の情報があるとか言ってますけど、それも怪しいですね。まあみんな全国の東京のね、あっちの方が内容的にも濃いですし、おもしろいですし、まあ脅威ではありますよね。

Q じゃあ時間も過ぎたようなので、ありがとうございました。

A ほんとにわかりましたか。なんか支離滅裂のような、なんか不安だなあ、僕。

Q いえ大変参考になりました。ほんとにありがとうございました。

A いえいえ、こちらこそ。

Kディレクターインタビューについての感想

このインタビューは約1時間にわたって行われた。話は入社から現在までのKさん自身のことになり、サンデーウェーブのこと、専門用語の説明、そして現在のラジオ環境にまで及んでいる。とても中身のある話が聞けた。

アナウンサーとコミュニケーションをはかるために、常にスタジオの方、つまりアナウンサーの方を見ており、時間がおしたりしていると“曲カット”とかの指示を出すのだが、そういう「時間おしてるな」とかいうのは、アナウンサーも分かっているから、そこでディレクターがどういう指示を出すのか見る。ディレクターとアナウンサー、どちらもが常にお互いに注意を払っており、それはもう暗黙の了解で番組が成り立っているのである。ディレクターの指示をイヤホンやモニターで伝えるのだが、ディレクターの意図している指示がきちんと伝わるといってはなかなかない、と言っていたがそれでも番組がスムーズに進行するのは、やはりIさんがスタジオ内での時間管理をしているからであって、Iさ

んの存在の大きさ（決して欠かすことのできない存在）がここでも伺われる。

『放送ハンドブック』等には、最近ではパーソナリティー化して生ワイド番組が進んでおり、アナウンサーが企画を出したりしてディレクターの役割を兼ねたり、機械操作が簡単になったため、ディレクターが機械操作も兼ねたりといったように、アナウンサー、ディレクター、機械操作をする人の区別がなくなってきた、と書いてあった。ワイド番組が中心となると、ライブ感が重要になり、となるとパーソナリティー中心になるからで、‘東京や大阪ではパーソナリティー化が進んでるけどどちらローカル局だからそこまでいってない’みたいなことをABCのアナウンサーは言っていた。こっちは（徳島）競争も激しくないから、生番組ワイド化もそんなに進んでいない。だから、ディレクターは、ディレクター、機械操作する人は、機械操作する人というようにはっきりと分かれておりディレクターは機械操作は全く行っていなかった。

サンデーウェーブの中の、“吉野川紀行”の編集は、以前はGアナウンサーがしていたのだが、ディレクターが変わって、Kディレクターになってからは、「自分がやりたい」ということでKディレクターが担当しているという。それはすごい意気込みというか、やる気がみられる。それでこれから作ってみたいもので、ラジオドラマを挙げているが、ラジオドラマはリスナーに集中力を要求するからリスナーうけは悪い、ということを知っているにもかかわらず、それを作ってみたいというKディレクターは、自分の腕試しをしようとしているのではないか。“ラジオ”っていう、音だからこそ表現できるものを求めて、大きく言ってしまうと“夢”みたいなものをいつまでも持ち続けて欲しい。そうすることによって番組がどんどんとよりよいものになり、また自分自身の向上へとつながるだろう。ありがとうございました。

コメンテーターになったきっかけ

コメンテーターになったきっかけですか？えっときっかけはですねー、あのー徳島大学総合科学部H先生に紹介されて今年の12月の、えーすいません、日曜日はカレンダーで見てもらえば分かるんですけど、1日か、2日。1週目にあのー、最初に出て、その後都合がつく限り向こうのお誘いには応じるということで、今、コメンテーター4人レギュラーがいますので、えーだいたい4週に1回、月1回のペースで出てます。で、これはあのー、自分で確かめたわけじゃないんですが、由来に関してなんですけど、昔徳島大学にあのーT先生っていう先生がいて、社会学の教員で、今私のいる、あのー1号館の2Fの中棟の1224室にまえた先生なんですけども、T先生がまえ朝日ジャーナルの編集長で、そのー何ていうんですか。そのーマスコミ人といいますか、えーこういうのを何ていうんでしょうか。えーマスメディアの人だったので、それであのーそういう関係が生まれたんだと伝え聞いております。もうすこし詳しくいいますとO先生がいた時にはO先生も出ていて、T先生も出ていて、で、OさんもTさんもいなくなったんであれなんですよー。そのー窮屈になるわけですよ。そのー日曜の朝起きるとね、日曜が休日でないみたいになっちゃいますから、交替交替で出ようということになったのだと思います。

以前もラジオ番組に出演してたかどうか

以前はこういうラジオ出演（レギュラー）はやってなく、あのー皆さんがお出になるようなかんじでゲストとして出たりしたことはありますけど。あと、テレビには1回出たことがあります。1回かな？1回だけですかね。ずいぶん前です。15年ほど前ですけども。高校3年の時ですけど、テレビ朝日という局がですね、花園大学で初めて入試問題をマンガを込みで出した時がありまして、それを、そのー扱った時にあのー上野高校の人たちと一緒に、自分は都立青山高校だったんですけど、高校生代表ということで、コメントしたことがあります。学内の番組とかなら他にも出たことがあります。

コメンテーターの役割についてーその(1)ー

コメンテーターの役割ですか？2つあって私が他のコメンテーターと違った役割、もう1つは番組の中でコメンテーターが期待されている役割。始めのからいいますと、私はさっきも言いましたように、去年の10月に初めて徳島に来ましたので、非常にくだらないんですが、部外者としてのコメントを言える立場なわけですよ。で、皆さんその新聞等を読んでもお分かりのように、そのー、外国人は日本についてむちゃくちゃいう権利があるじゃないですか。部外者として。おおむね間違ってるんだけど、みんな、まあーそういう面もあるかって思って聞くわけですよ。徳島県民ではないという扱いをされてまし

て、他の県では違うとか、東京では違うとかね、そういう言い方を要求されることがあります。「東京のことは長年住んでお詳しいでしょうが、例えばどうでしょうか。」とか。例えば（1997年の）4月末に出た時には徳島の道路交通に関して、信号機が黄色で点滅してるじゃないですか。赤-青-黄じゃなくて、黄色点滅-赤、黄色点滅-赤、の2種類ですよ。ところどころ。あの一全部じゃないですけど。それはその、危険だと主張しましてですね、黄色で止まらない習慣がつくって。まっ、身勝手な意見ですけども、なにも証拠もなくいってるんですけど、自分がそうだって。半年の間にだんだん。始めは黄色でブレーキふんじやうわけですよ。黄点滅で。でも、他の（車は）全然どれも止まんないんですよ。青と同じでつばしって言って、自分もだんだんそうなって、普通の信号、つまり、赤-青-黄になる信号でも黄色でとつばするようになってちやうですよ。あの一、徳島県の車あれですよ、赤でも突破してますよね。赤の初めの3秒くらい。で、危険だ、なんていうときに、「他の県では違う」。でも、そうするとこれ嘘なんですよ。あの一、全国50都道府県のうち多分隣の県、香川県も黄で点滅してるんじゃないでしょうか。その一何県かはあいう方式をとってるんですよ。でも東京から来て、東京はそうでないという言い方で、他の県では違うっていう、そういう意見はなかば要求されているという。えーくだらないことを言わないように気をつけながら、なかばそれによって、言いたいことを言っているということですね。

コメンテーターの役割について-その(2)-

もう1つはあの一この間徳大の学生さんと一緒にIさんのインタビューにいったんですけども、その時にIさんが言ってたように、基本的にコメンテーターには一般人的意見とは違うことを言ってもらって、一般人的な感想はアナウンサーが実感的にフォローするっていう、そういう組合せで番組ができています。従って、その一、辛口っていうかあの一、気のきいたこととか、人と違ったこととか、そういうことを言うように望まれている。そういう2つの側面がある。今ほどIさんの意見を紹介して違った発想をとるって言ったんですけども、コメンテーターとしてはそれはその一ガス抜きというかですね、その一、あまり知的な進歩がないっていうかですね、よいやり方じゃないって思ってるんですよ。だってAという意見とBという意見があって対立してますね。でも、Bという意見の人もAという意見があるということをその一、心得ていましょうねっていうのは、その一、そのこと自身が人々の実感そのままであってですね、ガス抜きであって、人をその一、新しい世界には導いてはくれないというふうに思っていて、古い言い方で弁証法っていう言い方があるんですけども、AでもBでもなくて、C、新しい言い方をすればポストモダン、あるいはその一、脱構築っていてもよい、あの一つまり、人々がA対Bっていう枠組みで考えているときに、その外側の意見をなるべく言うように自分は心掛けていますけど。つまり番組に出ることは私にとってたいへんよい経験なのです。私もまた日常生活を基盤として人々と同じ世界に生きていてA対B、例えば「厚生省は悪い」と、「厚生省はあやまって叩かれるほど人々に期待されている」というね、「厚生省汚職問題」では、そういう2つのよくある意見の対立のどちらかをもってるわけですよ。で、なるべく、そういう、その一、常識的立場を越えた問題の把握の仕方をしようと思って、朝8:30に打ち

合わせに行きますし、ひどい場合には、聞かれた瞬間に、そういう時の、その一、常識的な答え、AでもBでもない別の枠組みの答え方をしようと瞬間的に考える。簡単に言えば“あまのじゃく”なんです。けども、あまのじゃくは別にその一、市民の人と違うことを答えるっていうそういうあまのじゃくじゃなくても、問題の枠組み自体を作り直すようなですね。例えばさっきの厚生省汚職の問題でいえば、当然その一、厚生省が良いか悪いかの外側に私たちが政治をです。その一、小さく矮小化して、官僚主導で国家体制を作ってきたっていうことがあると思うんですよ。で、厚生省なんていうのは、ずっと二流官庁でね、財政的にも弱いし、あの一スーパーエリートは大蔵省いっちゃうし、暗い気持ちで仕事している人たちだったんですけど、その人たちがたまたま、老人が増えて、社会保険費が増えて、日本でその一省庁が扱うお金では今 トップになってるんですよ。他の省の予算よりも、厚生省の予算が、20省庁で一番多いんですけども、あの一そういうその一主要官庁になってしまったという問題が、それにその、厚生官僚が文化的に蓄えてきたものが追いついていないっていう問題があると思うんです。だから問題を良い悪いじゃなくて、そういう政治と官僚制度問題、あるいは同じ官僚制度の中でも誇りある大蔵官僚、そんな500万や1000万(円)おごられたからって、おれはその一自分の使命をゆるがしにしないんだって、大蔵省の人は伝統を作ってきたわけですよ。あの人たちは接待で何十万円の夕食を食べても、そんなことは先輩もずっとしてきて、自分たちもしてきてそんなことで、おれたちの判断はゆるがないんだと自負を省庁で作ってきたわけですよ。厚生省にはそんな自負がないんですよ。今までそういう接待を受けてこなかったから、そういうその、省庁文化問題ってな形で、なるべく新しい問題を提起するようにしてるんです。

厚生省ネタが多いわけ

えー先ほど厚生省の話をしましたけど、私が厚生省ネタが多いのには背景があって、知られていないんですが、私、厚生省史の研究というですね、その一文部省科学研究費の研究をずっとやってたんですよ。3年計画で。だからその一厚生省史ってね、厚生省ってできて、昭和13年にできて50年経った時に50周年記念事業で厚生省史作ったんですよ。すごい分厚い本で。多分全国の研究者でそれを通読した人っていうのは50人いないと思うんですけど。その一50人中の20人が集った厚生省史の研究っていう文部省科学研究費、その一複数の大学の研究者が集まって3年計画でやる研究費のメンバーだったんで、その一、素人じゃないという自覚はあって、あの一、えっともうすこし言うと、社会学で社会福祉やってる人はいっぱいいるですよ。けれども、そういうときにそういうね、省庁の側の資料をちゃんと読み込んでる人はほとんどいなくて、というのは、社会学っていうのはその一、社会運動の味方として活動してた部分があってですね。その一、生活保護をもっとよこせとかですね、肺結核の人にもっと無料補助をしるとかですね、社会運動の人に寄り添って社会福祉問題ってのはこう一、社会学者は多いんですけども、私と私の指導教官であった社会学の教員はそれをその一省庁側、役人側から分析する必要ってのを訴えていて、というのは、その背景には日本の国ってのは官僚が支配してるんだっていう前提があるわけですね。運動なんていうのはその、官僚がそこからその一、ある立場をく

みとれるならくみとる形で利用してるだけで、実は官僚主義でやってきたという国家に対する理解があるんですが、それでやってる数少ない、その一、役人組織側から研究してる数少ないメンバー、のうちの一人、同世代では私しかいないという自負で、それは積極的に発言するようにしてます。リスナーに知ってもらおうっていうか、みんなね、知ってはいると思うんですよ。その一、役人が有能でね、役に立ってる人で、汚職の人がいるなんていうことでね、日本のその一官僚機構がね、全体が腐敗しているわけじゃないなんてことはみんな知っていて、話題にしないじゃないですか。だからその一、問題は、知った上で先を考えることであってね、その一汚職の人がいて汚職の人が悪いとかね、それがその一針小棒大にいわれてなんか厚生省全体が悪いみたいというのは、その一我々の欲求不満解消にしかなくなくて、なんらその一省庁改革の話になんにもつながっていかないと思うわけなんですよ。だから知ってもらいたいっていうのは嘘なわけ。みんな知ってるのに、なんでその一知ってることをもとにね、まじめに考えようとしななんだと。その一大声で人を非難するとき気持ちいいじゃないですか。その場のその気持ちよさばかりを求めて、その一人々もそのマスコミもですね、その場限りの議論をしてるのが不愉快だから、だから半分はマスコミ人向けに言ってるんですよ。ということなんですけど。

一番最初のコメンテーター出演で困惑した点

一番最初のコメンテーター出演での困惑ですか？困惑はいくつもあって、うまくいったことも、困惑はあったけれども、うまくいったこともうまくいかなかったこともあるんですけど、基本的には慣れていないので震えてしまう、緊張してしまうということがあって、えーっと、いやー、昔はもっと根性がある人間だと思ってたんですけど、最近、学会とかで質問すると自分の声が震えてるのが分かって、いやー、ナイーブでかわいいんだなーなんておもっちゃうんですけど。僅かに声は震えていたと思いますね。けれども2回目からは震えなくなってそれはその一、最初自分の声の震えをいかにおさえて発話するかっていう、震えているのは自信がないからではなくて、力強い、その一大衆の支持は受けないかもしれないけれども、その一立場的な意見を要求されてると思うんですよ。それにふさわしい声があると思うんですよ。だから、紹介のされかたをみても分かるように、ことさら大学の職名をIさん（アナウンサー）は冒頭とおしまいに言いますし、その一番組全体に権威付けする素材として使われていますので、その当人が「す、す、す、すいません、自信がないんですけど」ってしゃべるわけにいかない。そういうこともあって、始めは声の震えが気になってほんの僅か震えたと思うんですけど、2回目以降からは震えずにできてるのがまー、一番気をつけていること。で、他に困惑したことは、いつ自分がコメントを求められるかってことが分からないわけですよ。Bさんっていうですね、“エコノファイル”っていう番組を（サンデーウェブの）中でレギュラーをもっている元徳島新聞の記者の人がいるんですけど、Bさんの話の時は僕、全然関係ないと思ってたんですよ。で、もしかしたらふられるかもしれないと、ぼーとしてるときにふられたことがあって、で、なんでこんなところでコメントしなくてはいけないのって思って、徳島の観光のことだったんですよ、その週が。で、徳島の観光のことで、「いや、徳島はいいところです。東京（近郊）ならば千客万来であふれかえっているんで、お客さんが少なく、従ってあまり

観光化もされてなくって、徳島のもってる観光資源はものすごく豊かだからまだまだ生かせる」ということを口から出任せで言ったんですけど、話は、突然いつふられるか分からない、いつ席を立てていいか分からない。始めはトイレに行くときも「今行っていいですか？」って聞いてたけど、その次の瞬間に生放送になっちゃうかもしれないじゃないですか。全然分かってないんですよ、僕。で一、それは困りましたね。だから途中Sさんがしゃべる“ワンダフルピープル”ていうところかGさんがしゃべる“吉野川紀行”てところは他の人は基本的に席を立ててるんですけど、始めはその時も席が立てなくて、やっと最近そこはまあいなくていいんだって分かって席を立てていた。というのは、一番最後にコメントをきかれるときに、(録音素材を中心につくられている)“ワンダフルピープル”や“吉野川紀行”でもコメントしなくちゃいけないのかなって思ってたんですよ。だからずっとなるべくいたんですよ。で、どうもね、それに関してはコメント期待されてなくて、最初のニュースの時とかエコノファイルの話の時とか、メインのゲストの話とかでコメントすれば十分だと分かったので、最近は席を立ったりすることもあります。

今まで一番困ったこと

今までで放送中に一番困ったことはですねー、失敗してしまった時のフォローですね。地元ネタをふられた時、吉野川第十堰で、ほくだいたい“じゅうせき”っていうの知らなくて“じゅっせき、じゅっせき”ていってて、“じゅうせき”ってフォローされちゃうんですけど、番組の中で、あの一第十堰のときに、だってなんにも私考えてないわけですよ。で、どちらかといえばね、私あってもいいって思ってるんですよ。で、これ分かんないんだけど、ABC(仮)ののりは、その一6:4ぐらいで十堰に反対してるかんじなんです。社の方針と違うわけですね。で一つまり、第十堰あってもいいっていう主張を言えば社の方針と違ひ、理由を聞かれれば理由なんてないし、「あつたっていいじゃん」って思ってるだけで、困っちゃうわけですよ。で、失敗しちゃったのは、その一前もって朝打ち合わせで、「それは僕答えられませんから。」って言ったのに番組の中でふられちゃった時に、別に怒ったわけじゃないんですけど、困ってしまってますねー、「いや、十堰の問題難しいですよ。Iさんどう思いますか。」ってふっちゃったんですよ。後で考えれば当たり前のことですが、Iさん答えるわけにはいかないわけですよ。Iさんは、日本のマスコミってあれですよ。アナウンサー中立っていう前提があつて、最近でこそキャスターはいろんな意見言うようになったんですけど、放送の会社側の方は、そういう政治的イシューに関して、意見を言わないのが前提じゃないですか。まして、この、第十堰、もめてる話でIさんが「私は個人的には反対なんですけどー、」とか言えるはずがないじゃないですか。Iさん困っちゃって、ちょっと沈黙があつて、「いやー難しいですね。」て話でふられて、私も「難しい問題だとは思いますが、」まー、くだらないことですよ、その「慎重に考えてやっていくのがいいと思います。」ていうことでおわりにしたんですけど、その時は困りましたね。なんか悪いことしちゃったなーて思ったけど、謝りもせず、今にいたっています。地元ネタが困る理由は二つありまして、一つは知識が全くないという問題と、もう一つは地元ネタは利害関係がですね、複雑なんですよ。つまり、第十堰は応援してる人も反対してる人もいる。まっ村のダムも応援してる人も反対してる人もいる、そういう問題に

対して意見言うのは危険ですよ。まして、無知なことを一言でもその一、ばれるようなかたちでいって、ある意見を言うと、その一、反対派の人から大学に文句がくるんですよ。その一あいつは徳大の教員だけれども、全く事実認識を誤って、公共の電波ででたらめなことを言っていると。同じでたらめなことを言っても全国ネタだったら非難されないんですよ。この放送はご存じのように徳島県中心の放送ですから。だからちょっと甘えてるんですが、地元ネタは答えにくいっていう部分があります。他にも困ってることはたくさんありますね。えっとね、でたらめ言っちゃったってというのは今でも心に悔いがありますけどね。あのいや一、困ってることだらけでさ一、吐いた言葉はさあ一、もどってこないからさ一、いや一、人間が悪くなっちゃうっていう不安はありますよね。この間、私、市バスのことで意見を聞かれて、赤字路線を減便していったら、その一どンドン乗る人も利便性が悪くなって減って、また赤字路線が増えて減便が必要になって、縮小再生産でぜんぜん解決にならないから、あの一バスゾーンを作るとかですね、ある路線については黒字転換が無理なら廃止して、タクシー乗車券をその一病院行くとかその一福祉が必要な人には配るっていうねそういう対策をとりなさいって言ったんですけど、後で新聞を見るとね、いや、まっ、その瞬間にもう気付いてたんですけど、これはその一詰めてない主張だなんて思ったわけですよ。その一市民の使う交通機関が黒字でなきゃいけないって必ずしもいえなくて、そういう赤字ならば喜んでかぶるってというのが地方自治体だっというふうにもいいと思うんですよ。その一市役所が提供すべきその一、一番重要なサービスかもしれないわけで、赤字覚悟で、で、利用者が減らないように、むしろ市の補助金を多めに投入して利用者に喜んでもらうっていう、そういう政策がありうるとその瞬間も思っていて、でも、ほら一、その一、両論言うことは要求されていないわけですよ。二つ立場があるっていえなくて、その場合こう一、口をついてでてくるのは直前の打ち合わせで「それじゃ一その一、縮小再生産だ」って言ってたから、その一半分はそういう合意のもとでそういうコメントをしてしまったんですけど、今となっては自分の立場は違っていて、市はそういうところに、その後朝日新聞にもその一ドイツの例とか載っていて、日本の国内の他の市の例も載っていて、大量にお金を投入して、無料でバス運行してる市もあるし、50円とか100円で運行してる市町村もあって、そういうふう書いてあったから、今の立場はこっちなんですけど、こうやって自分の立場が後々変わったことと、あの放送で言った立場が矛盾したままになってる、あるいは、市の人にとっては不愉快きわまりないことをやってしまったわけで、後で追求された時に自信を持って抵抗できない。私は、あの一丁寧を考えずにでたらめ言ってしまいましたって本当謝らなきゃいけないんですけど、そういうことをきっと謝らないまま（過ぎていくんですよ）。

苦手な分野の切り抜け方について

苦手な分野の切り抜け方ですか？これを聞いてくださいって話なんですけど、基本的にはアナウンサーの顔色を見るっていうやり方ですね。もっとひどいことを言えばですね、打ち合わせの時にですね、その一どういうふうにコメントしてほしいかっていうのをにおわせるんですよ、向こうの人が。こういうトーンなら、いやおっしゃる通りですって反応して、ちがうトーンなら、ちょっと顔をしかめる、その通りに答えているわけじゃないんで

すけど、要求されている方向はこの方向なんだな—っていうことを顔色を見たり、打ち合わせの様子を見たりして、その通りに答えているわけじゃないんですけど、参考にして答えたりしてます。あと、ふられちゃ困るときってあるわけなんですよ。今ふられたって何も考えてないよって。今考えてることはくだらなくて言うと恥ずかしいとかですね、あるわけなんですよ。そういうときはやっぱりあたらないようにIさんの方を見ないとか、準備してないってことが明らかかなようにお茶を飲むとか、あたらないように身体メッセージは出すようにしてるんですけど。

コメンテーターする上でのプラス面

コメンテーターする上でのプラス面ですか？つまり本番なわけなんですよ、番組って。だから失敗もするけれども、本番だから自分の頭がまわるってことあるわけですよ。その一皆さんと違って、で、大学院生時代とも違ってその一、試されるって機会が減っちゃうわけですよ、教員になると。学内に他の先生はいるけれども、その一専門が違えばね、人の研究内容については決して直接はコメントしないっていうのが大学の秩序ってものなわけ。そうするとその一皆、天狗になってくわけですよ。番組に出ればね一、その一、やっぱりむちゃくちゃなことを言えばFAXとか電話で非難轟々になっちゃうし、本番なわけですよ。自分が試されるわけですよ。で、そういう機会は努力して作っていかなきゃ本当はいけないわけですけど、それが与えられている、その一、自分のその一これも古い用語なんですけど、知識人としてのその一、生きていく、こう一、大事な条件になってる、生きていく大事な、なんです、その一なくすべきではない生活の一部になってると思いますけど。それと、ABC（仮）に出てるからっていうわけではないんですけど、えっと、常に、ありとあらゆることは研究ネタになりますよ。一番最初Qシートにメモしてるのを横から覗きこまれて、“（ディレクターが）Cueを出してるのをアナウンサーが見てる”とかその一書くわけですよ。覗きこんだ人が「こんなこと書いてる」とか言うわけですよ。そりゃ、その一、半分は警戒なわけですね。自分たちが呼んでるゲストが、なんと自分たちが、観察されていたんだっていう。自分は社会学者だからどこだって観察してるんだっていうですね、その一、意気込みはありましたけど。ありとあらゆることは、その一、自分は仕事に使おうとおもっております。

コメンテーターする上でのマイナス面

コメンテーターする上でマイナスの面もあると思うんですよ。それは悩みでその一、関心が拡散してしまっていて、ありとあらゆることに首をつっこんで、専門研究者としてのその一、仕事をしなければいけないっていう意気込みが薄れる、そういう問題があると思いますね。番組で気のきいたことをちょこちょこって言うだけで、自分がなにかこう、生きていくかがあるようにおもってしまうんじゃないか。あの一そういうところに全く出ずに学会でその一ある狭い領域で評価されることだけしか自分には生きる意味がないんだ、って自分を追い込まないと研究なんかできないっていう面があるとおもうんですよ。いわゆるこれは、地方文化人への墮落の道でもあるという不安があって、それはその一、どこか

でやめるなりしてですねー、あの一、(墮落の道に) 陥らないように気をつけないといけな
いなおもいますけど。

コメンテーターする上でのおもしろさ

コメンテーターのおもしろさはですね、いろいろな人に会える。まっアナウンサーも同じで
すけど、いろいろな人に会えるってのはたいへんおもしろいことですね。あの一とりわけ県
に関わりのあるいろいろな人に会えるってのはおもしろいことであって、この間あの一、“ワ
ンダフルピープル”に出た女性の人は徳大工学部の教員の奥さんなんですけど、北島町
の町立図書館でその一世界の絵本を読む会っていうのをやってまして、で一、もうね、い
かにもそういう人なわけですよ。その一、おしゃれで、それできりっとしていて、すっこ
く頭がいいのね。あの一“ワンダフルピープル”は録音も流してるけども、その場に来て
からしゃべるってときに、その一最後にね、北島町立図書館で世界中の絵本を読む会をや
っていてね、その一「言いたいことありますか」って(曲が流れている間に)言ったとき
に、もう瞬間的に奥さんは、その一、「県とかにね、批判的なことを言ってもいいです
か。」ってお聞きになって、「かまいません。どうぞ言ってください。」ってSさんが言った
ら、実に理路整然と、企画を通すことがたいへんだと、その一、本当に説得力をもって言
えて、そういう人たちが、都市にはいっぱいいて、地方にはあまりいないって思ってたん
ですけど、あーいるんだっていうふうに思うし、チャンスがあれば何かこういう人たちの
企画にその一、参加してみようとも思うし、なんですか、えっと、いろいろな人にあえるっ
ていうのは、Sさんの場合は全国的に有名な人に会えるっていったんですけど、僕の場合
は、その一、徳島県内の特別優れた人に会えるっていうのはおもしろいところ、喜びで
すよね。

K コメンテーターとしての役割

そのね、僕らはその一社に雇われてるわけじゃないわけですよ。常勤として。だとする
のならば、その一、そういう立場を生かしてですね、番組のマネリ化をその一、阻止す
るようなですね、そういう立場での協力者としてあの一、参加できたらな一、って思っ
てますね。あの一、この、“ABCサンデーウェーブ”っていう番組自身その一、社の企画と
いうよりは、アナウンサーのIさんとSさんの企画としてできていて、それは大変すぐれ
た企画だったと思うわけですよ。その一、リスナーには老人が多いですけど、老人向けに
はしないとかですねー。地元向けの放送なんですけど、視聴率なんか気にせず全国ネタ、
例えば、“マンガと文化”なんてそういうことも扱うわけで、志は高いんだけども、ほっと
くとね、だんだんマネリ化していくわけで、半分はそういうIさんたちの希望を叶える
ように、もう半分はIさんたち自身がマネリ化することを、その一、ちゃんと妨害して、
もともとの高い志に戻っていけるように、などというようなことは考えていますけども。
あと、これはぜひとも強調していただきたいんですが、徳島大学ですねー、名をそこで
宣伝してるわけですから、まーあまり本気じゃないですけども、受験生が増えてですね。
あるいはまー、大学の存在感が県内で示せるようになっていようなことは、その一冗談じ

やなく思ってる部分はありますよ。

Kコメンテーターインタビューについての感想

番組中でいつもキョロキョロしているのは、決して落ち着きがないからではなくて、人間観察、例えばアナウンサーの視線を追ったり、ディレクターの指示を見てアナウンサーがどのようにそれに反応しているか、とか、あるいはアナウンサー間での“あ・うん”の呼吸を見てとったりとなどと、ただ単にコメンテーターとして出演しているだけではなく、実はそこでも研究を行っているという。日常生活においても、ありとあらゆることが研究ネタになると言っていたが、どんな小さな事までをも研究材料にしてしまうというのは、さすが社会学者であるなあと思った。

本人自身も言っていたけど、「私よく詰めてない主張を言ってしまって、後で意見が変わってもどうしようもないんですよ」とか「私よくでたらめ言っちゃうんですよ」例えば、上記のインタビュー記録の中で、大蔵省は何も悪いことしてないんだって、大蔵省を誉めているようなニュアンスだが、実は大蔵省汚職も問題になっているし、またこの部分のコメントでKコメンテーター自身がA対Bに陥っている。これはKコメンテーター“コメンテーターとしての役割”に反しているのでは……。あるいは吉野川第十堰問題に関して、以前は、「あったっていいじゃん」と、まあ言ってみれば賛成派だったのに、今では6：4ぐらいで反対派だそうだ。人間誰しも意見が変わるということはあって当然だが、しかしコメンテーターであるからには、一旦発した意見を最後まで責任を持って貫き通さなければいけないのではないか。そういった意味でコメンテーターとしての慎重さに欠けているように思える。

Kコメンテーター自身の“辛口”っていう意味は、人や意見を批判するというのではなくて、人と違った意見（一般的な意見はアナウンサーが言う）を言うことであって、それは、なかば“ABCサンデーウェーブ”側から要求されているのだと言う。それは今年の年賀状にも表われていて、Iさんから「今年も辛口のコメントよろしく」って書かれていたそうだ。“ABCサンデーウェーブ”では、コメンテーターに辛口意見を言ってもらって、それでその意見に対してアナウンサーが中立的な意見を発して、辛口コメントを中和するという形で、番組が成り立っている。そういう構成をとっているからこそリスナーに、より説得力を持たせるのだらう。

大学の教員であるだけに、さすが話すのが上手く、事細かなところまで、丁寧に話してくれた。こっちが1質問するのに対し、3ぐらいの答えが返ってきたので、インタビューは思ったほどスムーズにいったので、その点は非常にありがたかった。

インタビュー全体についての感想

社会調査実習のインタビュー班として、アナウンサー、ディレクター、コメンテーターの計6人の方々に、インタビューをすることになった。しかし、何を聞いたら調査として有効なインタビューになるのか、ということがわからず、単なる素人がわからないことを質問しただけ、というようなもので終わらないように、6人の方それぞれへの質問の内容を考えるのに、3人で四苦八苦しした。

始めの頃は、インタビューをスムーズにするための下準備（番組の名前、コーナーの内容、放送曜日、時間など）が不十分だったり、機材のチェックに見落としがあったり、インタビューの中で話を進めるのが下手だったり、終わってから反省することが多かったが、回を重ねるうちに、少しではあるが上達したのではないかと思う。

一応メインのインタビュアーを一人、メモとり、機材調整に残りの二人、と先生という構成でインタビューに臨んだが、メインだと思えば緊張してしまい、途中でつまってしまうことが結構あった。そんなときは、周りの人たちがすかさずフォローをしてくれ、その時に出た新しい質問によって思いもよらなかった話が聞けたりした。

「聞かなければわからなかったことを聞くためにある」インタビューといえるまでになったかどうかには、まだまだ改善の余地があるが、お話を聞かせていただいたのが、アナウンサーという話すこと、インタビュー（すること）のプロだったことが大きな助けとなり、少しは調査に貢献できるようになったと思う。

質問の順番が前後してしまったり、疑問に思ったことをうまいタイミングで聞けなかったりと失敗が多く、また稚拙な質問にも、根気よく答え様々なエピソードを聞かせて下さった皆さんに感謝したい。ありがとうございました。

参考文献

日本民間放送連盟編、1991、『放送ハンドブッカー文化をになう民放の業務知識一』
東洋経済新報社。

前川清次、1989、『Audio Visual 時代のサウンドミクシング』 兼六館出版。

参考資料

ABC（放送局、仮名）ラジオ番組表、1997、1998、各月版。

KRT 関西放送文化連盟、出版年不明、『KRT アナウンサー育成部の御案内』

KRT 関西放送文化連盟から入手。

放送芸術学院（BAC）、出版年不明、『書名不明（入学案内パンフレット）』

放送芸術学院（BAC）から入手。

放送芸術学院（BAC）、出版年不明、『書名不明（設備概要）』 放送芸術学院から入手。

水谷謙吾，出版年不明，『日本語音声学一話しことば教本』 1997.9.9. 関西放送文化連盟.
ビジュアルアーツ専門学校（大阪），出版年不明，『書名不明（学校紹介パンフレット）』
ビジュアルアーツ専門学校（大阪）から入手.

第3章 放送人においてレリバントなこと—放送関係者養成専門学校を訪ねて—

樫田美雄・森川弘章

0. はじめに

われわれ2人（樫田と森川）は、1997年9月9日と9月10日の両日、大阪市内にある3つの放送関係者養成専門学校（【資料1】【資料2】参照）を訪ねて、参与観察およびインタビュー調査を行った。以下はこの「専門学校訪問調査」の報告である⁽¹⁾。

1. 目的

1-1. 研究の目的

ラジオスタジオで働いている多様な人々（放送関係者）は、大きくくくると2種類の人に別れるように思われる。一つは、放送人として専門的に訓練を受け、その訓練に基づいた職業的行動様式に従って振る舞っている人々（アナウンサー、ディレクター、メカニック担当）であり、もう一つは、専門的訓練を受けず、非職業的に放送に関わっている人々（コメンテーター、ゲスト、タレント）である。

この2種の人々のうち、ここでは「専門的訓練を受けた人々（以下“放送人”と呼ぶ）」がいったいどのような訓練を受けているのか、を実証的に調べることによって、『ラジオスタジオ』という意味空間の編成のありように迫っていきたい。というのも「放送人」こそが、『ラジオスタジオ』という“特殊な空間”の“特殊性”を体現するかたちで『ラジオスタジオ』を“志向”し、そして、『ラジオスタジオ』を作り上げている全構成員をリードしていると期待されるからだ。

探求に当たっての中心的テーマは「レリバンス」である。すなわち、放送関係者養成専門学校⁽²⁾において、いったい放送人になるということとはどのようなこととして教育されているのか（なにができる人として「放送人」は教育され、なにに気を付けるべき職業として「放送という業務」が扱われているのか）を確認することができれば、それが「放送」というものを作り上げている社会的関心の専門的な形だと見なすことができるからである。

1-2. 予備的考察：対象設定の問題—放送の現場と教育の場との異同—

しかし、上記のような研究目的にもとづいた研究を行うには、「研究の対象設定の問題」に関して若干の予備的考察を加えておく必要がある。というのも（本報告書のインタビュー記録＝第3部第2章＝でもたびたび語られているように）、ラジオスタジオでの専門的業務はその実際部分になればなるほど「ON THE JOB TRAINING」としての熟達が尊重され、仕事を体で覚えることが称揚されているからだ。すなわち、「就職前の教育の場で教えられていることが、実際の現場で実行されていることと重なるとは限らないのでは

ないか？」という疑問が有力なものとして浮かび上がってくるのである。

この問題に関するわれわれのとりあえずの回答は以下の通りである。

たしかに、実際の現場と教育の場は場面が異なる。けれども、カテゴリーとしての「放送（スタジオ、放送人、等も同様）」は、いわゆる現場のみで運用されているのではなく、社会の他の場面でも運用され、そのような運用も意味を持っている。したがって、教育の場で「放送」がどのように扱われているか、ということは、それ自身、少なくとも「教育の場における『ラジオスタジオ』研究」としては有意義な検討課題となりうる。

上記のような問題とその処理策に注意しつつ、参与観察とインタビュー調査を行った。

2. 調査の概要

調査対象としては、大阪府の電話帳に基づいて、内容にバラエティがでるよう以下の3校を任意で選んだ。すなわち、アナウンサーの養成を主とする「関西放送文化連盟」、アナウンサー（非常勤リポーターを含む）・ディレクター・メカニックの三職種のすべてに対応した教育をしている「放送芸術学院（元東通放送学院）」、そして、メカニック（録音スタッフや技術ディレクター）の養成をしている「ビジュアルアーツ専門学校大阪（元大阪写真専門学校）」の3校である。参与観察として全ての学校において講義風景（実習風景）を参観した。また、インタビューには、各校の教務担当者および講師に応じて頂いた。インタビュー期日と所属は以下の通り。

= 9月 9日 =

1) Kさん（関西放送文化連盟 教務部長・講師）

= 9月 10日 =

2) Aさん（放送芸術学院 教務課 総合タレント学科担任）

3) Sさん（放送芸術学院 講師 オフィスキューワード所属）

4) Oさん（ビジュアルアーツ専門学校 マネージャー）

4) Iさん（ビジュアルアーツ専門学校 学務部音響芸術学科・助手）

また、「関西放送文化連盟」および「ビジュアルアーツ専門学校」においては、許可を得た上で講義風景のビデオ撮りも行った。調査地に滞在中から二人は、これら資料をもとに討論を繰り返し、資料の分析を行った。

3. 結果

3-1. 関西放送文化連盟での授業について

関西放送文化連盟は、職種としてはアナウンサーのみを集中的に養成している。そこでの授業編成（3時間）は、以下のとおりであった（【資料1：スタジオ内景】参照）。

- 1) 漢字練習……黒板に10語の漢字を書き、学生を当てて読みを答えさせ、かつ意味も問う。全ての単語を当て終わった後、発声練習も兼ねて皆で読む。
例：拉致 「らち、つれさること」
- 2) 口の体操……テキスト『日本語音声学－話し言葉教本－』にしたがって、発音練習を行う。アクセント形状（平板、頭高形、中高形、尾高形）にも注意。

例：アエイウエオアオ カケキクケコカコ ……

愛 合う 合え 青

あるときは蟻あり ないときは梨もなし

- 3) 天気予報読み……FM 802 の本物の原稿を利用して、天気予報読みの練習。プリントを配布し、各自練習させた後、マイクを学生の前に置き録音する。関西弁アクセントの矯正が繰り返し指導されていた。

例：「～でしょう」は関西弁では3拍子だが、それを標準語化（2拍子）するよう指導がなされていた。講師の発声も標準語。声の高さのコントロールのために、講師が自らの声の高さを目立って上げる、というテクニックが使われていた（考察：4-1、4-2を参照）。

- 4) 近県の天気予報……ただの表の天気予報原稿をもとに、いかに言葉を足してそれを実際の天気予報とするかが学習されていた。（【資料3：「近県の天気」原稿】参照）。読み上げが自然に聞こえるための工夫が教授されていた（考察「4-3：自然さをつくる」参照）。

- 5) スタジオ実習……学生を2人ずつスタジオに入らせ、「近県の天気予報」の原稿を読ませていた。さらに、録音の結果を一緒に聞きながら指導していた。
※講師は「あまり下（原稿）を見ず、マイクを意識してね」と指導。

- 6) 講義室で置換法の訓練……3つのやり方で、「置換法」の練習がなされていた。

すなわち、

①ものを見て10の言い換え（表現）を考える訓練

例：定規を見せて、「これは私の定規です」、「これは私が買った定規ではありません」、「この定規は図を描くときに使います」……

②今日はどんな日か、学生全員（5人）に6個づつ言わせる訓練

例：「曇り、H9年9月9日、救急の日、秋、サンマのおいしい季節、梨のおいしい季節、……」

③②で出てきた30個（5人×6個）の言葉をつなぎ、文にして話す。

目的：スタジオ内でいきなり数分つないでくれと、言われたときに困らない、レポーターとして出たときに話せる。

授業のあと、教務部長のO氏にインタビューを行った。

3-2. 放送芸術学院での授業について

放送芸術学院は、学校法人立ではあるものの、無認可の「専門学校」である。無認可にしているのは、実習を自由にカリキュラムに組み込むためであり、優秀な学生はそのまま実習先に就職していくという。コースは2年コースと1年コースがあり、学科によって休む曜日は異なるが、週休2日である。

授業として、「ナレーション実習」（S講師）と、「番組構成」（A講師）を参観した。

授業の構成は以下の通り。

★「ナレーション実習」（「総合タレント系学科」授業、90分、at 音声実習室、学生10人）

講師は、事務所所属のフリー・アナウンサーのS講師

- 1) 発声練習……原稿読み、まずひとりに読ませ、次に別の一人が読み、その全体を全員が読み、また先の部分を当てられた一人が読む……。
- 2) 1分で自己PR……自己PRテープの制作を最終目標とする。原稿も学生がつくる。読み上げた原稿を講師がコメント。
- 3) 番組紹介等のナレーション録音……発音・イントネーションの指導をしていた。また、講師は指導の際に、方言の使用を避けなかった。
例：「京都会館の『ん』が抜けてるんねん」（語尾に注目、関西弁か）

★「番組構成」（「放送クリエイティブ系学科」授業、90分、at教室、学生22人）

講師は、フリーの放送作家のA講師

講義内容は、「新聞・雑誌ネタよりの構成」（TVの放送台本）。

- 1) 講師の講義……伊勢新聞の記事（古墳が発掘された場所のそばで、私的に竪穴住居をつくった人についての報道）を使って講師が台本化の枠組を示す。
- 2) 学生の実習……学生が台本を作る（素材は「音楽を聴いて育った野菜」という新聞記事）。その間、講師は机の間を回って質問を受ける。
- 3) 学生の発表……学生に台本を発表させて、講師がコメントする。

講師のコメントの要旨

①台本の書き方に決まりはないが、わかりやすいもの、ディレクターに演出イメージをわかせるものであること。番組の段取りだけでは不適。

②台本の書き方としては

- ・必要に応じセリフを入れる
- ・「質問-応答」の組み合わせを使う
例：「この2つのトマトはどう違うのでしょうか」
(ハイケア=高度管理=トマトは、水耕栽培+クラシックを聞かせている)
- ・アイデアが重要
- ・レポーターの語りだけでなく、ナレーションも入れる
- ・新聞記事から言葉をとってきてもよいが、話し言葉に直して使う。
- ・話をおもしろくするための工夫で、真実を弱めない程度で誇張してもよい。
例：レポーターが貫頭衣を着て登場するなど
- ・あまりウソをつくのはだめ

授業のあと、S講師にのみインタビューを行った。また、A教務課職員=講師併任=にもインタビューを行った。

3-3. ビジュアルアーツ専門学校大阪での授業について

ビジュアルアーツ専門学校大阪では、クリエイターを養成することを目的とした学校である。まず最初にOマネージャーの説明を聞き、その後I助手に「デジタル・ミキサー卓の操作方法」を実演してもらった。最後に、「録音実習」の授業を見学させてもらった。

★Oマネージャーの話

- 1) 音響芸術学科・ラジオ番組制作専攻では、ディレクターの養成は行っておらず、ラ

ジオドラマづくりを行っている。

- 2) マニュアルにないような高度な技術も実習の中で教えている。
- 3) ディレクターとメカニック担当との間の仕事上の境界は、マニュアル化されていない。けれども「あうん」の呼吸がプロの間にはある。

★デジタル・ミキサー卓の操作方法（I助手）

- 1) 最近ではデジタル録音が主流である
- 2) 今年（1997年）2月に、新型のデジタル・ミキサー卓『YAMAHA O2R』（68万円）を導入した。
- 3) 先行機種からの改善点が多数ある。
 - ・普通のアナログミキサーでは、相対的にしか強調できなかったが、デジタル化したため、個別の波長に対する絶対的な強調が可能になった。
- 4) しかし、放送局ではまだこの機械を導入していないから、これを学んでも現場に出るととまどったりする、ということが起こりうる。

★「録音実習」（講師氏名不詳、スタジオ・インフィニティ、少なくとも学生4人）

- 1) ギター演奏を録音する実習、ほとんど個人指導
- 2) メカニックのトラブルで音が出ない際に、それぞれが独り言でいう言葉が（比較的大きな声で発話されているため）全体に共有されて結果として、問題が解決されていた。

例：原因を探す＝マイクの交換→マイクではない→ケーブルの交換→ケーブルではない→操作卓のモジュールの切り替え→成功

トラブルの時事刻々の状況は、「独り言の共有」によって、全員に共有されていた。

4. 考察

4-1. 方言の位置づけ

関西放送文化連盟では、教師も標準語を話し、学生も標準語を話すべく訓練されていた。それに対し、放送芸術学院の授業では、講師みずから方言で指導をしていた（「3-2」の「ナレーション実習」参照）。これは、育てようとする職種が、アナウンサー（関西放送文化連盟）であるか、タレント・リポーター（放送芸術学院）であるかの差によるのだろう。しかし、「[アナウンスの] 仕事では関西弁も使うときがあるが、[アクセント辞典などの] 本がないので、耳で覚えるしかない」という談話が「ナレーション実習」のS講師から採れていることを考え合わせると、少なくとも放送芸術学院から就職するような職種のアナウンサーにおいては、放送人だからといって、標準語教育の徹底が必要だと思われる訳ではない、といえるだろう。

4-2. 学校でのテクニック/現場でのテクニック

関西放送文化連盟では、様々な「教えるテクニック」が使われていた。たとえば、学生の声の調子が高いときに、それを低めるために講師はより高い声で話すというテクニックが使われていた（より高い声を聞かされると聞かされた方の声は低くなるという＝講師談

=)。これは、「まねをさせる」以外の教育方法が、放送関係者養成学校で使われている例として評価することが可能だろう。「1-2：予備的考察」で述べたこととも関連してこの部分は重要に思われた（学校でなされていること=文化=と、現場でなされていること=文化=が異なっている可能性）。

4-3. 「自然さ」をつくる

関西放送文化連盟においては、アナウンサーの技術として、放送芸術学院においては放送台本制作者の技術として、「自然さ」を作るテクニックが教授されていた。すなわち、「関西放送文化連盟の授業では、読み上げ原稿の形になっていない表を天気予報として読む際に、「原稿にことばを書き加えないようにする」ことが指示され、その理由として「原稿に言葉を書き加えると、①書き加えないと読めなくなる、②つくったように聞こえる」の2点が欠点として挙げられていた。さらに「とちりながらしゃべったほうが自然でもある、流暢に天気予報を読めればわかりやすいというわけではない」とも付け加えられていた。

また、放送芸術学院の授業では、古墳跡での私設竪穴式住居を紹介する際に、「貫頭衣」を着てレポーターが登場するような質の台本が、わかりやすい、オーソドックスな台本であるとして評価されていた。連想の自然な流れとして「竪穴式住居／貫頭衣」が採用されたといえよう。とするならば、これも一種の「自然さ」づくりのテクニック教授とみなすことができるように思われる。

このような「自然さ」へのこだわりは、ライブ感重視の現在の放送界の趨勢とも関係があるかも知れないが、より根元的には「語りかけ」としての質を維持するという意味があるように思われる（ちなみに、言い回しの上でも「海上」を「海は」、「所により」を「所によって」と言い換えて、話し言葉としてなじみのある言い回しとするよう指導がされていた）。すなわち、「リスナーへの志向性」がここで“放送人”にリレバントなものとして扱われている、と結論づけてよいのではないだろうか（「話し言葉化」については、「3-2」の「番組構成」の部分も参照のこと）。

4-4. リスナーへの志向性

「リスナーへの志向性」が重視されている証拠はまだほかにもある。たとえば、関西放送文化連盟の「スタジオ実習」において、「原稿ではなく、マイクを意識するように」と指導されていたことはその例であろう。

4-5. 常識的な“意外性”-放送（人）に要求されるもの-

放送文化連盟の「置換法」の訓練は、授業を担当していた教務部長の説明によれば、レポーターとして現場に出たときのフリートークのための訓練だという。すなわち、リアリティとライブ感のある実況中継をするための訓練であると言うのである（本章の「3-1の（6）」での記述を参照のこと：具体的な指導においては、少し気が効いていて、それ

でいて常識の再確認の範囲に収まるような水準での連想が称揚されていた。素早さの方が、新鮮みよりも重視されているようだった)。しかし、この目的はその訓練法が実際に載っているテキスト〔水谷、出版年不明〕での訓練目的とは異なっている。テキストでは置換法は、別の目的(対面時話の引き出し方)の訓練のための練習方法として存在しているのであり、フリートークのためにこの練習方法を使っているのは、教務部長のOさんの創意なのだという。この食い違いが意味しているものは何だろうか。Oさんの創意が志向しているものを確認することがここでは重要だろう。そのように考えてみると、ここにも「リスナーの影」が見て取れるように思われる。すなわち、「どんなものについてもちよっとだけ新鮮で、しかも多くの人に理解が容易な言い換えがすぐにできるようにする」この訓練は、「リスナーに聞き飽きない、けれども理解可能な放送をする」というアナウンサーへの職業的期待とマッチしたものと考えられるのではないだろうか。発想法として見たときの「置換法」の特徴＝「オリジナリティより、わかりやすさ重視」は、やはり「リスナーへの志向性」が放送関係者養成専門学校で重視されていることの証拠といえよう。

なお、「放送芸術学院」においてなされていた「1分で自己PR」(in『ナレーション実習』)においても、同様の「リスナーへの志向性」への関心を見て取ることができるように思われる。すなわち、そこでは講師が「個性のどやっ〔文章のこと：檉田・森川注記〕を何でも引用したら〔いい〕」と発言し、「引用で組み立てる個性」が称揚されていた。この授業はタレント養成の授業であって、アナウンサー養成とは異なるが、放送において評価される個性が「100%のオリジナリティ」というよりも、「親しみやすいオリジナリティ」＝「常識的な“意外性”」と呼べるような穏当なものであることの例証にはなっているだろう。

「常識的な“意外性”」は、放送人の個性(として称揚されているもの)の特徴であるだけでなく、放送台本の特徴でもあった。「3-2」で触れたように、放送台本を添削する講師は、その台本が一方では「おもしろいもの(興味を引くもの、意外であるもの)」であることを要求しつつも、その一方で「あまりウソをつくのはだめ」と意外性の程度を抑制していた。

4-6. “独り言”の共有-プロであること-

「3-3」の「録音実習」のところでみたように、「録音室」では、生じているトラブルの時事刻刻の変化が、「独り言の共有」という形で、全員に同時的に理解されていた。われわれはそれが講師からの指示がない中で当たり前に行われていたことに注目したい。すなわち、このような音声を利用した業務情報の伝達テクニックは、身体化された水準に達しているのである。このような身体化が完成したとき“プロ”になったと呼ばれるのではないだろうか(プロは「あうん」の呼吸が身に付いているという「3-3」でのOマネージャーの発言も参照)。

5. おわりに

本報告では、大阪にある3つの放送関係者養成専門学校を訪ねて、見たこと・考えたこ

とを報告してきた。このような「学校での実践」についての発見がそのまま「放送スタジオでの実践」についての発見として読み替え得るものである、と見なすわけにいかないことについては、「2-2：予備的考察」で述べた通りである。しかしながら、たとえそれがスタジオ現場のものと違っているにしても、学校現場での「放送」の扱われ方のなかには、われわれにとって有意味な「放送（人）」への標準化された期待が含まれているのではないだろうか。今後は、調査時に撮影したビデオの分析もすすめて、この期待のよりくっきりとした相貌を明らかにしていきたいと考えている⁽⁴⁾。

注

- (1) 『社会調査実習報告書（第一版）』には、本報告は掲載されていない。本報告書（第二版）掲載分が「専門学校訪問調査」に関する最初の報告である。
- (2) 放送関係者とここで呼んでいるものには、お笑いタレントなどが含まれる（実際に「放送芸術学院」で養成している）。
- (3) 本報告は、その元になるレポートを森川が〔森川、1997〕として作成し、樫田がそれを再編のうえ、加筆修正を加える形で作成した。

参考文献

- 水谷謙吾 出版年不明 『日本語音声学—話しことば教本—』（1997.9.9『関西放送文化連盟』にて入手、徳島大学総合科学部樫田研究室に所蔵）。
- 森川弘章 1997 『「関西放送文化連盟」・「放送芸術学院」・「ビジュアルアーツ専門学校大阪」見学についてのレポート』（徳島大学総合科学部樫田研究室に所蔵）。
- 日本民間放送連盟（編） 1991 『放送ハンドブック—文化をになう民法の業務知識—』東洋経済新報社。

【資料1：スタジオ内景（関西放送文化連盟）、1997年9月9日撮影】



【資料2：訪問先一覧】

(1) 株式会社 関西放送文化連盟

〒540 大阪府中央区内本町2-3-11 TEL:06-943-1467

<地下鉄谷町線谷町4丁目駅③出口より徒歩5分>

学科：アナウンサー育成部・本科、学術科、講師コース

(2) 学校法人 放送芸術学院

〒550 大阪府西区北堀江2-4-4 TEL:06-533-5050

<地下鉄四ツ橋町線四ツ橋駅徒歩5分>

学科：番組企画系学科、放送クリエイティブ系学科、制作エンジニア系学科、総合タレント系学科、放送美術系学科、放送デジタル系学科、

(3) 学校法人 大阪デザイナー学院 ビジュアルアーツ専門学校大阪

〒530 大阪府北区曾根崎新地2-5-23 TEL:06-341-4407

<JR大阪駅より徒歩七分>

学科：音響芸術学科（ラジオ番組制作専攻を含む）、放送・映画学科、マルチメディア学科、写真学科

【資料3：「近県の天気」原稿】

京都府南部			兵庫県南部			大阪府		
風	天気		風	天気		風①	天気②	
北西の風	201 曇り時々雨 山沿いに晴れ 所により雪		や北や西の強い風 一時	101 晴れ時々曇り 所により雪		や北や西の強い風 一時	101 晴れ時々曇り 山沿いに晴れ 所により雪	
海上	ト後波 =ル01メ 51メ 1ル		海上	ト後波 =ル01メ 51メ 1ル		海上①	海上②	
6-12℃ 20%	12-18℃ 10%	18-24℃ 10%	6-12℃ 20%	12-18℃ 10%	18-24℃ 10%	6-12℃ 10%	12-18℃ 10%	18-24℃ 0%
予想気温 京都			予想気温 神戸			予想気温 大阪		
最高 11度	平年比 -2度 今日比 1度		最高 12度	平年比 -1度 今日比 1度		最高 12度	平年比 -2度 今日比 1度	
最低 5度	平年比 1度 今日比 0度		最低 6度	平年比 0度 今日比 1度		最低 7度	平年比 1度 今日比 1度	

十二月

一日

十八時

発表

御中

1 近県の天気

1999年12月18日(金)17:36/2001080183 P

FROM

執筆者一覧

〔空間班〕

奥田さやか・杉野ふき・高木竜輔

〔人間班〕

津村知世・寺尾香名子・出口陽子

〔インタビュー班〕

荒木絹子・藤井浩人・李裕美

〔FMやまのは班〕

森川弘章

〔授業担当教員〕

檜田美雄

◎第1版と第2版の異同について

第2版では、第1版の誤植を訂正したほか、「研究概要」および「放送人においてレリバントなことー放送関係者養成専門学校を訪ねてー」が付加されている。

ラジオスタジオの相互行為分析

ー平成9年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第二版)ー

1998年 2月 3日 第1版発行

1998年10月17日 第2版発行

編集 榎田美雄

発行 徳島大学総合科学部人間社会学科国際社会文化研究コース
現代国際社会分野『社会調査実習報告書』刊行プロジェクト

〒770-8502

徳島県徳島市南常三島町1丁目1番地

☎(0886)56-9308 (榎田研究室)